Faster Bigger 1

げんじあきら

目次

マイ包丁

戦車も動かせたアースバッテリー

歳の留学生ジニ
華美美鈴

華美美鈴をかくまってほしい

空メール

アメリカに電話した

バンコクに行ってきます

走って車で北千住へ

四面楚歌

アース戦車のすっぱ抜き

豹のように走った

サケの揚げ物ジャワカレー

０時30分に上海に出る

３回目の出国トライ
先里風香

プサン

アースライティング３０００万記念式典

湯花わさびの森
わさびのたたき

わさびのたたきとアジのたたき

ジャカルタ－羽田50分

１７８キロの速球を投げる

２１１４年７月11日だった。金曜日である。ニューヨークゴジラと東京ライオンの試合が行われている。東京で今晩ある。
プロ野球は、アメリカ球界の日本興行が行われるようになって、球団がゴチャゴチャになった。
もう日本人の球団とかアメリカ人の球団とか言えなくなった。
来年からは中国の球団が日本興行を行うことでモメている。
こんなことになった最大の理由は、飛行機の高速化にある。
先月、羽田ー北京を47分という新記録が生まれた。羽田ーロスは２時間20分である。
こうなってくると、ボーダレスどころではない。儲けのエクスタシーは勝手に動きはじめる。
ニューヨークゴジラのエースなどは、１７８キロの速球を投げる。
１００年前には20才の若者が１６０キロの速球を投げてみんなが驚いた。
今では、１６０キロの速球などはフツウの速球である。
１７８キロの速球を投げるニューヨークゴジラのエースは、身長が２メートル31センチである。プロ野球の選手としては大きい方だが、バスケの選手には、２メートル88センチの選手がいる。
現在の世界で最も身長の高い人は、３メートル２センチらしい。プロのバスケやバレーボールの選手には、２メートル50センチの人がチームに１人はいる。

湯花邪無

湯花邪無は、アースカーのスイッチを切って、マンション地下のガレージからエレベーターに乗った。ジャカルタを出たのが18時だった。日本時間だ。羽田に18時50分、北千住のマンションに19時50分だ。相変わらず、車の方

が時間がかかる。
湯花邪無は、ジャカルタに通勤しているわけではない。ただ５００ドル10枚綴りのチケットを買っている。日本ではタクシーの方が高い。１ドル１００円である。もう１００年１ドル１００円が続いている。ジャカルタのルピアは１円50ルピアになっている。１００年で２倍ほどルピアの価値が上がった。
なんたって３億３千万人の人が住んでいるのだ。
１人あたりの収入は多くなくて、決して豊かではないのだが、国家経済は人口である。もうすぐアメリカを抜いて世界３位の人口になる。経済だってインド、中国、アメリカ、インドネシアになっている。日本は40年前にインドネシアに抜かれた。
ちなみに、日本の人口は８４００万人である。もう小国になりつつある。
ジャカルタのカレット駅にスパイスのお店を持っている。工房がタベットにあり、45種類のスパイスを生産している。工場ではない。工房である。
日本では、新宿南口に大きなショップを持っている。ここから全国にネット通販をやっている。店舗は１つだけだ。
「おかえりなさい」
「来てたのか」
「電話すればよかった？」
「カギ預けてるんだから自由にしてください」
「奥さんでもないんだけど」
沢風ゆりである。
北千住のスポーツジムでインストラクターをやっている。
湯花邪無が会員になっている。帰りに高級焼き鳥のお店で飲んで、湯花邪無のマンションになった。２１１３年11月だった。
３回目に鍵を預けた。時々掃除をしてくれて料理もしてくれている。
「シャワーですか？ごはんですか？それとも？」
「それともがいいです」
「言わなきゃよかった」
「危ないんですか？」
「うん」

沢風ゆりは、拒否しながらもベッドルームへ脱ぎながら向かった。
長身でスラリとした沢風ゆりの歩きは速い。
「ガス見てくる」
「後でいいです」
沢風ゆりは、湯花邪無に任せるのだが、すぐに湯花邪無を見下ろしてしまう。
沢風ゆりのあえぎは、スポーツジムでダンスをしている時の息づかいに似てくる。ドンドン激しくなってくる。
「先にシャワーしてて」
「ジャガイモサラダやっちゃわないとおいしくなくなるから」
「冷蔵庫の金庫のお金使ったから」
「どうぞ」
湯花邪無は、沢風ゆりがお金に困らないように、冷蔵庫に蓋付きのコップを置いている。お札とコインが常時入っている。10万円くらいだ。
「帰るのですか？」
「用事ある」
「どうもありがとう」
「バイバイ」
「掃除もしてくれたんだ」
「バイバイ」
湯花邪無は、決して沢風ゆりを引き止めたりしない。湯花邪無と一緒に住みたいとは言わない。何かあるのだ。それを聞き出そうとは思わない。
結婚したいと言ったら、来なくなる気がしている。

アースカー

湯花邪無は、７時には起きてシャワーをした。
沢風ゆりがパンを買っておいてくれている。ぶどうパンだ。
７時30分には着替えて出かける。新宿南口にあるスパイス専門店のスパイス湯花に向かう。

アースカーで向かう。
アースカーが開発されたのは、２１００年だった。前兆が何もなかった。いきなり、日本人の先里風香によって開発された。動力である。
車はもちろんのこと、スマホなどの電池を使う電化製品がアースバッテリーにドンドン変わった。２１１４年には、アースカーと同じように50％がアースバッテリーになっている。
先里風香は、世界特許を持っているのだが、無償で公開している。誰が生産をはじめてもかまわない。
２１０２年に日本のバッテリーの大手の会社が、発火により全面回収して、先里風香は、アースバッテリーのマークを発行することにした。販売価格の０・５％をアースバッテリーのマークの使用料として納める。
もちろん、特許を無償公開しているので、アースバッテリーを生産することは自由なのだが、生活者は、アースバッテリーのマークのないアースバッテリーを信用しない。
先里風香がどこにいるのか誰も知らない。フロリダのワールドバッテリーにいるといううわさがあるが、誰も見たことがない。
世界的な発明賞を何度ももらっているが、常に、華美美鈴が代理で出席している。
アースバッテリーの世界シェアーの32％を持っているフロリダのワールドバッテリーは、誰も手を出さなかった先里風香の全面協力をしたといわれている。先里風香もフロリダにいるらしいのだが、誰も知らない。
華美美鈴は、ワールドバッテリーの社員らしいが、やっていることは、アースバッテリーのマークの管理である。それと、先里風香の広報である。
ワールドバッテリーのフロリダ工場の周辺には、世界からアースバッテリーの工場が集まっている。自由に生産できるのだが、ちょっとしたことができないことが多い。それがノウハウというものだ。
どういうわけだか、アースカーは80キロしか出ない。ガソリンや電気や水素に比べて、ステーションも要らないしコストもゼロなのだが、まだ世界シェアーが50％にしかならないのは、スピードのせいだ。
湯花邪無も、時々イライラする。こんなすごい高速道路があるのに、80キロしか出せないのはおかしい。

それでも湯花邪無は、コンパクトなアースカーに乗っている。スパイスは、自然の食べ物のようにしていないといけない。イライラするがガマンしている。
先里風香にしかわからない。どうして80キロしか出ないほどのパワーしかないのか。工場の電源には使えない。最近はパソコンすべてがアースバッテリーになっている。工場の機械は動かせない。
機械がドンドン省エネになっている。小さくなっている。

スパイス湯花

「おはようございます」
「おはよう」
新宿南口のスパイス湯花は、水野まさみにお願いしている。多分45歳くらいだ。湯花邪無が新宿南口にスパイス湯花を開いた時から店長をやってもらっている。２１０９年だった。
「昨日夜？」
「ええ」
「ジャムさんお電話です」
湯花邪無はジャムさんかミスタージャムと呼ばれている。ここではだれも社長とは言わない。それが湯花邪無の考えである。
28歳でジャカルタのカレットにスパイスｙｕｈａｎａを開いて、タベットにスパイス工房も開いた。29歳で新宿南口にスパイス湯花を開いた。
通信販売のオペレーターが25人いる。
「もしもし湯花です」
「ニューヨークゴジラと東京ライオンの試合ですか？」
「今日はちょっと約束があります」
「こちらから電話しますので」
「よろしくお願いします」
上海ドラゴン主催のチケットも売り出されている。まだ太平洋リーグに入っていないのだが、オープン戦を行っている。リーエンジンという２メートル

41センチのピッチャーがいて、１７５キロの速球を投げる。上海ドラゴンの売りである。
もう、日本もアメリカも中国も、人口減少が著しくて、みんなで協力しないと、プロリーグを維持できない。
日本など、野球部のない高校が多くて、甲子園での全国大会が、どこまで維持できるかと言われている。
日本の高校野球の団体は、アメリカと中国と韓国とオーストラリアと台湾に呼びかけている。
夏の甲子園大会を、太平洋大会にしたがっている。
「今日は７月の誕生日会だけど」
「承知しています」
「断ったの？」
「ええ」
水野まさみは母親か姉のように湯花邪無に言う。
水野まさみがいなかったら、新宿南口の44名の全員を集めて食事会などできない。
今日は、スパイス湯花のスパイスを使ってのベトナム料理である。もちろん、７月誕生の社員の誕生会である。
ベトナム料理のレストランから出張料理をしてもらう。
ホテルのパーティ会場を借り切っている。そんなに大きな会場ではない。
スパイス湯花には会議というものがない。販売目標がないからだ。計画もない。今年の販売目標など誰も知らない。スパイス湯花のスパイスは、高品質低価格である。テレビも雑誌も宣伝などしない。しかし、２１０９年以来、毎年50％増しに売上げと利益が増えている。
「使っていただいたらわかる」
サンプル作戦なのだ。
新宿の駅でサンプルを配っていない日がない。渋谷でもやっている。池袋でもやっている。
10人で梅田で大量にサンプルを配ったこともある。
湯花邪無は、経営者として成功して有名になりたいわけではない。スパイス１つでこんなにも食事が豊かになることをわかってほしいのだ。

12時になった。
12時になったら、リビングでみんなで食事をする。電話のコールもインターネットだけにする。12時から13時までだ。
交代で何かをつくる。
「今日はなんですか？」
「ナポリタンとジャワスープ」
湯花邪無も自分で持ってきてみんなと一緒に食べる。
女性社員が35人である。オトコは９名しかいない。
オンナ中心に会社をやるという考えは、湯花邪無の考えである。スパイスを買うのはオンナだからだ。
多くの食品会社から業務用のスパイスの依頼があるが、すべて断っている。スパイスが物資になってしまうからだ。売上だけが増えることになってつまらない。
だから、湯花邪無は、営業に出向くこともないし接待で銀座に出向くこともない。
もう１００年前の大企業は、ほとんど分社になっている。戦艦のような会社は少なくなっている。日本の人口も８４００万人になっているのだ。売上げを増やす時代ではない。
１週間前にカサブランカに行ってきた。来年になるかもしれないが、スパイスｙｕｈａｎａカサブランカをつくる予定である。
次の１００年は、ナイロビやカサブランカやアビシャンやカイロやヨハネスブルグなどのアフリカの都市が世界経済を引っ張るのだと思っている。
多分、世界人口の半分がアフリカ大陸にいることになるだろうと思っている。
ただ、湯花邪無は日本人である。新宿南口のお店が欠かせない。
しかし、なんといっても、今はジャカルタのお店が主力である。経済もジャカルタがすごい。

教授を引き受けてくれ

２１１４年７月13日だった。

留学していたジャカルタの大学から呼び出しがあった。

「今日の９時に来てくれないか」

教授を引き受けてくれだと思う。

断っているのに何度も誘われる。独身だし33歳である。教授のイスに座ってはいられない。

「ちょっとジャカルタに行きます」

「お帰りは？」

「ジャカルタのお店の誕生会に出ます」

「出ないつもりだったのですか？」

「１回空けてもいいかと思って」

「ダメですよ？オンナが多いんですから」

「ダメです」

「今晩帰れないかもしれない」

「わかりました」

水野まさみにはいつも怒られる。

７時30分のジャカルタ行きに乗った。

羽田ージャカルタ便は、20分に１本である。山手線のように本数がある。

北千住－羽田の方が時間がかかる。

やはり、教授を引き受けてくれだった。

年間12回の特別講義だけを引き受けた。９月から１年だ。

スパイスｙｕｈａｎａ

ジン

「どうしたんです？」
「大学の教授を引き受けてくれ」
「忙しいのに」
「年に12回の特別講義でいいらしい」
「それだったらいいか」
「今日は？」
「ジャカルタにいます」
「わたしがごはんつくる？」
「お願いします」
「わたし今日出かけるから」
わかりました。
ジンは２１０８年にスパイスｙｕｈａｎａをつくった時の最初の社員である。
個人的な関係も４年続いている。
スパイスｙｕｈａｎａはカレット駅にある。ジャカルタのお店は１軒だけである。インドネシアとマレーシアとシンガポールに通信販売で販売している。新宿南口の売上げの２倍ある。本社もスパイスｙｕｈａｎａにある。
ジンは、誕生会の準備で出かけたのだと思った。ホテルのパーティ会場を借りているのだろう。
「ミスタージャムしょうしゃから電話だけど」
スパイスｙｕｈａｎａの社員たちは、湯花邪無を、ミスタージャムと呼ぶ。ジンがそう呼んでいるからだ。
そういうことではなくて、ジンが湯花邪無に対して従う人になってはいけないと思って、ジンだけには、ミスタージャムと呼ぶように話した。
ジンは、イスラムの国の女性には珍しく、動かす人になった。
ところが、社員全員が、湯花邪無のことを、ミスタージャムと呼ぶように

なった。
スパイスｙｕｈａｎａには、湯花邪無の部屋はない。店長であるジンの部屋の応接セットか打ち合わせテーブルに座っている。
ジンが仕切るんだという湯花邪無の考えを表現している。
ジンは、フツウは、鼻高々になるのだが、よろいを着てしまったふうはない。今日でも自分が誕生会のセットに行っている。
社員は78名で通信販売のオペレーターが48名いる。女性が67名で男性が11名だ。
「もしもし」
「湯花邪無に売上げ１億円の仕事をお持ちしようと思いまして」
「ありがとうございます」
「日本のメーカーと伺いますので」
「食品の会社ですか？」
「ええ」
「今日ですか？」
「12時に伺います」
「13時30分にお願いします」
業務用のスパイスを提供してくれである。断るつもりである。お昼も用意して、歓待してくれなのだが、それも断った。売上げは上がるが利益はほとんどゼロに近い額になる。しょうしゃの言うことを聞いていたらまずい。
毎日こんな話ばかりでイヤになる。日本の商売のやり方は昔と変わらない。集団で何でもやりたがる。集団が持っている情報や権力やノウハウで商売をしたがる。接待が横行することも昔と変わらない。
湯花邪無の夜は、ほとんど空いている。ジンと湯花邪無のタベット駅のマンションにいることが多い。
「ジンに頼まれました」
ジンの秘書をやっているリニがカレーライスをテイクアウトしてきた。
「リニは元気なのか」
「今日はお店で店員やってる」
「お客さんはどうだ？」
「半分はジャカルタの人じゃない」

「観光客が買うのか」
「観光客でもない」
「オーストラリアの人も多いのか」
「スパイスｙｕｈａｎａは有名だから」
「みんなとリビングで食べれないのか」
「今日は誕生パーティがあるからサンドイッチしかお昼はない」
「今晩の誕生パーティーに来るのか」
「そのつもりだ」
湯花邪無には秘書はいないが、ジンには秘書がいる。ジンはまだ28歳で78人のトップをやっている。湯花邪無はリニをジンの秘書につけた。22歳だ。
「ミスタージャムにお客さまです」
「応接にお願いします」
お店では冷たいお茶のサービスをしている。
リニが日本のしょうしゃのお客さんを連れてきた。冷たいお茶を持ってきた。
湯花邪無にお客さんは珍しい。湯花邪無は、ほとんど、自分で相手のオフィスや工場に出かける。
日本のしょうしゃや大きな会社の人は難しい。仕事を持ってきてやるという態度だからだ。
「ベトナムで焼き鳥を生産している会社です」
「全量日本へ輸出します」
「スパイスをもっと工夫したいと思いまして」
「ベトナムにもスパイスの会社がありますけど」
「価格が成立しません」
「湯花の方がもっと成立しません」
「湯花さんはベトナムで売れずに撤退したと聞きました」
「私たちがベトナム引き受けます」
「私はこれからスパイス工房に出かけますので、これくらいでいいでしょうか」
「どういうことですか？」
「湯花はベトナムで販売をしたことがありません」

「湯花は50％増収増益です」
「出かけますので失礼します」
日本のしょうしゃは多くのメーカを連れてくるのだが、いつもこうなる。
湯花邪無が日本人だから日本の会社の応援をしろという態度である。
湯花邪無には、そういう考えは全くない。
日本の人は変わらないとは思う。３枚の名刺も全く変わらない。会社が仕事をしているのか個人が仕事をしているのかわからない。
湯花邪無は、湯花邪無が仕事をしている。たまたま、スパイスｙｕｈａｎａの代表である。日本の人は、昔からアイデンティティがおかしいと、湯花邪無は感じる。
ジンだって、ジンですと言う、スパイスｙｕｈａｎａのジンですとは言わない。

先里風香の別の顔

「リニスパイス工房に行きます」
「ホテルをご存知ですか？」
「スパイス工房のみんなと一緒に行きます」
湯花邪無は、アースカーを運転しながら、日本は辛いと思ってしまうのだ。
人口も８４００万人である。人口は増える見込みはない。
一時東南アジアから移民を受け入れたのだが、みんな帰っていった。偏見のある日本に住み着くメリットがない。東南アジアのどの国も経済成長した。人手不足なのだ。
日本は移民を受け入れるべきかどうかずっと議論をしていた。根底にあるのは、日本人は優秀で品格があるという考えである。だから受け入れると言う。湯花邪無からみると、バカバカしい。上から目線なのだ。人間に優劣の差などない。
先里風香はアースバッテリーやアースカーで著名であるが、誰も顔を見たことがない。
華美美鈴しか見たことがない。

湯花邪無は、先里風香の別の顔を知っている。ほとんど知られていないが、電子書籍で多くの書を出版している香風里先である。多分誰も気がついていない。
『よろいってなんだ』を最初に読んだ。まだジャカルタの大学の大学生だった。なんでもふさわしくしようとするよろいの考えが醜悪だという香風里先の考えに共感した。
「人に優劣などない」
「差異があるのはよろいの厚さである」
湯花邪無は、少しの成功者なのだが、「少し成功するとよろいが厚くなって自ら壊れる」と言っている湯花邪無の考えを守っている。
スパイスｙｕｈａｎａのオーナー社長なのだが、社長室も自分の机すらない。よろいを脱ぐことは、極めて難しいと思う。世間の人は、よろいを見て人を判断する。中身など見えない。人は、立派なよろいが欲しくてガンバッているようなものだ。
湯花邪無は、「何でも捨ててしまうこと」だという言葉にも共感している。書籍も持たないことにした。すべて電子書籍である。ＰＣもプリンターがない。ペーパーレスである。
湯花邪無だけではない。みんなペーパーレスだ。
よろいが人を壊すという香風里先の考えに共感している。日本もよろいの厚い国だと思う。ドンドン崩れてきている。もう大国などではないのに、膨大な借金の決着がつかない。
消費税も28％になったし税金大国なのだが、国の借金は１８００兆円になった。日本の国民の財産もドンドン目減りしている。インドネシアが国債を大量に買ってくれなかったら、日本の国債は暴落する。アメリカはゴメンなさいをしている。中国も自国のことで精一杯なのだ。

タベットのスパイス工房

「こんにちわ〜」
「ラニこんにちわ」

「いらっしゃると思いませんでした」
「変わったことはありませんか？」
「順調です」
ラニは22歳でエミルの秘書をしている。用事のない時は、工房のリビングで昼食の世話をしている。
「お昼はすませてきたのですか？」
「スパイシーのカレーです」
「今日はパンだと聞きました」
「物足りないと思ったのかリニがテイクアウトしてきた」
「グッドね」
「エミルを呼びますか？」
「何をしているんのですか？」
「研究室にいます」
「私が行きます」
「お茶は？」
「あとで」
このタベットのスパイス工房は、２１０８年に、ウルサムのスパイスを売るために、カレットにお店を持ったのだが、思いもかけずたくさん売れて、ウルサムのタベットの工房を買った。条件は、娘のエミルに工房を任せることだった。
エミルは、湯花邪無と同じ大学の後輩である。スパイス学を学んだ。まだ25歳である。
95名が働いていて、女性が82名で男性が13名である。生産に72名、品質保証に８名、研究室に７名、事務職に８名である。
湯花邪無は、エミル研究室の隣にあるジャム研究室に行った。湯花邪無は、この部屋が１番落ち着く。
エミルには、工房長の別の部屋もあるのだが、湯花邪無には、この部屋しかない。１週間に１日は、この部屋で実験を行っている。新しいスパイスの開発である。
最近は、モロッコに何度も出かけている。
研究室は、すべてガラスで仕切られているので、誰が研究室にいるのかすぐ

にわかるようになっている。エミルと湯花邪無の他に５名いる。中国に飛んでいたり日本に行ったりしている。
最近はメキシコも多い。
「いらっしゃい」
「大学の教授も引き受けたんですって？」
「父から聞きました」
「年間12回の特別講義でいいらしいから」
「忙しいのに」
「今日の誕生会だけど」
「ジンが１人でやってます」
「ミスタージャムがジャカルタにいるのに出席しなかったらみんながっかりします」
「エミルと一緒に行きます」
「１７３人だから大パーティーになる」
「今日はおいしいベトナム料理が食べられるからみんな楽しみにしてる」
「どうして？」
「ベトナム料理は野菜が中心で健康的でおいしい」
「インドネシアの料理もおいしいけど」
「来月はおすしやってくれるといいな〜」
エミルは、まだ25歳なのに、95名のスパイス工房を任されているのだが、プレッシャーにはなっていないようだ。

７月のジャカルタの誕生会

ジンは、16時になったら仕事を切り上げて、バスに乗るように指示をしていた。全員バスである。ジャカルタはお酒はない。
最近はお酒を飲めるお店もあるのだが、ジンはお酒を出すことはない。おいしい料理を食べるのだ。テイクアウトも家族のために用意している。誕生会のメンバーの自己紹介がある。記念品が送られる。旅行券だとジンが言っていた。17時に始まって19時30分には終わる。

司会は、リニとラニがやっている。
今日はベトナム料理である。ベトナムの踊りがある。音楽がある。そしてバスでカレット駅のお店とタベットの工房に帰る。
湯花邪無やジンやエミルはただの出席者の１人である。
「楽しかったじゃない」
「これからもいつも出ないとダメだよ」
「誰もあなた見てないようだけど見てるから」
「わかった」
湯花邪無は、タベットのマンションに住んでいる。２１０９年にタベットの工房を買い取った時に引っ越した。
ジンはカギを持っている。
もう４年になる。
湯花邪無は、ジンがどこに住んでいるのかわからない。聞かないことにしている。恋人がいるのかどうかもわからない。家族もわからない。
ただ信用できる。信用しないといけないから信用しているのではない。人が動く押しボタンが動く。ジンのために失ったものがどれほど大きくても、ジンを失うより小さいと思っている。
５０００年くらいかもしれないが、世界はオトコ社会だった。
それは仕方がなかったかもしれない。
人が他の生き物と地球の覇者を争ったからだ。大昔だ。身体が強くなかったら狼には勝てない。強い者がボスになった。為政者になった。為政者を守る者も強い者だった。ずっとオトコになる。
２１００年になって、もう人には強さは必要なくなった。パワーシャベルだってロボットである。オンナが操る。なんということもない。
アースバッテリーがドンドン普及している。
アメリカの大統領もオンナである。中国と日本だけがまだ女性が政治のトップになったことがない。
インドはずっと女性である。インドネシアも女性である。
オンナの時代なのだ。
湯花邪無はそれでいいと思っている。スパイスｙｕｈａｎａだって、湯花邪無がオーナーなのだが、仕切っているのはジンである。タベットの工房だっ

てエミルが仕切っている。新宿南口のスパイス湯花も水野まさみが仕切っている。
何がオンナの時代にしてしまったのか、はっきりしている。
母親は子どもを裏切らないからだ。何があってもあなたの味方をする。自分の利益のために裏切る雰囲気があったら、誰もついてこない。
明らかに、湯花邪無よりもジンやエミルや水野まさみの方が、お母さんに思える。裏切らない確信があるように見える。
湯花邪無は後に隠れるしかないのだ。
後に隠れることが残念なのではない。みんなを束ねるのは、オンナが向いている。
オトコは、すぐに、獲った鹿の重さでチャンピオンを争って目標を決めたがる。
そんなプレッシャーは崩壊してしまった。東京の会社の経営トップの72%がまだオトコらしい。東京は、時代に遅れた感が強い。
オンナが仕切っているとモメ事が少ない。平和を求める。
オトコが仕切ると、わけもなく戦いたがる。企業戦争になる。
香風里先によると、オトコには競争のエクスタシーが染み込んでいると言う。
湯花邪無も東京にいるよりもジャカルタにいる方が気分がラクである。
「今日はグッドだった」
「ありがとう」
「今日はいくら使ったか聞かなくていいの？」
「後で報告見るから」
「あなたには予算の考えはないの？」
「ええ」
「日本の会社は販売目標とかウルサイらしいけど」
「スパイスｙｕｈａｎａは日本の会社ではない」
「いいの？」
「自由にして」
「もうダメだ〜そのことば聞くとベッド行きたくなっちゃう」
「シャワーする」

ｙｕｈａｎａの森

リーマイ

スパイスｙｕｈａｎａもスパイス湯花も３６５日無休である。シフトで週に35時間働く。湯花邪無が、生活者にサービスを提供する考えに徹しているからだ。
現実的に、土日のネット販売が圧倒的に多い。湯花邪無も、休むという考えがない。用事があれば仕事をする。モロッコを旅行したりする。仕事のついでである。
ジンのシフトを聞いたことがない。
ジンは、湯花邪無がジャカルタにはいないものとして、頼らないでスパイスｙｕｈａｎａを仕切っている。
メンドーなことは起きない。商品が素晴らしいからだ。お店での販売価格でモメることもない。卸の口銭でモメることもない。全部、スパイスｙｕｈａｎａで販売しているのだ。プライスダウンなどない。
７月14日月曜日である。ジンは、朝早くに出かけた。
「卵は？」
「自分でやるから」
「今日は東京？」
「上海」
「今晩は？」
「電話します」
「わたし来ないかもしれない」
「いいです」
ジンは、オレンジのアースカーに乗っている。ジャカルタは車が混む。ずっと変わらない。だからジンは早く出る。
「今日上海に行くんだけど」
「リーマイの話と森を見ておきたいんだけど」
「わたしは自宅にいて行けないけど」

「リーマイはどうなんだろうか」
「リーマイの仕事だから優先する」
「20分で行くから」
エミルは今日は休みらしい。湯花邪無は、エミルのシフトも知らない。
「ラニおはよう」
「昨日はごちそうさまでした」
「口に合ったんだろうか」
「ベトナム料理はヘルシーだからいいです」
「リーマイと相談があるんだけど」
「エミルの部屋で待ってます」
「ありがとう」
リーマイは、エミルのお父さんの紹介でスパイス工房に参加するようになった。北京の大学でスパイス学を学んだ。27歳で結婚している。中国料理のスパイスを研究している。
「リーマイおはよう」
「上海に行くのですか？」
「中国スパイスをはじめるのですか？」
「そのときはリーマイと一緒に行きます」
「なんですか？」
「私の研究の中に体温を上げるスパイスがあるんだけど」
「トウガラシね」
「１００名のモニター研究をしている教授がいて、その話を聞きに行くんだけど」
「興味あるな〜」
「リーマイの中国スパイスを聞かせておいてほしい」
「時間は？」
「30分」
「ｙｕｈａｎａの森にも行くの？」
「中国スパイスがどうなっているか見せてほしい」

ｙｕｈａｎａの森

ｙｕｈａｎａの森は、タベットの更に郊外にあって、サッカー場５００の大きさがある。２１１０年に湯花邪無が購入した。ここでスパイスの原料である草花を栽培している。栽培をしているが、事実上は、ほとんど森である。湯花邪無は、飲み屋で知りあったステファノに森の管理を頼んだ。湯花邪無の大学の先輩である。植物学を専攻していた。
ｙｕｈａｎａの森は社員が12名である。全員農夫であるが、ガダラだけが総務経理をやっている。36歳で６歳の息子がいる。シングルマザーである。
12名の社員で女性が８名で男性が４名である。
スパイスｙｕｈａｎａの８割の植物をこのｙｕｈａｎａの森で栽培している。サフランはイランのステファノの友達から入れてもらっている。
社長は湯花邪無で森の長はステファノなのだが、事実上は仕切っているのは、ガダラである。
「ステファノおはよう」
「お昼用意はじめるけど一緒に食べるでしょ？」
ガダラが奥から声を上げた。
「お願いします」
「昨日のベトナム料理はおいしかったでしょうね」
湯花邪無とリーマイは顔を見合わせた。
「８月の誕生会には一緒に参加できるようにジンに話しておきます」
「今電話してください」
「もしもし〜」
「上海？」
「ｙｕｈａｎａの森にいる」
「なんで？」
「リーマイと一緒に中国スパイスを勉強しにきた」
「そんでなに」
「８月の誕生会からｙｕｈａｎａの森も加えてください」
「ガダラに代わって」

「ジンだけど」
「もしもし〜ガダラ？」
「ミスタージャムにお願いしたんだけど」
「ワルイ〜８月の誕生会から一緒にお願い」
「何人？」
「12人」
「わかったってミスタージャムに伝えて」
「ありがとう」
ステファノは、唐辛子の畑に湯花邪無とリーマイを案内した。

上海

14時38分のジャカルタ発上海行きに乗った。15時30分には上海のホテルに向かっていた。
チョウシハンは、生理学者である。人が環境温度を感じ取る仕組みの研究をしている。
人だけではなくて、生き物は、ミトコンドリアと共存している。ミトコンドリアは、地球の環境温度よりもかなり高い温度で生きている。人間のミトコンドリアは３６・９度くらいの温度を必要とする。ミトコンドリアが生きる温度だ。人間はもっと幅が大きいのだが、共存しているから仕方がない。ミトコンドリアが死んだら人間も死ぬことになる。
ミトコンドリアは、しかも、恒温でしか生きられない。３６・９度のプラスマイナス５度くらいだ。42度を越えるとミトコンドリアが死んでしまう。32度くらいでもミトコンドリアが弱ってしまう。
ミトコンドリアは、ウイルスである。酸素がなければ生きられないウイルスである。
地球には酸素が多く、生き物の毒である酸素を、ミトコンドリアが必要とするので、生き物は、自分が生き延びるために、ミトコンドリアと共存した。
人間が息をしているのは、自分のためではない。共存しているミトコンドリアのためである。

人間の60兆個の細胞のすべてにミトコンドリアが、10匹から２万匹くらいいる。しかがって、人間の身体には、数百兆匹のミトコンドリアがいることになる。
ミトコンドリアは、人の白色脂肪細胞をエサに呼吸をするのだが、その呼吸熱が、人間の唯一の発熱機能になる。
地球の環境温度よりも高い体温を維持しなければならないので、ミトコンドリアは、たくさんの呼吸をして、発熱することになる。
重要なことは、人の環境温度の感知機能である。
もし０度くらいの雪の中にいるのだったら、間違いなく０度を感知しないといけない。間違えたら、そこで死んでしまう。０度なのに40度だと感知したら、人は裸になってしまう。
この人の温度感知機能を研究しているのが、チョウシハンである。
唐辛子のカプサイシンと人の温度感知について、１００名のモニターを行っている。
ロビーのカフェで待った。
「ミスター湯花お待たせしました」
チョウシハンも、湯花邪無と同じように２メートル近い身長である。しかし大男という印象ではない。最近の上海では、２メートル30センチの人もいれば１メートル60センチの人もいて、身長がバラバラになっている。２００年くらい前には、１メートル55センチくらいの人が多かったのだろうが。
最近上海にできるマンションやホテルでは、２メートル20センチの人を対象にしているようだ。
「最近の上海の人は大きいのだが、どこまで大きくなると思いますか？」
カプサイシンの話ではないのだが、生理学者に聞いてみたい。
「自分にもわからない」
「豊かになって栄養が行き届いたからだろうか」
「そういうことではないと思う」
「大きくなって強くなりたいというのは人の基本的なニーズだから」
「なぜですか？」
「地球のチャンピオンになりたいから」
「人間は食物連鎖の頂点にいるけど」

「大昔の捕食される生き物だった時代のエクスタシーだと思う」
「大きくて強くならないといけない？」
「そうです」
「それでは恐竜と同じではないですか」
「同じです」
「もう人間襲う生き物はいません」
「人間がいます」
「数が多いのも同じですか？」
「そうです」
「多い方がチャンピオン？」
「人間は１００万人しかいなかったのに１万年で１００億人になりました」
「数はブレーキがかかっていますけど」
「２２１４年には70億人に戻るでしょう」
「理由は？」
「人間らしく暮らしたいから」
「生き物ではなくて」
「人間らしくはなんですか？」
「優秀な頭脳です」
「コンセプトはわからないことを明らかにすることです」
「チョウシハンの言っていることは、香風里先の言っていることと似てるけど」
「香風里先が言っていることを話している」
湯花邪無は驚いてしまった。
「私は現実的な臨床研究者だ」
「あなたの質問は香風里先が答えることが適当だ」
「香風里先を知っているのだったら香風里先を読んでください」
「了解です」
「それで提供した唐辛子は足りていますか？」
湯花邪無は、チョウシハンにｙｕｈａｎａの森で栽培した７種類の唐辛子を提供した。
「フツウは、食べ物を食べると副交感神経になるんだけど」

「唐辛子に多く含まれるカプサイシンを食べると、その情報が脳内の自律神経に伝わり、副交感神経になるところを、交感神経にします」
「チョウシハンがはじめて実験したのですか？」
「以前から何人も実験をしています」
「食べ物でも特異なものです」
「寒さで危険な時に、カプサイシンを食べると交感神経になって体温も高くて血流も速くなるんだ」
「そうです」
「ホントはまずいんじゃないですか？」
「食べ物を食べたら副交感神経になるのでいいんじゃないですか？」
「眠ってしまいますけど」
「特殊な地方の話です」
「寒い地方ですか？」
「暑い地方はたとえばカレーのカプサイシンとかです」
「ジャカルタでもたくさん辛い食品があります」
「暑いからですか？」
「交感神経優位にしておかないと危ない」
「なるほど」

ステファノのカレー

「晩ごはんはなんですか？」
「まだ考えてないけど」
「カレーは食べますか？」
「２日に１日はジャカルタカレーです」
「一緒に食べさせてくれないか」
「どうぞ」
「今から上海を出るから」
「19時に来てください」
「ステファノのアパートを知らないけど」

「住所をメールするから誰にも知らせないで」
「空港からタクシーで」
「マイカーでナビで行きます」
「わかりましたが〜１人ですか？」
「ステファノは？」
「１人です」
「上海でおもしろいことを聞いたから」
「なんですか？」
「暑い地域でなぜカレーが多いか」
「なんです？」
「カプサイシン」
「なんです？」
「食べると副交感神経になるんだけど暑くて危ないから食べても交感神経になるように」
湯花邪無は、上海の空港でコーヒーを飲んで、17時40分のジャカルタ行きに乗った。
つくるところを見せてくれと言っておいた。
ジンも、ジャカルタ料理をたくさんつくっているが、見たことがない。沢風ゆりは日本食しかつくらない。スパイス湯花のスパイスは、全部揃っているのだが、沢風ゆりは使わない。
アースカーは、ナビに任せていたら、自分で目的地まで行くのだろうと思う。しかし、湯花邪無は心配だから自分で運転する。
ステファノは、スパイスｙｕｈａｎａの７つのスパイスを使ってカレーをつくる。
ジャガイモとトリ肉のカレーである。
「どうぞ」
「ジャカルタのビールが似合う」
「運転しないといけない」
「ノンアルコールだ」
「ありがとう」
さすがに畑の人だと湯花邪無は思った。どのスパイスがどう作用するか、よ

くわかっているのだと思った。
ステファノのカレーはかなり辛い。
「カレーは日本人が言っているだけで、インドネシア人は、日本の人から見たら、カレーばかり食べているのかもしれない」
ステファノが言った。
湯花邪無は、スパイスの研究者なのだが、料理をしたことがないのはおかしい。
「ミスタージャムも料理を研究しないといけない」
ステファノが言った。
確かに、スパイスｙｕｈａｎａのスパイスは、すごくたくさんの生活者に使っていただいているのだが、商品が間違っていないことはわかるのだが、湯花邪無がこれでは、間違った時に修正がきかない。

料理学校へ入学

明日は水曜日だから料理学校と新宿

７月15日火曜日である。
「今日から料理学校に入学する」
「え？」
朝１番に湯花邪無はジンに言った。
「スパイスの研究者なのだが料理ができない研究者はおかしい」
「よろいに過ぎない」
「電話は繋がるのですか？」
リニも心配そうに聞いている。
湯花邪無がいなくても平気なのだが、いざいないことになると、不安になってくる。
「なにをしたいのですか？」
「スパイスをキチンと研究したい」
「わたしたちのことは？」
「１番大事だから料理学校に行く」
わたしの料理を４年も食べてきたのにと言いたがっているジンを見ていた。
リニがいるから不満そうに聞いているしかない。
「ジンがやっている料理の会が会社にもあるけど」
リニが言った。
そういうことも知らなかったのだ。
「私よりジンの方が生活に密着している」
「わたしたちはミスタージャムがいないと安心して仕事ができない」
「何かあったらすぐに来るから」
「毎日いないのか？」
「月曜日と水曜日と金曜日が料理学校だ」
「少しは安心した」
「みんな一生懸命やっているのに私だけがぼんやりしていた」

「そんなことはない」

「日本のお店はどうするんだ」

「料理学校は早く終わるから新宿に行く」

「月曜と水曜と金曜は料理学校と新宿なのか」

「そのつもりだ」

「火曜と木曜と土曜がジャカルタなのか」

「基本的にはそうだ」

「今日は火曜日だけど」

「今日は包丁の使い方を学ぶだけだ」

「ジャカルタにいるのか」

「明日は料理学校で新宿だ」

「包丁も使ったことがないのか」

「スパイス学の教授だけどいばってられない」

ソトアヤムとサテ

「包丁使えるようになったの？」

「ナイフは幼い頃から使ってたから」

「不良だったのか」

「そうじゃなくて工作した」

「手にいくつも切り傷あるけどそうなのか」

「そうだ」

「魚はどうするんだ」

「わからない」

「なんとかならなかったら諦めた方がいい」

「なんとかしないといけない」

「いただきます」

「これはなんですか？」

「ソトアヤム」

「チキンスープ」

「何度も出してるけど」
「料理の名前を聞いたことがない」
「ソトアヤム」
「ミネラルウオーターでいいのか」
「ビールも売ってはいる」
「ウオーターでいい」
「これはなんだ」
「何度も出してる」
「サテ」
「牛の肉を串に刺して焼いたものだ」
「スパイスｙｕｈａｎａのスパイスがなかったらおいしくない」
キッチンには、40種類くらいのスパイスやハーブが並んでいる。
どれをどう使ったらいいのかさっぱりわからない。
これでスパイス学の教授だからよくわからない話である。よくスパイスのビジネスで成功したと思う。まだ成功したとは言えないが。
すべて、ジンやエミルやガダラや水野まさみのおかげである。
湯花邪無は、スパイスの科学はわかる。スパイスの科学と料理は異なる。
「どうだ？」
「ソトアヤムがおいしい」
「サテは？」
「おいしい」
「ごはんが食べたいと言わないけど」
「インドネシア料理を食べる」
「ごはんもあるけど」
「ジンが出したものを食べる」
「わかった」
いつものようにテーブルにはたくさんの小皿の料理が並んでいる。
湯花邪無は、ほとんど手をつけない。ソトアヤムとサテだけを食べる。
「今度は違う料理にする」
「今日はソトアヤムとサテだけ覚えて」
「名前がわからないとしようがない」

「もう何年もジャカルタで暮らしているのに」
ジンに言われると確かにおかしい。
料理の名前を何も知らない。覚えなくてもいいと思っていた。
何が得意か聞いてそれを頼む。レストランではそうする。最初に７種類くらいおかずが出る。

マイ包丁

「ミスターユハナはなにをしているのですか？」
「料理学校の先生のミナはなにかと湯花邪無のことを聞きたがる」
「失業中で主夫でもできるように料理を習いはじめた」
「タクシーの運転手だったら友達がいるから紹介するけど」
「しばらく主夫の修行するからいいです」
「イケメンだしもったいない」
「ところで包丁がたくさんあるけど」
「ミスターユハナはこのナイフが使えればいいのではないですか？」
「こっちは中華包丁ですけど中華料理も学びますか？」
「とりあえずはインドネシア料理です」
「そしたらこのナイフを使えばいいです」
「肉もタマネギもジャガイモも何でも切れます」
おかしなもので、包丁と思ったら何もできないが、ナイフと思ったらなんでもできる気がする。
みんな料理をやってるのにも自分だけが包丁を教わっている。
「この包丁を買いたいけどどこに行けばいいのか」
「終わったら一緒に行く」
「終わったら日本に行くから時間がない」
仕方なさそうに包丁売場の地図を書いた。日本の浅草田原町のようなところがある。スマホで撮影して買い物に行った。
「もしもし」
「どうしたの？」

「マイ包丁というかナイフを買ってジンの包丁の箱の横に置いてあるから」
「使わないでくれ？」
「よろしく」
「わかった」
「これから新宿に行くから」
「もう料理学校は終わったのか」
「包丁の使い方がわかったから」

戦車も動かせたアースバッテリー

７月16日水曜日13時15分のジャカルタ発に乗った。14時５分に羽田である。
羽田は騒然としていた。
先里風香が帰国するうわさが流れていた。華美美鈴が昨日日本に帰国したらしい。
誰も見た人がいないのだが、うわさが流れた。事故でもない限り、飛行機の会社は乗客名簿を出さない。
アメリカの戦車の会社がアースバッテリーで戦車をつくったのだ。今までは、乗用車のバッテリーでギリギリだった。時速80キロしか出ない。
それが戦車を動かせることになったのだ。
日本の戦車の会社は、先里風香が、日本人であるにもかかわらず、アメリカの戦車の会社に協力したとして、説明を求めているのだ。
先里風香は何もメッセージを出していないらしい。
もしかしたら潜水艦も動かせるのではないかと想像する人もいる。
湯花邪無は、自分のアースカーがどこにあるのかわからなかった。スマホで調べた。北千住の自宅である。羽田に置いておけばよかった。
湯花邪無は、タクシーの中でニュースを見ていた。自分で選択できる。
テレビ解説者が、ジェットエンジンもできるかもしれないと言っている。
湯花邪魔は、なんとなく、80キロしか出ないアースカーにホッとしているところがあった。先里風香が、顔を見せないこともホッとしていたところがあ

る。
もし先里風香が、アメリカの戦車の会社に協力して、アース戦車をつくったのだったら、それは、少しガッカリする出来事である。
人間は、これまでも、もっともっとをやってきた。地球の１００億人の人を何回全滅させることになるかわからない爆弾だって、少なくはなってきているが、消えていないのだ。
技術的には誰でもが作れるかもしれない。
もう、愛の大きさにかかっているのだ。
この上に、アースバッテリーが戦車を動かしたとなったら、もっともっとになる可能性があるのだ。またもやパンドラの箱を開けてしまう可能性がある。

歳の留学生ジニ

「こんにちわ〜」
牧野由香が新宿南口のスパイス湯花の前でサンプルを配っていた。
「水野さんはスパイス教室で教えています」
「ああ〜わかりました」
「ミスタージャムは、インドネシア料理の学校に入ったのですか？」
「今日は学校に行ってきました」
「どうしてですか？」
「スパイスの専門家だけど料理ができないスパイスの専門家はおかしいから」
「それはそうですね」
牧野由香にはっきり言われるとガッカリする。
「水野さんは何時に帰ってくるのですか？」
「16時です」
「わかりました」
「スケジュールを教えてください」
「月曜と水曜と金曜が料理学校朝で午後から新宿です」

「前の日の泊まりはジャカルタですか？」
「ええ」
「月と水と金曜の夜の泊まりは東京ですか？」
「そうです」
「今日は水曜だから東京ですか？」
「水野さんにお伝えします」
「お願いします」
「社内のみんなにオープンしていいですか？」
「水野さんから連絡してください」
「承知しました」
「お茶煎れます」
「どうぞそのままサンプル配ってください」
スパイス湯花の社員もスパイスｙｕｈａｎａの社員も、湯花邪無に気後れする人はいない。
ミスタージャムは呼びやすい。
「おかえりなさい」
「スパイス教室ってなにをしてるのですか？」
「スパイスの使い方です」
「料理ですか？」
「アジアの料理教室のようなものです」
「出ればよかった」
「ジャカルタの料理教室に入ったんですって？」
「スパイス学の教授なんだけど料理できないのはおかしい」
「やっと気がつきましたか」
湯花邪無は驚いてしまった。
水野まさみもおかしいと思っていたのだ。
「スパイス教室はいつやっているのですか？」
「水曜の13時から２時間」
「１週間に１回」
「来週の水曜日は聞きに行ってもいいですか？」
「ジニに教わればいいのに」

「ジニってなんですか？」

「今日もわたしのスパイス教室の手伝いしてくれた」

「日本に留学中で20歳」

「和食をやりたい」

「アジアの料理得意でスパイス使いの名人」

「私が知らないけど」

「アルバイトだから」

「教えてもらいたいけど」

「ミスタージャムはイケメンで危ない」

「来週の水曜日にわたしのスパイス教室に来て」

「スパイス学の教授なんだけど」

「科学は科学だからいいじゃない」

「片肺だな」

華美美鈴

華美美鈴をかくまってほしい

新宿から電車で北千住に帰った。
東京も人口が減ったこともあって、電車はあまり変わらない。日本の65歳以上の人の割合は、60％を越えている。８４００万人のうち、５０００万人が65歳を越えている。75歳で働いている人は多い。女性の70％が働いている。
ただ、収入は多くない。年金制度はかろうじて生きている。76歳から支給である。
新型電車を走らせる勢いはない。
新宿から北千住も、お年寄りばかりである。ただけっこう座れる。
スパイス湯花は、スパイスだからだろうが、若い女性が集まっている。日本では珍しい。会社を辞める社員が少ないので、年々、平均年齢は高まる。
「ただいま」
北千住のマンションの電気がついていた。
沢風ゆりが来ているのだ。
「おかえり」
「来るかどうかわかんなかったからごはん用意してない」
「ラーメンつくるから」
「だったらやる」
シンクのお皿を見た。
「誰か来たの？」
「お願いがある」
「わたしの友達」
沢風ゆりの部屋から若い女性が出てきた。
「華美美鈴」
湯花邪無は、ひっくり返るくらいに驚いた。
テレビで見慣れた顔である。

やっぱり日本に帰っていたのだ。
テレビは一時ダメになると言われていたのだが、現在は、ライブ専門の映像配信会社として世界で存在している。東京やジャカルタや上海は、テレビパシフィックのコントロール下にある。ジャカルタでは、日本の３つのテレビ局の番組が見れる。いずれもライブ専門チャンネルだ。ドラマ専門チャンネルも日本には３つある。インドネシアにも３つのライブ専門チャンネルがある。来月からインドも入ってくる。インドはドラマ専門チャンネルが10もある。
中国のライブ専門チャンネルもオーストラリアライブ専門チャンネルも日本のライブ専門チャンネルも、アメリカの戦車の会社のアース戦車を連日報じている。
華美美鈴が常に出てくるのだが、今回のアース戦車では、華美美鈴が出てこない。
どこのライブ専門チャンネルも、華美美鈴のコメントが欲しいのだ。
アメリカの戦車の会社に協力したのかどうかである。
日本の戦車の会社は、日本人である先里風香が、アメリカの戦車の会社に協力したことに意見広告を新聞にしている。
もう、日本がどうとかアメリカがどうとかの時代ではないのだが、困ったことになっていることには変わりはない。
「説明してください」
「親しい友達」
「どういうわけだか日本に来たことを察知された」
「何しに日本に来たんですか？」
「説明しようと思ったんだけど追われた？」
「先里風香にはほっておけって言われたんですか？」
「勝手に来たんだ」
「日本の戦車の会社に行ったんですか？」
「連絡したら追われはじめたのか」
「私だったら〜あなたを人質に先里風香を呼びますけど」
「日本の戦車の会社にも協力をさせます」
「アメリカの戦車の会社には協力してないのですか？」

「そんなことはどうでもいいんだと思います」

「先里風香を監禁できればいい」

「そんなことは先里風香さんは読んでいたと思います」

「かくまってくれるのか」

「勝手にこの家を使うのはかまわない」

「それだけだ」

「ありがとう」

「湯花邪無には迷惑はかけない」

「家族はどうなっているのですか？」

「知らせていません」

「戦車の会社もマスコミもみんなが探しているんだ」

「私のスケジュールなんだけど」

「ジャカルタの料理学校に入学した」

「月水金の午前中はジャカルタの料理学校で午後は新宿で夜はここです」

「火木土は朝ここを出てジャカルタです」

「夜もジャカルタです」

「月曜日と水曜日と金曜の夜はここなのか」

「そうだ」

「日曜は？」

「モロッコやムンバイ」

「わかった」

「華美美鈴はわたしの部屋にいるから」

「お金は？」

「スマホと財布だけ持って出て追われた」

「明日わたしが買い物に行く」

「カードは使わない方がいい」

湯花邪無は、財布から８万円を渡した。

「これしか今はないけど」

「いいの？」

「かまわない」

「ありがとう」

「ラーメンつくる」
「パスポートは？」
「持ってます」
「どこで逃げたんですか？」
「東京駅」
「捕まってたんですか？」
「駅中のホテル出たとこで２人」
「はだしで走って山手線」
「よく振り切れたな〜」
「足は速いし山手線が発車しますだった」
「東京ではもう探せないかもしれない」
「わたしに公衆電話がきた」
「しばらくここを一歩も出ない方がいい」
「先里風香に連絡をしたいだろうけど止めた方がいい」
「あさはかだった」

空メール

７月17日木曜日だった。
「冷蔵庫の金庫のお金も使ってください」
湯花邪無は、メモを残してアースカーで羽田に向かった。
日本のライブチャンネルの１社が華美美鈴を追っていた。
東京駅中のホテルまではフィットしていた。
多分、誰にも見つけられないと思った。
８時37分のジャカルタ行きに乗った。
空港ロビーのライブテレビでもアース戦車のメカニズムをやっていた。まだ誰も見たことがない。ただ、１０００台の注文があるらしい。燃料補給が必要ないのだ。戦車としてはこのうえない。
このままでは、戦闘機もアースジェットができるのではないかと期待させる。

多分、先里風香は、このような流れを嫌ったに違いない。それだったら、石油の方がまだマシである。石油は、パワーに限りがある。
ジャカルタ空港からカレット駅のスパイスｙｕｈａｎａに向うアースカーの中で、ジャカルタのライブテレビが言っていた。アースバッテリーのレンジが急速に普及しているらしい。燃料代がタダなのだ。品質管理に工夫をこらしていたらしい。
ガスレンジの安全性は素晴らしい。
アースレンジの普及は、アフリカの人々に幸運をもたらす。一気に生活が近代化できる。アフリカ諸国には、１００万台のアース街灯が設置されるようだ。
次の１００年で、世界の人口の50％はアフリカ大陸に住むことになるだろうと思う。経済は人口である。日本のように８４００万しかいないのであれば、もう経済の勢いは二の次でいいことになる。それでもＮＯ１になりたがるアンバランスがどうにもならない。
「リニおはよう」
リニは駅でサンプルを配っていた。
「後の車が困ってます」
湯花邪無は軽く手を挙げてスパイスｙｕｈａｎａに向かった。
「この前食べた料理言ってみて」
ジンはいきなりあいさつもなく聞いてきた。
「わかんない？」
湯花邪無は覚えていなかった。料理を覚えるクセがない。
「ソトアヤム」
「鶏肉のスープか」
「サテ」
「肉だ」
「覚えないと料理できない」
「ホントに興味があるの？」
「カッコつけたいんだったらおいしくできない」
「よろいではない」
「よろいってなんだ」

「身体の外側に貼り付けたハクだ」
「オレは料理もできるんだ？」
「ソトアヤムがわからないようじゃよろいかもしれない」
「いじめてるのか」
「今晩また１つ覚えて」
「楽しみ」
19時まで中国スパイスを読んでいた。リーマイの論文である。
いつかはスパイス上海を出さないといかないだろう。インドネシアスパイスだけでは中国は難しい。
アースカーで、日本のライブチャンネルを見た。華美美鈴の東京駅での忘れ物を取り上げていた。写真で公表していた。
「昨日朝出かけたままホテルには戻っていません」
捜索願が出ないので警察は動かないようだ。
先里風香は動かないのだが、心配だろうと思った。
「チャブチャイ」
「野菜炒め」
「ナシチャンプル」
「韓国のビビンバ」
「どうぞ」
「いただきます」
「湯花邪無は日本では日本食食べているのか」
「そうだ」
「何を食べているのか」
「料理の名前がわからないの？」
「そうだ」
「日本のスパイスの研究していないのか」
「からしとかわさびとか」
「プレッシャーかけないでくれ」
「大学教授だから」
「混ぜるのか」
「最初に混ぜる」

２時過ぎだった。
はじめて沢風ゆりからスマホメールがきた。
電話もしたことがない。
カギを預けてあるのだ。気になることはテーブルの上にメモを置いている。
明日の夜は北千住なのに。
「空メールだった」
何かあったのだが、動くことは、余計に危険である。削除した。

アメリカに電話した

７月18日だった。金曜日である。
ジンは、朝ごはんをキチンと食べる。
「これはアボンごはんに卵」
「覚えて」
「一般的な朝ごはんなのか」
「ミスタージャムはずっと食べてきた」
「アボンごはんに卵」
「そう」
「わたし今日はお休みだからここにいて帰るから」
「ミスタージャムが出かけたら寝ちゃう」
「どうぞ」
「今日は料理教室だよね」
「ええ」
「それで新宿」
「ええ」
「いってらっしゃい」
湯花邪無はアースカーでスパイスｙｕｈａｎａに向かった。何も問題がないことを聞きたいだけなのだ。
「リニおはよう」
リニは、お店でお客さんに応対していた。

「ジンは今日はお休みです」
「わかりました」
「今日は料理教室ですか？」
「なにかありますか？」
「順調です」
「お茶煎れます」
「すぐ出ますから平気です」
湯花邪無は、ジンの部屋に入って、メモを見た。何もない。
「ミスターユハナはナイフの名人です」
料理学校の先生のミナは、驚いたように言った。
「今度はタマネギをみじんに切って」
「わたしのを見て」
湯花邪無は、これだったら何でもできると思った。果物の皮は得意である。誰も知らない。
ジャガイモはナイフで皮を剥ける。
「マイナイフを学校に置けるのですか？」
「家でやらないのか」
「午後東京に行く」
「ロッカーをどうぞ」
ミナはロッカーに案内してくれてカギをくれた。
「そのユニフォームは毎日洗った方がいいからもう１着買って」
「エプロンも」
「いくらですか？」
「事務に言ったらすぐくれるから」
「洗濯はここ」
「東京には就職？」
「ちょっと用事で」
「主夫もいいけど働いた方がいいけど」
「考えます」
湯花邪無は11時にスパイスｙｕｈａｎａに帰ってきた。１度スパイスｙｕｈａｎａに行く。ジンの顔を見て状況を判断する。ジンもリニも「順調です」

と日本語で答えることがフツウである。
「ただいま」
みんなミスタージャムを見ると、大きな声でアイサツをする。
「おかえりなさい」
不思議とみんな揃っている。こんにちわとおかえりなさいは難しいとは思うのだ。
不思議と揃っている。
「リニはいませんか？」
「おかえりなさい」
リニは冷たいハーブ茶を煎れてきた。
「なにかありますか？」
「順調です」
「これから新宿に行きます」
「わかりました」
「何かありますか？」
「今日包丁使いを褒められました」
「え？」
リニは、まさかという顔をした。
湯花邪無は、メールを極力使わない。日本に向かう時も、メール１つで空港に行くことはない。リアルに人を読んで仕事をしたいのだ。生きたいのかもしれない。
「牧野さんこんにちわ」
「水野さんいらっしゃいます」
牧野由香は、サンプルをお店の前で配っていたのだが、湯花邪無と一緒にお店に入ってきた。
「こんにちわ〜」
「おかえりなさい〜」
どういうわけだか社員のあいさつは揃ってしまう。こんにちわと、どう違うのかわからない。
牧野由香は冷たいハーブティーを煎れてくれた。
「ちょっと相談がある」

「どうぞ」
「日本のスパイスの話だけど」
「ええ」
「山井生江さんだけど」
「どういう方ですか？」
「信州の大学の大学院生です」
「来年の４月からだったら東京に移れます」
「研究テーマは日本のスパイスです」
「論文を送ってきています」
「会うことはできますか？」
「月曜の13時に来ていただけます」
湯花邪無は、ずっと心配している。沢風ゆりからの空メールだ。電話したいのだが、ガマンをしている。華美美鈴のことを気づかれたくないのだ。
「ただいま〜」
沢風ゆりが心配そうにキッチンのテーブルに座っていた。
「華美美鈴さんは？」
「昨日下の公衆電話からアメリカに電話した」
「先里風香に心配しないように伝えようとしたらしいんだけど」
「伝わったんですか？」
「先里風香は出なかった」
「そうでしょうね」
「エレベーターの監視カメラに撮られてるよね」
「ああ」
「公衆電話のところも」
「電話したことも」
「このマンションにいることがバレちゃうかもしれない」
「先里風香さんが日本に来ないようにしたかったと思うんだけど」
「ここから移るとしてもわたしは知らないし」
「どうしたらいいかわかりません」
「なんかありました？」
「まだなにもないけど」

華美美鈴が部屋から出てきた。
「ご迷惑をおかけします」
「わたしが行方不明になっていることが報道されているから」
「先里風香に知らせないといけないと思ったんですけど」
「東京駅中のホテルの支払いはどうしているのですか？」
「支払っていません」
「出頭しても事情聴取になってメンドーになるのかな〜」
「他に器物損壊とかありますか？」
「ホテルに荷物を預かってもらってることになるんだけど」
「警察も探しているの？」
「警察も探しているのだったら、ここまで来るんでしょうけど」
「ホテルから支払い要求が出てたら困る」
「ごはん食べて」
「そこに座って」
「わたしたちは食事した」
「話を聞かせてください」
「なぜ」
「先里風香がアメリカの戦車の会社に協力していないことに興味がある」
「湯花邪無を巻き込みたくない」
「いただきます」
「明日１日様子をみましょう」
「私は新宿にいます」
「明後日ギリギリで上海に出ましょう」
「湯花邪無も一緒に行くの？」
「羽田でホテルにホテル代を華美美鈴さんのカードで振り込んでメールする」
「出発の15分前」
「何もなければ上海に出ます」
「上海に出ればフロリダに行くのは自由でしょう」

バンコクに行ってきます

７月19日土曜日だった。
出かける時に、湯花邪無と華美美鈴はアドレスを交換した。
「最悪の時しか使わないことでいいですか？」
「沢風ゆりはスポーツジムに行く」
「わかった」
「宅急便にも出ないでください」
「わかった」
最も気がかりなことは、エレベーター内で華美美鈴が撮影されていることである。
監視カメラには捉えられているのだが、誰かが気がついたかどうかである。
羽田まで、アースカーでテレビを聞いていた。いつもアメリカのアース戦車を中心に報道している日本のライブチャンネルを聞いていた。
「捜索願が出ないので警察も手を出せないでいます」
華美美鈴が東京駅中のホテルに置き忘れているものと同じスーツケースだとして、写真が公開されている。
昨日と同じ内容である。
山手線池袋方面に乗ったことはわかっていて、池袋で見たという人も現れているらしい。
８時37分のジャカルタ行きに乗った。
50分しか乗っていないのだが、出発前50分のライブチャンネルも見れる。
もちろん、ドラマチャンネルも見れる。
ニューヨークゴジラに３メートルのピッチャーの入団が決まったようだ。３階建てのビルの屋上からボールが飛んでくるらしい。野球専門チャンネルもサッカー専門チャンネルも見てみた。
サッカーは、地を這うようなゲームだから、３メートルの人は適さない。１メートル80センチのメキシコのフォワードがバロンドールである。
アメリカのライブチャンネルを見てみた。
１００億の世界人口の食糧問題をやっていた。

アフリカ以外では、特に問題はないと言っている。中国も人口減少状態であり、食料を輸出している。インドも圧倒的な世界１の人口なのだが、人口は年々減少している。米の直播に成功して大規模な米作に成功している。
アフリカだけが人口増加と食糧問題に悩んでいる。
主要都市は、人口増加は止まっている。人間は、人間らしく生きることを望むと、あかちゃんを生まなくなる。先里風香の言っているとおりになっている。
人間らしくとは、頭脳のことだ。頭脳のコンセプトは、わからないことを明らかにすることだから、やりたいことが多くなる。
アメリカなどは人口減少が深刻である。移民を受け入れてきているのだが、中南米からの移民はメキシコが受け皿になってしまっている。
２１１４年からの１００年はアフリカの時代だと先里風香は言っている。
人類始まって以来、一旦豊かになったら必ず滅びる歴史を繰り返してきている。滅びないまま再生した都市や国家はない。
ニューヨークも上海や北京や東京や大阪も同じ道をたどっている。ジャカルタだって、今はすごいが、１００年後は、東京と同じようになる。
「ジンおはよう」
「今日わたしバンコクに行ってくる」
「なんですか？」
「バンコクからネット販売が多くなった」
「ホームページもないけど」
「ジャカルタのホームページに入ってくる」
「英語で入ってくる」
「毎日２００件近くある」
「クアラルンプールとシンガポールと同じように、宅配業者に倉庫を任せようと思う」
「あなたも会ってるジャカルタの宅配業者」
「ああ」
「いい？」
「わかりました」
「ミスタージャムはバンコクあんまり行かないけどごはん食べに行って」

「わかった」
「早く帰ってくるから」
周りを見て、リニがいないことを確認して言った。
「晩ごはんつくっておく」
「私は明日の朝６時の飛行機で東京に行きます」
「わかった」

走って車で北千住へ

華美美鈴は用意していた。７時45分の羽田発上海行きに乗る。帽子を深くかぶって背負いのバックを買うように言っていた。最悪の場合また走ることになる。
「わたしは後２メートルを歩くから声をかけないで」
「わかった」
「わたしが捕まってもそのまま上海に行って」
「わかった」
エレベーターには別々に乗って駐車場で待っていた。誰もいない。
沢風ゆりは心配そうに見送った。
７時25分に東京駅中のホテルにメールした。
「ホテル代を支払います」
そして、調べておいたＡＴＭから華美美鈴のカードでホテル代を振り込んだ。
これで、華美美鈴が羽田にいることが知れる。
湯花邪無は、上海行きのチケットをカードで買った。７時33分だった。
何かおかしいと思った。
華美美鈴がやってきて上海行きのチケットを買った。
「落としましたけど」
「走って車で北千住へ」と書いたメモとキーを渡した。
「ありがとうございます」
湯花邪無は、そのままセキュリティーへ向かった。時間がない。

振り返ると、華美美鈴がサンダルを両手に凄いスピードで走りはじめた。
追っているのは２人だったがおじさんのようだった。追いつけるわけもないと思った。
湯花邪無は、そのまま上海に向かった。
今度沢風ゆりに聞いてみようと思う。あなたたちは陸上競技部だったのか。

四面楚歌

湯花邪無は、日本のライブチャンネルを見ていた。
「お昼をご馳走したい」と言って、チョウシハンを呼び出していた。
羽田で猛烈な勢いで走る華美美鈴の動画が凄かった。最近は、誰でもがライブチャンネルのカメラマンになれる。湯花邪無のアースカーは出てこなかった。華美美鈴は、警察には追われてはいないようだ。誰かわからない集団に追われている。
北千住の湯花邪無のマンションに帰り着いたかどうかわからない。
捕まったら、どこかへ監禁されているだろうと思った。
電話やメールが来ないから、緊急事態にはなっていないかもしれない。
この映像は、先里風香も見る。安心するか心配するかわからない。
マスコミが、追った２人を明かしてくれると助かるのだが、難しそうだ。
「アフリカの料理もカプサイシンを使うのですか？」
「私は料理は専門ではないが唐辛子は頻繁に使うと思う」
「原産地は中南米だからメキシコ料理などには欠かせない」
「食べたら副交感神経になって眠ってしまって危ないからカプサイシンを入れて辛くして交感神経にしたのか」
「暑いとか寒い地方はそうだ」
「食べたら眠ってしまうから」
「眠ったら凍え死ぬ」
「人間の知恵なのか」
「日本でもお昼はカレーライスが好ましい」
「なぜだか13時から会議が多い」

「眠くならないか」
「ところで〜３メートルのピッチャーがニューヨークゴジラに入ったらしいけど」
「上海ドラゴンにも３メートルのピッチャーがいる」
「パシフィックリーグに入れたら楽しみだ」
「１００年後には４メートルになるのか」
「先里風香に聞いてくれ」
「このままだと、恐竜のようになる」
「食糧事情が恐竜に似ている」
「肉食人間が増えないことが幸いしている」
「いまでも１００億の人が暮らせるのは、アジアの草食系の人が多いからだ」
「米や野菜を食べている」
「幸いなことに、欧米の肉食中心の人は少なくなっている」
「今後１００年はアフリカ中心だと思うんだけど」
「アフリカの人も小麦粉や米粉やトウモロコシ粉と野菜を中心にするだろう」
「アフリカの人が肉食だったら危ない」
「食糧危機があって肉食恐竜が仲間を襲いはじめたんだろうから」
「仲間を襲ったら恐竜はゼロになる」
「奇跡的だが人間はラッキーだった」
「肉食人間が割合として減っているのに人間は４メートルになるかもしれないのはなぜだ」
「食糧には関係ない」
「大きくなることが地球で１番になることだと知っているからだ」
「そう先里風香が言っている」
「どこまで行くんだ」
「２足歩行だから限度があると思う」
「実際に、出産時のあかちゃんの体重は１００年前から変わらない」
「３０００ｇか」
「もう骨盤を通過できない」

「体は大きくなっているが骨盤の大きさは大きくならない」
「だから大きなあかちゃんは産めない」
「私も２メートルで88キロあるが、３キロで生まれてどうして88キロまでなるんだ」
「大きくなりたいから」
「食糧事情は良いし」
「食糧事情がワルクなったらまた小さくなるのか」
「それはそうだ」
「どこが限度なんだ」
「そんなことはわからない」
「骨盤を大きくするのではないか」
「骨盤を大きくするのは頭脳を大きくしたいからだ」
「それを制限している」
「ただ身体を大きくしたい欲求と頭脳を大きくした欲求のどっちが大きいかだ」
「どっちでも身体が大きくなってしまうけど」
「骨盤と頭脳の大きさは関連している」
「指の大きさもだ」
「豹のように大人の相似形で人間は生まれない」
「頭脳が大きいからだ」
「発育上早く発育させたい基本部分だけを大きくして生まれてくる」
「骨盤や頭脳のことか」
「そうだ」
「今でもギリギリだ」
「１万年くらい前からギリギリだ」
「２足歩行をなんとかしないと骨盤だけ大きくしたら早く潰れる」
「４足歩行に返るのか」
「新しい２足歩行」
「恐竜の２足歩行か」
「恐竜はだからゼロになった」
「やっぱり踵を使う方法がいいのか」

「そうだ」
チョウシハンと話していると、24時間話しているかもしれない。
湯花邪無には心配事がある。
上海15時発で羽田に戻った。
羽田では何もない。湯花邪無がウオッチされているような雰囲気はない。
アースカーを呼んだ。
北千住の湯花邪無のマンションにいた。
無事かどうかわからないが、車は北千住に帰っている。
タクシーに乗った。
テレビのライブチャンネルでは、今朝の羽田での華美美鈴の疾走動画が流れている。豹のようだったと解説されている。
「ただいま〜」
気をつけていた。タクシーを追っている車はなかったと思う。
沢風ゆりはまだインストラクターの仕事をしている。食事の買い物がテーブルにない。
「湯花邪無です」
「湯花邪無です」
大きな声をキッチンから出した。
沢風ゆりの部屋から華美美鈴が出てきた。
「運転免許持ってたんだ」
「自動車は見られてないと思う」
「ゆりは仕事に戻りました」
「警察が動いてないから助かります」
「成田も同じだろうな〜」
「ホテル代を払えたことは幸いでした」
「警察が追えないことですか？」
「ここのエレベーターの監視カメラに華美さんが映っているんだけど」
「警察だったらたどってくるかもしれない？」
「ええ」
「そうですね」
「ただいま〜」

沢風ゆりが帰ってきた。
「よかったね〜捕まらなくて」
「監禁されそう」
「先里風香さんを呼び出すネタに使われそう」
「ここでは注意しないといけない」
「美鈴もここから出ないようしないといけない」
「ごはんにしよう」
「マーボ豆腐だから」
「湯花邪無は明日はジャカルタ？」
「午前中は料理学校で午後は新宿です」
「夜はここなんだ」
「ええ」
「わたしも手伝うわ」
「なんか〜四面楚歌になりそう」

アース戦車のすっぱ抜き

７月21日月曜日で海の日である。月曜日は、なにかの祝日になっていて、週休は３日がフツウである。
海の日などは１００年前からある。
湯花邪無は、休みなど自分で設けていない。３６５日働いているといえば働いているし、３６５日休んでいるかのようでもある。
湯花邪無は秘書をつけない。湯花邪無と同じ行動をすることは難しい。必要もない。
８時のジャカルタ行きに乗る。
アースカーのテレビでライブチャンネルを聞いていた。まだ華美美鈴の羽田での疾走動画を流している。
行き先がつかめないらしい。ライブチャンネル３社は、警察に追って欲しいのだろう。発見される確率が高まる。ネタが増える。独自の捜索といっても難しい話だ。

警察も動く理由がない。
32号台風が発生したらしい。赤道直下の海がここ50年高温になっている。
６月から台風が発生する。
もう日本には、昔あったような木造のひ弱な家屋はない。木造でも、大きな梁を使った家屋になっている。最近は、木造のどっしりした家が流行っている。
湯花邪無の住んでいる高層マンションか、木造どっしりした１戸建ての家の両極端になってきている。日本の森林資源の有効利用がなされてきている。
日本は、地方の過疎も進んで、ドンドン森林化している。
ここ10年の風速60メートルを越える台風の連続で、日本の家屋は大きく変わった。
台風のライブ映像で、アース戦車問題は、話題として消えていくのではないかと思った。
「みんなおはよう」
「おはようございます」
どうして声が揃うのかわからない。
すでにしてスパイスを買うお客さんで混んでいた。スパイスｙｕｈａｎａのスパイスは、高品質高級でリーズナブルな価格なのだ。自分で農園から工房まで持っているからだ。
「リニおはよう」
「リニは今日はお休みの日です」
「わたしでは足りませんか？」
ジンの部屋でリニの名前を呼ぶのはおかしい。
「今日は料理学校ね」
「何かありますか？」
「順調です」
「バンコクの契約書をメールしました」
「見ました」
「賛成かどうか返事がないけど」
「ジンのやることにダメは出さない」
「ジンの絶対的な味方だから」

「愛されてる？」
「そうだ」
リニがいたら発しない言葉も出てくる。
「今日バンコクに商品を発送するから」
「ええ」
「８月１日からタイからの注文はバンコクから出すから」
「ベトナムからの注文も増えているのですか？」
「今は送料負担だから高いから少ない」
「いつかはやらないといけない」
「マニラはどうですか？」
「もう時間の問題」
「ジンが判断してください」
「そのつもりでいる」
「じゃ〜料理学校に行きます」
「わかった」
「今日は新宿です」
「わかった」
アースカーで料理学校に向かった。
近所の駐車場に止めている。
「ミスターユハナはどこから来ているのか」
「タベットのアパート」
「電車できているのか」
「アースカーだ」
「駐車場はどうしているのだ」
「近くの駐車場だ」
「料理学校の駐車場も平気だけど」
「便利だからかまわない」
「ソトアヤムをつくるから買い物をしてきて」
「みんなで一緒に買い物をしてきて」
「ここから先は個人授業はしないから」
「時々晩ごはん誘ってくれたら個人授業をする」

「ありがとう」
湯花邪無は教室に向かった。
女性が５人に男性が２人だった。
「ソトアヤムの買い物してきて」
「30分で帰ってきて」
近くのスーパーマーケットに歩いて行く。
「急に入ってきたけど」
「主夫もできるようにと思って」
「失業したのか」
「ヒマだ」
「あなたたちはなんだ」
「オレたち２人は夜レストランの厨房にいる」
「プロなんだ」
「まだ１ヶ月しか経ってないからここに入れられた」
「女性たちは」
「２人が主婦で３人がオレたちと同じだ」
「よろしく」
「日本人なのか」
「そうだ」
「なんでことばが話せるのか」
「ジャカルタが好きだ」
11時にはソトアヤムができた。
「みんなで食べましょう」
「日本に行くからテイクアウトしていいか」
湯花邪無は、食事袋をもらって自分のつくったソトアヤムを入れて、スパイスｙｕｈａｎａに向かった。
「ジンはどこですか？」
「銀行です」
「私が料理学校でつくったソトアヤムだけど食べてみてくれないかって言って下さい」
「新宿に行きます」

「わかりました」
「いってらっしゃい」
どうして声が揃うのかわからない。
ジャカルタのライブテレビ聞いていた。
アースカーで空港に向かっていた。
「アース戦車についてアメリカのライブテレビが内部資料をすっぱ抜きました」
「戦車のパワーのためにガソリン駆動できるようにしている仕様になっている」
「移動は、時速30キロでアースバッテリーで可能だが、戦闘状態や砂地や沼地などのパワーを要する場所では、ガソリン駆動を使えるようになっている」
テレビで仕様書が映し出された。
これは凄いニュースなのだ。これだったら、日本の戦車の会社も簡単にできる。もうやっているかもしれない。
日本の戦車の会社が慌てたのは、アースバッテリーが、より強力になったのではないかと思ったからなのだ。
これだったら、アメリカの戦車の会社に先里風香が協力することはないのだ。
これでもう華美美鈴を人質にする必要もないのではないかと感じた。
「こんにちわ〜」
「おかえりなさい〜」
新宿のスパイス湯花のみんなも声が揃う。示し合わせているわけではないのだろう。不思議である。
水野まさみの部屋に向かった。
「ミスタージャムさんです」
「山井生江さんです」
「こんにちわ〜」
「山井さん聞きたいことがあるでしょ？」
「日本のスパイスを商品にするつもりがあるのですか？」
「あります」

「なぜですか？」
「わざびなどはアジアの料理に合わせても活きるのではないかと思っています」
「もちろん日本では欠かせないスパイスですが」
「ジャカルタにスパイス工房があるのですか？」
「あります」
「見せていただけるのですか？」
「どうぞ」
「ｙｕｈａｎａの森もあります」
「農園ですがほとんど森です」
「スパイスのほとんどはここで育てています」
「わたしは八ヶ岳でわさび畑をつくっています」
「研究です」
「わさびを畑からやるつもりはありますか？」
「どうしてわさび畑をやっているのですか？」
「わさびは育てることが難しいから」
「明日ジャカルタですけど８時の便に乗ってください」
「旅費は水野さんからもらってください」
「領収書で清算でいいですか？」
「ええ」
「27日の日曜日に八ヶ岳のわさび畑を見せてください」
「もし水野さんも行ければ」
「ジニを連れて行ってください」
「和食に興味があるから」
「新幹線で８時新宿発で」
「１時間で諏訪に着きますから車で待っています」
少し時間は早かったが湯花邪無はスパイス湯花を出た。
「お先に～」
「おつかれさまです」
不思議とことばが揃っている。リハーサルでもやっているのだろうか。
アースカーのライブテレビを聞いた。アース戦車を誰がすっぱ抜いたのか話

題になっていた。アメリカの戦車の会社は、注文がキャンセルされて困っていた。
やはりアースバッテリーのパワーには限度があると思わせた。
「ただいま〰」
「おかえりなさい」
沢風ゆりと華美美鈴は２人でライブテレビを見ていた。
「ごはんできているから」
「シャワーしてきます」
「アメリカの戦車の会社注文キャンセルで困ってる」
「ウソは良くない」
「平坦な場所ではアースバッテリーで動く」
「戦車だから」
「湯花さんは今度いつ上海に行くのか」
「明日ジャカルタに行く」
「明日の朝もう１度トライさせてくれないか」
「日本の戦車の会社は先里風香に協力させる必要はなくなった」
「日本円で13万円あるからこれを使ってください」
「華美さんのカードは明日は使わないで」
「８時発のジャカルタです」
「私には連れがいます」
「女性で学生で社員にするつもりです」
「アースカーのキーを預けておきますから最悪の場合はこの前と同じようにしてください」
「ジャカルタに行けたらこの日本円でフロリダに行ってください」
「キーは落し物だと言って私にください」
「いいですか？」
「了解した」
「もう戦車の会社はわたしを必要としない」
「気を抜いたら危ないから」
「また走る」
「走ることだったら誰にも負けない」

豹のように走った

「おはようございます」
山井生江は国際線チケット売場で待っていた。８時の便は○だった。
座席を指定して隣にした。
華美美鈴は、先に買ってセキュリティーに行っているはずである。
「困ります！」
大きな声がした。華美美鈴の声だった。
「困ります！」
サンダルを両手に持って。豹のように走りはじめた。
湯花邪無と山井生江は、他人事のように眺めていた。スマホカメラが回っていた。
「どうしたんでしょうね」
湯花邪無は返事ができなかった。捕まったのを振りほどいたのだろう。２人の黒っぽいズボンに白ワイシャツのおじさんぽいオトコは、１００メートルで諦めた。それほど華美美鈴は速い。華美美鈴はノミのようである。１度で捕まえないと２度と探せない。
「インドネシアは何語を話すのですか？」
「インドネシア語が多いです」
「多いってなんですか？」
「鹿児島弁とか青森弁とかのようです」
「昔の日本みたいなんだ」
「それでもインドネシア語が90％になっていますが英語も話せます」
「ミスタージャムはインドネシア語が話せるのですか？」
「ええ」
「どうしてですか？」
「インドネシアの大学を卒業してるから」
「どうして？」
「放浪していて大学に入れてやると言われた」

「優秀だからではない」
「他にやることがなかった」
「ジャカルタの何がいいのか」
「経済でも勉学でも１番になろうなんて思わないこと」
「ありのまま生きてる」
「ジャカルタは発展したけど」
「発展させようと思ってないからいい」
「東京のなんでも１番になりたがる風習はスキではない」
「ミスタージャムは日本から逃げたのですか？」
「日本は好きで愛している」
「今は日本より世界が好きだ」
いきなりだったが、スパイスｙｕｈａｎａに山井生江を連れて行った。
「スパイスｙｕｈａｎａを仕切っているジンです」
「今度日本のスパイスを研究することになった山井生江さんです」
「よろしくお願いします」
「日本のスパイスってなに？」
「代表的なものはわさびです」
「最近はジャカルタでも使う人がいます」
「スパイスｙｕｈａｎａの話をしますか？」
「山井さんの興味はｙｕｈａｎａの森にあるからタベットに行きます」
ジンは、今晩はどうするのかを聞きたかった。まさかタベットのマンション
に連れて行くことはないとは思うのだが、わからない。
「ミス山井は今日の宿はどうしているのだ」
「長野に帰ります」
「明日大学で研究報告会があるので」
「わかった」
「タベットに行きます」
「エミルとガダラに連絡しておきます」
「お願いします」
湯花邪無は、アースカーで山井生江を待っている間に、日本のライブチャン
ネルを見た。

華美美鈴が両腕を抱えられているのを振りほどくところから動画で撮られていた。２回目の「困ります！」からだろう。そこからは、豹のように疾走する華美美鈴がいた。豹が逃げて羊が追っているかのようであった。
「ここを仕切ってるエミルです」
「日本のスパイスを研究する山井生江さんです」
「仲間になるのか」
「よろしくお願いします」
「日本のスパイスってなんですか？」
「代表的なスパイスはわさびです」
「なるほど」
「タベットのスパイス工房はｙｕｈａｎａの森の植物を商品としてのスパイスに加工しています」
「商品は44種類あります」
「１年に１回集中して生産しなければならないスパイスも多いから、毎日工場のように動いているわけではありません」
「案内します」
湯花邪無は、スマホで日本のライブチャンネルを見た。
どうして華美美鈴が逃げているのかが焦点になっている。追っているオトコは、日本のアース戦車の関係者ではないかと言う解説者もいた。
警察沙汰になっているわけではないので、みんなの興味はあるのだが、ライブチャンネルの独自調査では、事実を追いきれない。
そして、２回も羽田で疾走して逃げた華美美鈴はどこにいるのか、占いに似た予測になっている。
「ガダラがｙｕｈａｎａの森の昼食を一緒に用意するけどって言ってる」
「じゃ〜ｙｕｈａｎａの森へ行きます」
ｙｕｈａｎａの森は、タベットなのだが、更に郊外にある。
「給食があるのですか？」
「新宿もスパイスｙｕｈａｎａもスパイス工房もｙｕｈａｎａの森も、給食をみんなで一緒に食べる」
「お店は休むのか」
「お店は交代で食べる」

「外に食べに行けないのか」
「自由だけどおいしいからみんなリビングで給食を食べる」
「インドネシアではフツウなのか」
「私の考えだ」
「長野に湯花の森をつくっても同じようにしていいのか」
「そうだ」
「わたしに任せてくれるのか」
「そこまでまだ信用していない」
「ガンバル」
リーマイが一緒に行くと言ってアースカーに乗ってきた。
「わたしは中国スパイスを研究している」
「いつか中国にｙｕｈａｎａの森をつくりたい」
ガダラとステファノが待っていた。
ステファノがｙｕｈａｎａの森を案内した。
「ごはんできたら知らせるから帰ってきて」
「わかった」
なにせサッカー場が５００もあるほどの大きさである。アースカーで移動している。トラックもアースカーでトラクターなどもアースバッテリーだ。
「お昼の連絡でステファノとリーマイと山井生江が帰ってきた」
「ジャカルタのフツウのお昼ごはん」
「ありがとうございます」
「これは誰がつくっているのですか？」
「交代だけどガダラがつくることが多いかもしれない」
「野菜はすべてここでつくっているからスパイスｙｕｈａｎａにもスパイス工房にも送っている」
「人参もつくっているのか」
「ジャガイモもなんでもだ」
「米もつくっている」
「米は直播でやっている」
「小麦もやっている」
「余るのではないか」

「社員に公平に分けている」
「売ったりしないのか」
「曲がったキュウリやナスなど困るしスパイス以外は売らない」
「何人でやっているのか」
「12名だ」
「みなさん働き者の感じがする」
「おもしろいからだ」
14時30分になってリーマイに案内されていた
山井生江が帰ってきた。
「ミスタージャムわたし長野に帰ります」
「リーマイが送ってくれると言っているんだけど」
「エミルが良かったらお願いしてください」
湯花邪無はスパイスｙｕｈａｎａに戻った。
「冷蔵庫にソトアヤムの材料を買っておいたから自分でやってください」
「同じナイフも買っておいた」
「ごはんは日本の炊飯器がいい」
「ジンはいないのか」
「20時くらいになる」
「ごはんをつくって待ってる」
「わかった」
湯花邪無はタベットのマンションで時間があった。日本のライブチャンネルを見た。アメリカの戦車の会社は、アース戦車の受注が半分キャンセルになったと発表した。
世界のオートバイの50％がアースバッテリーになったと世界オートバイ協会が発表した。
ジャカルタでは、オートカーやオートバイクは、80％くらいではなかと湯花邪無は感じている。ムリに前に出ようとする人が少ないからだ。冷蔵庫も大容量のアースバッテリー冷蔵庫に切り替わっている。ジャカルタではもうすぐ全冷蔵庫が大容量アースバッテリー冷蔵庫になる。電気代がタダである。
湯花邪無のマンションの近所では、アースレンジのアンケートが行われている。ガスを使わなければ、ガスのパイプラインを撤去したいのだ。１ヶ月に

１度は、どこかの国でガス管の爆発事故があった。老朽化のためだ。
次代のために、安全のために、アースレンジの普及をしたいのだ。
多分、１年以内にガス管は撤去されるだろう。

サケの揚げ物ジャワカレー

「ダメ」
「朝ガンバルと疲れる」
「じゃ〜シャワーして先に行きます」
「残念そうに言わないで」
「明後日を楽しみにしてる」
「わかった」
「ごはんおにぎりにしてある」
「わかった」
料理学校である。スパイスｙｕｈａｎａに寄る。今日は早いのでオープンはしていない。掃除をしている。
「リニおはよう」
「ジンはまだ来ていません」
「平気です」
「料理学校ですか？」
「そうです」
「ハーブティ？コーヒー？」
「コーヒーがいいです」
「リニ何かありますか？」
「順調です」
湯花邪無のスパイスの仕事は、湯花邪無がいなくても動く。湯花邪無はいないのだが、３６５日働いている感じではないが、動いている。
「今日はサテアヤムをやります」
「日本の焼き鳥です」
「みなさんで買い物に行ってください」

「スパイスがポイントです」
「25日は魚料理です」
11時になって、「みんなで食べてみましょう」とミナが言った時、「日本に行くからテクアウトしていいか」と湯花邪無が言った。
「ミスターユハナは結婚しているのか」
「１人だ」
「恋人が日本にいるのか」
「母親が日本にいる」
ミナは残念そうに料理を入れるビニール袋を渡した。
湯花邪無は、アースカーでスパイスｙｕｈａｎａに帰る時、ライブチャンネルが、ジャカルタの虫歯と歯周病がゼロになったと言っていた。
湯花邪無も欠かさず使っているが、マウスバクテリアチェッカーが、なんといっても大きく寄与した。
マウスバクテリアチェッカーは使い捨てのセンサーで、口に１分くわえていて、パソコンに接続した専用分析台にセットすると、口中のバクテリアの種類と量が表示されるものだ。
マウスバクテリアチェッカーは１００枚入りを３００円で売っている。分析台は日本円で１０００円である。パソコンソフトは無料ダウンロードできる。
歯の専門医は、歯を削ることが仕事ではなくて、有効な口中の菌バランスをアドバイスすることが仕事になった。
もちろん、湯花邪無は歯ブラシは欠かさない。
「こんにちわ〜」
「おつかれさまです」
「どうして日本語でこうも揃えられるのかわからない」
ジンがいなかった。
「今日の料理ですか？」
「ジンに食べてくれって言うんですか？」
「なんですか？」
「サテアヤム」
「ジンはクアラルンプールです」

「14時には帰ってきます」
「私は新宿に行きます」
「わかりました」
「冷蔵庫に入れておきます」
「ジンのメモをお探しですか？」
「順調なので何もないと思います」
「お昼はみんなと一緒に食べますか？」
「13時に新宿に行かないといけないから」
「間に合いません」
「じゃ〜出ます」
リニは、湯花邪無のアースカーまで送ってきた。
「気をつけて」
「リニも」
羽田からスパイス湯花のアースカーの中で、ライブテレビを聞いていた。
アース戦車のことは、変わったことは何もなかった。
「こんにちわ〜」
「おかえりなさい〜」
どうして声が揃うのかわからない。
「スパイス教室はどこでやっているのですか？」
「プレゼン室です」
湯花邪無は、水野まさみの部屋へ一旦行った。
メモが何もなかった。順調なのだ。
湯花邪無は、料理教室で使っているノートを持って、プレゼン室に向かった。
いままで、スパイス教室などやっていることを知らなかった。水野まさみも、ミスタージャムは、料理のことは興味がないと思っていたに違いない。
何も知らせなかった。
プレゼン室をそっと開けた。
ジニがやってきた。
「後でいいです」
「聞いているだけだから」

料理教室ではない。水野まさみのスパイス使いをメモして、帰って自分で調理するスタイルだ。もちろん無料の教室だろう。
サケの揚げ物のスパイスカレーだった。
すでにジニがサケを揚げていた。６種類のスパイスとココナツミルクと野菜でカレーが仕込まれていた。
「今日のレシピをください」
「おつくりになるんですか？」
「やってみます」
「スパイスはありますか？」
「ゼンブあります」
「どうぞ」
ジニはこれまでのスパイス教室のレシピ集をエクセルで送ってくれた。
湯花邪無には、自分で料理をつくってみる時間がない。考えないといけない。たまには、ジンにごはんをつくってあげられるといいと思った。
「ただいま〜」

０時30分に上海に出る

沢風ゆりと華美美鈴は料理をしていた。
「おかえりなさい」
「やっぱり速かったんだ」
「誰にも見つかってないと思う」
「冷蔵庫の金庫のお金使ったから」
「どうぞ」
「財布から５万円を出して冷蔵庫の金庫に入れた」
「どうしてまだわたしが狙われるんでしょうね」
「アメリカの戦車がアース戦車じゃなかったらオレたちの戦車をアース戦車にしよう」
「欲が深いと思いますけど」
「儲けのエクスタシーあるから」

「儲けるためにはなんでもやるんですか？」
「ええ」
「夏野菜の蒸し上げと豚さん」
「ごはんは白ご飯にきんしょうばい」
「夏野菜のお味噌汁」
「いただきます」
「着替えてきます」
湯花邪無は、久しぶりにお酒を飲んだ。冷たくした日本酒である。
「コーヒーがいい？」
「お願いします」
ゆったりした時間である。
華美美鈴が狙われていなければ、余裕の時間である。
「湯花邪無さんは明日はなんですか？」
「私はジャカルタに８時の便です」
「明日はじっとしていた方がいいですね」
「ええ」
「湯花邪無に迷惑はかかってないですか」
「なにもないです」
「ありがとうございます」
「多分彼らに捕まらなかったら羽田は出ることができると思います」
24時間監視してるんでしょうか」
「多分」
「０時30分上海もありますけど」
「明日やってみますか？」
「湯花邪無さんはどうするのですか？」
「上海からジャカルタに行けばいい」
「車のことがあるから一緒じゃないと困るから」
「華美さんが疾走しなければならないというリスクがあるんだけど」
「それは得意ですからなんでもありません」
「出たいですか？」
「先里風香さんにすごく心配をかけているから」

「よしなさいと言われていたのに日本に来たから」
「あさはかでした」
「ゆりさんどう思いますか？」
「ここが安全ですけどどこまで安全でいられるかわかりませんから」
「じゃ〜早く寝ましょう」
「11時30分にアースカーで出ます」
「わかりました」

３回目の出国トライ

湯花邪無は０時10分に羽田のチケット売場にいた。○である。
華美美鈴は５分後にやってくる。車のキーは華美美鈴が持っている。
セキュリティーは昔とあまり変わらないことをやっているのだが、出国検査は顔パスである。湯花邪無などは、どこの空港でもパスポートとカメラで自動で通れる。ギリギリでも大丈夫である。湯花邪無を引き止めるブザーなど鳴らない。
華美美鈴も同じであろう。先里風香の代理で、世界中に行っている。今回の東京駅中のホテルの支払いをしたことで、華美美鈴を止める理由はないだろう。
警察に追われると、何でも理由はついてしまうのだろうが、今回は警察には追われていないようだ。
湯花邪無はそのままゲートに向かって、搭乗した。顔パスなので偽名などできない。
最前列のファーストクラスにいた。５分後に華美美鈴がやってきた。成功したのだ。
華美美鈴は会釈をするわけでもなく、後の席に向かった。
湯花邪無は、上海の空港で中華のおじやを食べた。30分してジャカルタ行きに乗った。
空港からスパイスｙｕｈａｎａへ行くアースカーの中で、アース戦車のニュースを探した。

しかし、どこにもニュースはなかった。華美美鈴が、羽田から上海に出国したというニュースはなかった。成功したと思った。今頃は、華美美鈴は、フロリダに向かっている。
「おはよう」
「おはようございます」
どうして声が揃うのかわからない。
「ジンは今日もクアラルンプールです」
「何かトラブルでも？」
「倉庫を増やしています」
「マレーシアの売上が増えています」
「問題があるわけではないのか」
「順調です」
「厨房はどうなっていますか？」
「まだお昼の用意をはじめていません」
78人の社員の昼食は、みんなで交代につくっている。おかずは大容量のアース冷蔵庫にある。主菜をつくるだけだ。そしてごはんをいろいろ工夫している。人数が多いがビッフェ方式だ。みんな自分が好きなものをよそってくる。
「30分借りるから」
「キレイに使ってください」
湯花邪無はキッチンから、サケの揚げ物ジャワカレーのレシピを持って外に出た。
スパイスはすべてキッチンに揃っている。
ごはんは炊いている時間がないのでレンジごはんを買った。
サケの揚げ物のレシピがない。
「リニちょっと時間がないか」
「キッチンですか？」
「サケの揚げ物ができないんだけど」
「小麦粉と卵とパン粉を買ってきます」
「私が行くからいい」
「ジンの冷蔵庫とラックに食品を置いてください」

「みんなキレイにキッチン使うから食品もわかってるから」
「卵１つなくなってもわかるから」
「理解した」
湯花邪無には、サケの揚げ物をつくることがタイヘンだった。
掃除をしているとリニがやってきた。
「どうだ？こんなもんで」
「グッドだ」
「どうもありがとう」
「ミスタージャムはどうしたのだ」
「料理人になる」
リニはあり得ないという顔をして湯花邪無を見ていた。
まだ11時だったが、湯花邪無は、サケの揚げ物とジャワカレーを食べてみた。
辛過ぎて食べられなかった。
ジニに送ってもらった、水野まさみスパイス教室のレシピ集を開いてみた。
多分、１桁間違えてスパイスを使った気がした。
幸いなことに、まだジンは帰っていなかった。
食品のポリ袋に移して３重にしてアースカーに持っていった。
こういうときに、どこに棄てたらいいのか、湯花邪無はわからない。
ジャカルタのゴミの収集がどうなっているのかわからない。
タベットのマンションは、すべてジンがやっている。ゴミがどうなっているのかわからない。北千住のマンションも沢風ゆりがやっている。
リニがやってきた。
「どうでした？」
「食べたのですか？」
「今日のお昼はキャンセルですか？」
「食べます」
「おいしくなかったのですか？」
「辛過ぎた」
「食べられない？」
「ええ」

「どうしたのですか？」
「棄てたのですか？」
「ええ」
「どこですか？」
「車」
「車に臭いが着きます」
「キーを貸してください」
「どうするんだ」
「スパイスｙｕｈａｎａは業務用で毎晩ゴミを収集してもらっているんです」
リニはアースカーから食品のポリ袋持ってきて、どこかへ持っていった。
「こんなことはわたしに言ってください」
「ジンには内緒にしておきますから」
「ありがとう」
結局ダメだった。こんなんでスパイス学の教授でいいのだろうかと思ってしまう。
「ただいま」
「遅いけど」
「なにやってんの？」
「中国スパイスを調べていた」
「中国やるのか」
「研究中だ」
「早く帰るんだったら料理を教えようと思ったんだけど」
「今日は牛肉のココナツ煮」
「ワイン冷たくしてある」
「ありがとう」
「どうど」
「着替えてきます」
「用意してる」
ジンからお昼のサケの揚げ物とジャワカレーの失敗の話が出なかった。リニはジンに内緒にしているのだと思った。

「明日はどうするの？」
「料理学校に新宿だ」
「わたしは休みだからガンバル」
ジンが休みの前は良くない。湯花邪無は睡眠不足になるのだ。
さっき眠りについたようだったが、７時には暑くて目が覚めた。
ジンは眠っている。
シャワーに起きてキッチンへ向かった。
「ビーフンソバをチンして食べて」
夜中に起きてつくったのだろうか。
お互いにさっき眠ったばかりである。
「おはよう」
「おはようございます」
お客さんが驚くがおかまいなしである。
「コーヒー？ハーブ茶？」
「コーヒー」
「ホット？」
「ありがとう」
湯花邪無は、スマホでイヤホンで日本のライブチャンネルを聞いた。
華美美鈴の話はどこも出てこない。多分、フロリダに届いたのだと思った。
「ミスタージャムは料理に慣れてないからスパイスの量を失敗するけど仕方がないから」
「わたしたちは身体が覚えている」
「そこまでいかないと難しい」
「ありがとう」
リニはジンがいなくても立派にやっていけるかもしれないと思ってしまう。
週に３日も休むのだから、リニのよういな人がいなかったら運営できない。
「ミスターユハナ今日は勉強してきたか」
７月25日金曜日である。魚料理だ。ナイフ使いを練習してきたかである。
「忙しくて練習していない」
「今日はケンバングの唐揚げバラードソースだ」
「ケンバングを１匹買ってきて」

「みんなで１匹か」
「１人１匹」
「わかった」
湯花邪無はスマホでケンバングを調べた。サバである。
サバをどうするのだろう。３枚におろしたりはしないだろう。
サバはデカイがどうするのだろう。
誰も湯花邪無を知らない。１人者で失業者だ。主夫の修行をしている。
ワイワイ言いながらスーパーに来た。
湯花邪無は買い物をしないからわからないが、最近の日本の女性はサバをわからないのではないかと思う。水族館でしかわからない。
みんな調理してあるのだ。
沢風ゆりが自分で調理することが驚きでもある。
魚コーナーに行くと、魚をそのまま売っている。
日本ではあり得ない。サバが小さい。
「切るのか」
「そのままでよい」
魚売場が切ってくれるようだ。
「内臓だけ出して」
「頭はどうするのだ」
「つけていて」
ミナはサバの内臓だけを取り出してみせた。
次にスパイスを使ってのソースつくりだった。
少し小さいサバを唐揚げにしてスパイスの効いたソースをかけて食べるのだ。
サバは骨が硬くて、さすがに、骨ごと食べるわけにはいかない。箸でより分けて食べる。
「ミスターユハナはおいしくできたのか」
「まあまあだ」
「今日は東京ではないのか」
「食べたら東京に行く」
「それは残念」

湯花邪無は急いでスパイスｙｕｈａｎａへ向かった。
「こんにちわ〜」
「おかえりなさい」
「リニ何かありますか？」
「順調です」
「今日の料理はなんですか？」
「サバの唐揚げバラードソース」
「持ってないけど」
「食べました」
「グッド？」
「まあまあかな」
「コーヒー？」
「新宿に行きます」
「わかりました」
「ジンが休みなのはわかっていますか？」
「知っている」
「リニはアースカーまで送ってきた」
湯花邪無は、アースカーで、日本のライブチャンネルを見た。アース戦車のことはどこもやっていない。多分、華美美鈴は、フロリダに届いたのだ。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
湯花邪無は水野まさみの部屋へ行った。
「ミスタージャム今日の料理はなんだったのですか？」
「サバの唐揚げバラードソース」
「難しい料理をやったんだ」
「まあまあだった」
「なんかありますか？」
「順調です」
「わさびを読んでいますから」
「わかりました」
「山井さんとは連絡をとれていますか？」

「新宿駅８時の新幹線です」
「ジニもわかっていますか？」
「ええ」
湯花邪無はわさびを本格的に研究しないといけないと思っている。
18時になって、湯花邪無は電車で北千住に向かった。
華美美鈴は、上海で、落し物だといって、湯花邪無にアースカーのキーを渡してくれるはずだった。忘れてそのままフロリダに行ったのだろう。そのうち郵便で送ってくれるだろう。
「ただいま〜」
「おかえりなさい」
沢風ゆりがキッチンで待っていた。
「華美さんはフロリダに帰れたんだろうか」
沢風ゆりの目からなみだが流れてきた。
「どうしたんですか？」
華美美鈴が沢風ゆりの部屋から出てきた。
「え？」
「上海で捕まって脅されて羽田」
「犯罪だけど」
「スマホはどうしたんですか？」
「上海空港で捨てました」
「それは残念」
「キーはどうしました？」
「ブラジャー」
「え？」
「羽田でまた走ったのですか？」
「上海は逃げ方がわからない」
「脅されたフリして羽田に帰ったのか」
「グッドアイデアだったかもしれない」
「同じ飛行機に乗っていたのですか？」
「ええ」
「スマホが残念だな〜」

「スマホでゆりがわかるし湯花さんがわかる」
「すごい執念だな〜」
「仕事のプロだと思う？」
「足が遅いから助かるけど」
「これでわかったことは〜アメリカの戦車の会社に関係なく先里風香に協力させたいことだ」
「先里風香は、たとえ華美さんに何があったとしても、日本に来ることに応じませんよ」
「戦車を動かすほどのパワーアップの方法を要求されても、応じませんよ」
「方法がわかったら人間は際限がないから危ない」
「ごはんを食べましょう」
「でもなにもなくて良かった」

先里風香

プサン

７月26日土曜日である。
湯花邪無は、ジャカルタに向かった。
８時の便に乗る。
「美鈴がいなくなった」
「探さないでほしいというメモがあった」
沢風ゆりからのメールだった。
華美美鈴は、どうしてもフロリダに帰らないといけないのだろう。先里風香の代理人をやっている。戦車だけではない。アフリカの国は、一気に近代化をしている。アースバッテリーの街灯などもやっている。信号のアースバッテリー化も進めている。
みんな華美美鈴がやっているのだ。先里風香は表に出ない。そもそもオトコかオンナかもわからない。誰も顔を見たことがない。
「おはよう」
「おはようございます」
もうすぐお店をオープンする」
「明日の日曜はなにかあるのか」
「山井生江さんと長野のわさびの森に行きます」
「今日は新宿に帰るのか」
「わかった」
「わたしはホーチミンに行く」
「ベトナムもはじめるのか」
「ジャカルタの宅配の会社がホーチミンに会社をつくったので見に行く」
「ああ」
「わたしに任せていいのか」
「もちろん」
「８月13日は誕生会だから」

「どうするんだ」
「日本料理とおすしをやる」
「マグロの刺身のショーをやる」
「すごいな～」
「お金かかるけどみんな楽しみにしてる」
「もう知らせてあるのか」
「みんな家族がいるから調整する」
「リニは今日は休みの日だから」
「わかった」
沢風ゆりからのメールがきた。
「いってきます」
「気をつけて」
「プサン行きの船の中にいる」
「15時にプサンに着く」
「お金がない」
「ターミナルビルから出ないように」
「どうするの？」
「プサンに行く」
「公衆電話の前にいるから伝える」
プサンでカードを使わないで移動することは難しい。
湯花邪無は念のためにジャカルタープサン14時を予約した。
わさびは新鮮が売りのようだ。スパイスｙｕｈａｎａが売っているスパイスとは異なる。
スパイスのように粉末にすることは簡単にできる。それはそれでスパイスとして使える。刺身などに使うわさびだ。
練りわさびはたくさん売っている。
スライスわさびだったらどうなるのか考えてみた。０・１ミリよりももっと薄くする。スライスしたまま真空パックで販売する。薄いから箸で裂くことができるだろう。刺身に乗せればよい。新鮮をパックできるのではないか。
０・１ミリより薄くスライスできるのだろうか。
「ミスタージャムリビングにごはんを用意してある」

新入社員のラナンが呼びに来た。
「一緒に食べてもいいか」
「どうぞ」
ラナンは18歳である。
「ジンから電話があった」
「なんだって？」
「１人で寂しいから一緒に食べてくれ」
「ありがとう」
ナシチャンプルである。
ごはんを真ん中についで、まわりにおかずを好きなように乗せて食べる。
おかずが10種類くらい用意されている。
そしてスープだ。
ビッフェである。
「ジンは14時に帰ってくると言っていた」
「私は用事があるから14時にジャカルタを出ます」
「ジンに伝えておく」
「ええ」
「ミスタージャムはカラオケは上手なのか」
「下手だ」
「今度一緒に行かないか」
「10代の４人で週１で行っている」
「ジンに言ったら誘ってもかまわないと言っていた」
「今度行くときメールしていいか」
「わかった」
湯花邪無は14時45分にはプサンにいた。タクシーで栈橋である。そう遠くはない。
湯花邪無はターミナルビルで待った。
15時10分になって、ゾロゾロとお客さんがやってきた。
下関ープサンは１時間である。高速船で飛ぶように海を走る。
華美美鈴は、すごいことを思いついた。
新幹線で下関に行ったに違いない。現金が尽きたのだ。

最後まで待ったのだが華美美鈴は降りて来なかった。
「湯花邪無さんありがとう」
「振り向かないでそのまま空港に行きたい」
華美美鈴の声だった。チョゴリ姿をしていると思った。どこから見ても韓国女性なのだろう。
湯花邪無は、タクシーでさっき来たプサン空港へ向かった。千ドルをそっと渡した。
タクシーの中では何も話さなかった。
湯花邪無と華美美鈴は、連れのような雰囲気ではなかった。何も話さない。
華美美鈴は、プサンから仁川空港のチケット買った。さっきのアメリカドルで買った。それを見ていた湯花邪無は、同じように仁川空港までのチケットを買った。
湯花邪無も華美美鈴も外国人だが、パスポートと顔パスで通れる。
湯花邪無はチョゴリ姿の華美美鈴を正面から見た。似合っている。
何も話さない。仁川空港を出るまでは安心できない。
華美美鈴は、仁川空港発17時15分ニューヨーク空港のチケットを買った。
湯花邪無は後から見ていた。そして羽田行きのチケットを買った。17時38分である。華美美鈴が搭乗するのを見届けようと思った。
ニューヨーク行きのゲートまでの動く歩道に乗っていた。前に華美美鈴がいる。もう搭乗がはじまっているかもしれない。
後からチョゴリのお年寄りがやってきた。
「助けていただいてありがとう」
それだけ言って、湯花邪無と華美美鈴を追い越して行った。
華美美鈴は立ち止まってシューズを直した。
「先里風香はさっきフロリダからきて韓国に入国していない」
「ありがとう」
華美美鈴は、それだけ言うと、搭乗口に向かった。
湯花邪無は、17時15分発ニューヨーク行きが出発するのを確認して羽田行きのゲートに向かった。

アースライティング３０００万記念式典

「ただいま〜」
「おかえりなさい」
「どうなりました？」
「先里風香に会いました」
「え？」
「10秒くらいだったけど」
「助けてくれてありがとうって言われました」
「どうして」
「仙川空港から出ていなかったんです」
「フロリダから来たの？」
「そうらしいです」
「美鈴は知っていたの？」
「知っていたと思います」
「どうやって連絡とったの？」
「わかりません」
「昨日の夜は何もなかったでしょ？」
「そうですね」
「じゃ〜アメリカに行ったんだ」
「私が確認しましたから」
「先里風香がアイデア出したのね」
「多分」
「新幹線で下関から船でプサンって〜フツウは気づかない」
「そうですね」
「いろいろありがとう」
「湯花邪無には迷惑かけた」
「このことは終わりだから」
「ええ」
「肉じゃがにネギ納豆」

「食べましょう」
同じベッドで眠るのは久しぶりだった。華美美鈴がいたのだ。沢風ゆりはベッドルームにいた。
ニューヨークのライブチャンネルを見てみた。
「ちょっと来てください」
「なに」
華美美鈴だった。早朝である。
「今日のアフリカアースライティング３０００万記念式典に先里風香の代理で出席します」
「うち１０００万は街灯です」
アフリカ諸国は、一気にアースライティングに変わってしまう。欧米や日本などの昔の先進国は、電力供給のしがらみがあって、アースライティングに全面的に移行できないでいる。日本の電力供給会社が、アースライティングのシステムを販売する話もあったのだが、自ら首を絞めるようなものだという議論に、頓挫してしまった。
中国もインドも躊躇している。インドネシアが積極的にアースライティングを取り入れている。３基あった原発を止める法案が通過しそうである。
「日本で行方不明になったとの報道がありますが、このとおり元気ですので、明日カサブランカにまいります」
「２度も羽田を疾走しているあなたの動画がアップされているのだが」
華美美鈴は、質問には一切応じずに、引き上げた。
「美鈴のことは考えないで」
「ハイボール」
「ありがとう」
沢風ゆりは、スポーツジムのインストラクターである。火がつくと止まらない。

湯花わさびの森

７月27日日曜である。

「ちくわ〜わさびで食べて」
「新宿何時？」
「８時」
「今晩は？」
「ここに帰ります」
「私がごはんやるかもしれない」
「ウソ」
「メールします」
「わかった」
湯花邪無は電車で新宿に向かった。
「ジニおはよう」
「おはようございます」
「奥に行って」
「わさびのこと少しは勉強しました」
ジニは湯花邪無と２人で話す時は、インドネシア語を使う。細かいところまで表現ができるからだ。湯花邪無は、インドネシア人であるかのようにインドネシアの言葉を話す。
「インドネシアにはこんなスパイスはないけど」
「インドネシアのスパイスは肉や魚との相性のために発見されたようなものだ」
「わさびは肉には使わない」
「肉の刺身に使うこともあるけど」
「わさびは調味料ではない」
「インドネシアでは使い方が難しい」
「日本の人は刺身をたくさん食べるしお茶漬けもたくさん食べる」
９時には諏訪に着いた。
「お待ちしていました」
山井生江が待っていた。
「わたしが運転します」
アースカーだった。
９時30分だった。

「ここです」

「赤岳山荘の下流です」

ジニはこんな山なのかという顔をしている。

「わたしの研究室です」

「プレハブだった」

「どうぞ」

中は大学の研究室のようだった。

「ここは大学の研究室なのか」

「私が県から借りている」

「ここは」

「私の個人の建物だ」

「アルバイトをしている」

「借金がある」

「何をしたいのだ」

「おいしいわさびをつくりたい」

「畑があるのか」

「案内する」

少し離れたところに小さな流れが段になっていた。

「次郎〜いるの？」

「いる」

「弟です」

「17歳ですけどここでアルバイトしています」

「どういうことだ」

「わさびを売ってるから」

「２人でそっとやってるからこれ以上はできない」

「わたしも大学だし次郎も高校だし」

「見せてくれないか」

さして大きくない段なのだが、手入れが行き届いている。真夏なのに水が冷たい。

「この畑は？」

「からし菜」

「からしもやってるのか」
「売ってはいないけど研究してる」
「唐辛子も栽培している」
「わさびはどこで商品にしているんだ」
「茅野市内」
「ほそぼそとやってる」
「姉弟でやってるのか」
「練って詰めるだけだ」
「道の駅とかで売っている」
「お父さんとお母さんは？」
「石川県にいる」
「２人で長野にいるのか」
「わたしが長野の大学に入ったから」
「弟も同じ大学に入ることになっている」
「おいしいわさびをどう判断しているんだ」
「切って香りを嗅ぐとわかる」
「私は、０・１ミリくらいに薄くスライスして使うと、もっといろんな料理に使えるのではないかと思っている」
「スライスしてカタチはそのままで真空パックして新鮮を確保する」
「いいかもしれない」
「最新のカッターにすれば難しいことではない」
弟が口を挟んだ。
「そんな機械があるのですか？」
「諏訪には精密機械は何でもある」
山井生江と次郎姉弟は、諏訪まで送ってくれた。
「これは私のポケットマネーだ」
「今日のお礼です」
「自由に使ってください」
１００万円の封筒を持ってきた。多分、こうだろうと思っていた。借金の１部にはなると思った。
「来週の日曜日にもう１度来てくれませんか」

「わさびのスライスを試しておくから」
「わかった」
「さっき採れたばかりのわさびだけど、食べてみてくれませんか」
「ありがとう」
ジニはずっと目を輝かせていた。
「包丁でスライスはできないかもしれないがやってみる」
「ホントに生だからおすしも違う味がするかもしれない」
「お刺身もいいかもしれない」
ジニは、興味を示した。
「こんにちわ〜」
「おかえりなさい〜」
どうしてみんながおかえりになるのかわからない。
「どうでした？」
「次郎という弟もいて熱心だった」
「どういうふうにスパイス湯花の仲間にするのですか？」
「湯花わさびの森」
「ｙｕｈａｎａの森のようにですか？」
「それとわさび工房」
ジニはわさびを持って厨房に向かった。スライスしてみるのだろう。
「畑は県から借りることができるんだろうけど、わさび工房もわさびの森の研究室も建物をつくらないといけない」
「３０００万円くらいかかると思うけど準備して欲しい」
「私がスパイス湯花に３０００万円増資する」
「わかりました」
湯花邪無は、わさびを１本もらって北千住に急いだ。
「今日は刺身を私が買って帰ります」
沢風ゆりの返事はすぐにない。スポーツジムのインストラクターなのだ。
日本の包丁よりも、湯花邪無が使っているジャカルタナイフの方が、薄くスライスできるような気がしている。早くやってみたいのだ。
近くのスーパーマーケットで、ブリと鯛とイカの刺身を買った。ゆりのために刺身の盛り合わせを買った。

チンするごはんも１つ買った。
早くやってみたいのだ。
ごはんを温めて、ジャカルタナイフでわさびを切ってみた。
切り口の中間からカットすると薄くカットできる。キレイな輪にすることもない。
わさびの皮はカットしないと食べにくい。
驚いたことに、薄く半月状にカットしたわさびは、香りはよいのだが辛くなかった。
それをナイフで細かく砕くようにカットすると香りも辛さも絶妙なのだ。
しかし、商品イメージのためには、わさびの原形を崩さないほうが好ましい。カットする時に、カタチを壊さずにグチャグチャにカットできるといいのではないかと思った。
そして、１センチで１回分として、真空パックで６つくらいに分けておいて、１回使用毎に鋏でカットして使うことが好ましい。なによりも、新鮮が命である。
ナイフでグチャグチャにカットしたわさびで鯛の刺身を食べてみた。絶妙だと思った。すごくおいしい。ごはんもおいしい。
このことを、ワード１枚にして山井生江とジニにメールした。

わさびのたたき

わさびのたたきとアジのたたき

７月28日月曜日である。
「どうぞ」
シャワーから出てきた湯花邪無にお茶漬けを用意した。
「昨日のわさびの余りを使った」
「ナイフでグチャグチャにしたらいい感じになった」
「お塩とゴマを加えた」
「いただきます」
湯花邪無はいい香りだと思った。食べたことがないわさび茶漬けだった。
「アイデアをいただいてありがとう」
「次郎はさっそくスライスの機械の会社に出かけています」
湯花邪無はジャカルタに着いていた。
カサブランカで日曜にあったアフリカアースライディング３０００万灯の記念式典のニュースが流れていた、ジャカルタのライブテレビだ。
華美美鈴が主役のようである。羽田で脱兎のごとく走り抜けた華美美鈴とは別人のようである。湯花邪無が仙川空港で会った男が先里風香であれば、かなりのお年である。華美美鈴がいなかったら困る。先里風香には代理が必要である。
アフリカでは、このように歓迎される華美美鈴である。日本での対応には、あり得ない驚きを感じただろうと思った。日本の戦車の会社なのだろうが、先里風香に、アースバッテリーのパワーアップの協力をさせるために、華美美鈴を誘拐しようとしたのだ。証拠はないが。
「おはよう」
「おはようございます」
ジンの部屋に急いだ。
「今日の料理は？」
「何も聞いていない」

「八ヶ岳に行ったのですか？」
「湯花わさびの森をつくります」
「わさび工房もつくります」
「３０００万円スパイス湯花が投資します」
「私がスパイス湯花に３０００万円出資します」
「グッド」
「そうですか？」
「あなたは日本人だからわさびに強い人にもなった方がいいと思う」
「やっぱり人だから間違わないで」
「そういう意味で山井生江を連れてきたんだけど」
「信用できると思う」
「先里風香の言うよろいの少ない人だと思う」
湯花邪無は、ジンの口から先里風香の話が出たことに驚いた。ＰＣかスマホで、先里風香の『よろいってなんだ』を読んでいたのを見たのだろう。
それにしても、山井生江をよろいの少ない人と読んだことにも驚いた。
「料理教室に行ってきます」
「いってらっしゃい」
どうして声が揃うのかわからない。
「みなさん座ってください」
「今日はナシゴレンをつくります」
「鶏肉とタマネギとニンジンとほうれん草と卵を買ってきてください」
「みんなで協力して買ってきてもいいです」
「卵は１つしか使いませんから」
湯花邪無は、目玉焼きをつくったこともない。
「ミスターユハナ、目玉焼きは最後でいいです」
「わたしの教える順番にやってください」
ミナは、いきなり目玉焼きからやってしまう湯花邪無がわからない。
「目玉焼きをやったことがないのですか？」
「次までに卵焼きを練習してきてください」
「みなさん、鶏肉を細かく切ります」
「わたしの教えるとおりにやってください」

ミナの教えるとおりにやっているのだからおいしいに決まっている。
「ミスターユハナ、目玉焼きはわかりましたか？」
「ええ」
「ナシゴレンもグッドでしたか？」
「おいしかった」
「今日はこれで終わりにします」
「ミスターユハナだけ残ってください」
「私はこれから東京に行かないといけない」
「東京に奥さんがいるのですか？」
「いませんが約束をしている」
「近いうちに時間を空けてください」
「19時から２時間です」
「せっかくわたしがおいしいところを紹介しようと思っているのに」
「おいしい料理を食べれば料理は上手になります」
湯花邪無は、ジンのおいしい料理をいつも食べているのだが、おいしく料理ができるとは思えない。
「わたしの名刺を渡しておきます」
「ミスターユハナの名刺をください」
「持っていません」
「とにかく連絡をください」
「それではみなさん水曜日に」
湯花邪無は、ミナの意図は承知しているのだが、ジンと沢風ゆりでいっぱいいっぱいである。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
ジンの部屋に行ったがジンはいなかった。
リニがコーヒーを持ってきた。
「ジンはエミルのところへ行きました」
「何かあるのですか？」
「生産を増やす話だと思います」
「リニ少し時間がありますか？」

「なんでしょうか」
「卵焼きは10分でできますか？」
「料理教室の宿題ですか？」
「そうだ」
「10分でやらないと今日の給食の担当がやってきます」
湯花邪無は、コンビニに走った。
「今日の給食の担当にニラを少しいただきました」
「卵焼きだけど」
「ニラ玉がおいしいから」
湯花邪無は、目玉焼きより卵焼きの方が簡単だと思った。
「こんなにおいしいとは思わなかった」
湯花邪無は、羽田までの飛行機の中でアースバッテリーのニュースを見なかった。
興味がなくなったわけではないが、緊急事態はないと思っている。着実に、アースバッテリーは普及する。
「こんにちわ〜」
「おかえりなさい〜」
牧野由香が冷たいハーブ茶を持ってきた。
「水野さんは今日はお休みです」
「何かありますか？」
「順調です」
「ジニはいますか？」
「呼びます」
すぐにジニがやってきた。
「その後何かやってみましたか？」
「ミスタージャムはお昼はどうしたのですか？」
「まだです」
「いまみんなリビングにいます」
「13時30分になったらわたしがミスタージャムのお昼をつくりますから見てください」
「新しい発見があったのですか？」

「説明できない」

「わかりました」

「わたしは買い物に行きます」

「これを持っていって」

「１万円じゃなくて千円はないか」

湯花邪無は、財布から千円を出した。

日本のお金の価値は、ここ１００年変化していない。アメリカも日本と同じである。中国の元が２倍の価値になっている。

日本の消費税は28％になっている。プライマリーバランスはとれているのだが、累積した借金は１８００兆円になっている。国債の暴落をなんとか食い止めてきていることが驚異でもある。

今後の１００年で、日本の人口は４０００万人になるという報告もある。

４０００万人になっての１兆８０００億円の借金は、もう、国債の利払いのために日本の人は働いているかのようになる。

年金も減額減額になっている。

13時30分にジニから呼び出しがかかった。

「アジを３枚におろせないか」

「そんなことはできない」

ジニはインドネシア人なのに、キレイにアジを３枚におろした。

まないたで包丁で叩いた。

「どこで覚えたのだ」

「わたしは日本料理がやりたい」

ジニはわさびを取り出して、薄くカットしてナイフで叩いた。

「少し山椒を入れる、醤油と」

「ごはんはお昼の給食の余りだけど」

「味噌汁も余り」

「わたしも一緒に食べる」

「丼にする」

湯花邪無は、最高においしいと思った。

「わさびを真空パックで保存してある」

「それで香りがいいのか」

「そうだ」

湯花邪無は、アッという間にわさびのたたきとアジのたたきを食べた。

写真を、山井生江に送った。

「わさびのたたきとアジのたたきです」

「最高においしい」

「少し山椒が入っている」

５分もしないうちに山井生江から返事が来た。

「グッドアイデアだ」

「ありがとう」

「１００万円も封筒に入っていた」

「プレハブを修理するのか」

「私は３０００万円スパイス湯花に増資する」

「スパイス湯花は３０００万円でわさびの森とわさび工房を充実する」

「山井生江と次郎は、学生のまま、スパイス湯花のグループの１員になって欲しい」

「わさびの森とわさび工房は山井生江に任せる」

「社員を採用したりしてほしい」

「わさびの料理はジニが担当する」

「１００万円は、私のポケットマネーだから山井生江と次郎の個人的なことに使って欲しい」

「よくわかった」

「ありがとう」

18時だった。

「今日は私がアジを買って帰る」

沢風ゆりにメールした。

「買い物に来ているからアジを買う」

「どういうアジだ」

「２匹」

「生か」

「そうだ」

「３枚におろしておいて欲しい」

「早く帰って自分でやって」

湯花邪無は、慌ててアースカーに向かった。

「おさきに〜」

「おつかれさまです」

お店はまだやっている。

「頭落として」

「はらわた出して」

「そう」

「背の方にナイフ入れる」

「そう

「背骨にそって切り取る」

「思い切ってバシって」

「そう」

「裏返して」

「背骨の上にナイフを入れて」

「思い切ってバシって」

「そう」

「それで３枚になった」

「皮はどうするんだ」

「剥ぐ」

「端を持って」

「引っ張る」

「誰かの見てたの？」

「スパイス湯花の社員」

「上手になってる」

「切って叩く」

「わさびは？」

沢風ゆりは冷蔵庫からわさびを取り出した。

「どうするの？」

「ナイフでカットして叩く」

「わたし味噌汁つくる」

「ごはんは？」
「できてる」
「わけぎ買ってきたからカットして乗せて」
「５ミリくらいに切る」
「あなたの料理ってなんかおかしい」
「なんですか？」
「現地人の料理」
「どうしてですか？」
「そのナイフのせいかもしれない」
「食べましょう」
沢風ゆりは、一口食べて、いかにもおいしいという顔をした。
「最高」

わさびと鶏と米のスープ

「今日はジャカルタだから」
「わかってる」
「華美美鈴さんから連絡はありませんか？」
「もう連絡はないと思う」
「おかしな事件だった」
「ゆりはどうしてアジを３枚におろせるんだ？」
「見真似」
「誰もできないけど」
「アジのたたきはみんなパックで買うけど」
「昨日のわさびのたたきとアジのたたきのようなおいしさはどこにもない」
「そうだな」
羽田までのアースカーでライブテレビを見た。日本のジェット機の会社がアースジェットを開発すると発表していた。なんといっても、飛行機の時代である。アースジェットを開発したい。
戦車の会社もアース戦車を開発したがっている。華美美鈴にとって日本は危

険である。
旅客機のことではない。戦闘機のことだ。日本の戦闘機は、世界シェアーの30%を占めるほどになった。
１７０年も前に世界戦争で負けて武器はつくらないし販売しないことになっていた。どこでどうなったのか、２１１４年には、優秀な技術を生かして、武器生産が盛んである。
先里風香によると、武器は物資だから価値を生まない。経済的価値はゼロだと言う。ゴミの袋と同じだと言うのだ。
みんなよくわからない。湯花邪無もよくわからない。凄い技術である。
市場経済社会だからだと言っているようだ。市場経済社会は、生活者と商品が主役だそうだ。
生活者に買ってもらえない武器は、商品としての価値がゼロだと言っている。
しかし、日本のジェット機の会社がアースジェットを開発すれば、その会社は、戦闘機を、どこかの国に販売できる。
アースジェットは需要があるが、フツウの戦闘機は戦争がなかったら価値はゼロである。
そのことを言っているのかもしれない。湯花邪無は、国の売買がよくわからない。アースジェットができれば、どこかの国は、国家予算で戦闘機を買うのだ。
日本のように、国家予算を減らせなくてここまできていると、勘違いしてしまう。
借金しても豊かな暮らしをした方が得だという勘違いだ。
これは、日本の１人１人が勤勉で貯蓄家が多かったから成り立った。
もう日本の個人もお金持ちではなくなってきている。
もう日本の人たちは、国家の借金を支えられない。このままではすごくまずいことになる。消費税を40%にしないといけないだろうが、それでも国債の利払いに消えてしまうかもしれない。
一旦豊かになった会社や国家などの集団の滅んでゆくシナリオの通りに進行している。湯花邪無ではない。先里風香が言っている。
何かおかしな方向に進んでいるのだ。借金で首が回らないから需要の大きい

アースジェットを開発するという論理だ。
戦争をはじめるというのだろうか。
先里風香の、武器は価値がゼロだという考えが、湯花邪無には、わからないでもない。
湯花邪無は生活者にとっての価値が高い商品しか取り扱うつもりはない。
戦争しないと国家が潤わないアースジェットやアース戦車の開発は、湯花邪無には、どうも納得がいかない。
「おはよう」
「おはようございます」
ジンが待っていた。
「今日の予定は？」
「ｙｕｈａｎａの森」
「エミルのとこは？」
「寄ります」
「ちょっと待って」
「リニおはよう」
「コーヒーにしましたけど」
「ありがとう」
「変わったことはありませんか？」
「順調だと思います」
ジンがクール宅急便を持ってきた。
「ミスヤマイからわさびを送ってもらった」
「エミルが待ってるから」
「わさびですか？」
「考えてみるって言ってる」
「わかった」
油とスパイスと火使いのインドネシアの料理にわさびはマッチしないのではないかと思った。
わさびのような微妙な味に合わせることができない気がしている。
それでもエミルが興味あるのだったらと思った。
「エミルおはよう」

「おはようございます」
「ジンから頼まれました」
「わさびね」
「ええ」
「アイデアがあるから」
「ｙｕｈａｎａの森に行くけど」
「少しステファノに持って行って」
「ｙｕｈａｎａの森では育たないだろうけど」
「帰りに寄るでしょ？」
「ええ」
「お昼はどこ？」
「ｙｕｈａｎａの森」
「わかった」
「いってらっしゃい」
「エミルが何をしたいのかわからない」
「ガダラおはよう」
「ステファノおはよう」
「見せてください」
湯花邪無は、冷たいわさびを取り出した。
ステファノはナイフでカットして匂いを嗅いだ。
「新鮮な匂いだ」
食べてみた。
「辛くはないけど」
「細胞を壊さないと辛味ができない」
ステファノはナイフで叩いて食べてみた。
「辛い」
「インドネシアのスパイスとは違うがスパイスだ」
「水がないと育たない」
「ｙｕｈａｎａの森には川があるが、温かい水だから育つかどうかわからない」
「植えてみよう」

「一緒に行く」

「ミスタージャムお昼はここでいいのか」

「お願いします」

「わかった」

ステファノはアースカーでｙｕｈａｎａの森の北の方に向かった。

「この流れではどうか」

「インドネシアで育たないかもしれない」

「温かいからだ」

「それでもかまわない」

小川から少し外れた場所に床をつくった。

育つとは思えないが植えてみた。

ｙｕｈａｎａの森はホッとする。同じジャカルタなのだが、まるで違う。

「ガダラのお昼を余り食べないで帰ってくれ」

エミルから、湯花邪無とガダラにメールが来ていた。

エミルは、なにかをやっているのだ。わさびのことだ。

「エミルただいま」

「ちょっと来て」

「ごはんは終わったのですか？」

「みんな終わった〜わたしだけ」

「調理から見ないとわからないから」

キッチンはもうキレイになっていた。ここで72人のお昼をつくっている。

「鶏を油で焼く」

「３種類のスパイスと醤油を少し」

「水を加えて野菜を少し」

「お塩がポイント」

「炊いておいたごはん」

「ここでわさびを叩いて」

「出来上がり」

「５分でできる」

「半分づつ」

「エミルは食べてみたの？」

「はじめて」
「だからわかんない」
湯花邪無は、おいしくないわけがないと思っていた。レシピを見たらわかる。
「これはおいしいな〜日本の人にもピッタリだ」
「ジャカルタのオンナにもピッタリ」
湯花邪無は、写真とコメントを、山井生江とジニとジンに送った。
「わさびと鶏と米のスープおいしかったの？」
「おいしい」
「あれスパイスじゃないけど売ったらいけないかな〜」
こういうところはジンの方が経営者ぽい。湯花邪無は33歳だが大学の教授っぽい。
「工場で外注するとロクなことにならない」
「わたしが工房探すから」
「探してもいいか」
「通信販売しかしない」
「スパイス湯花で売るだけだ」
「いい？」
「いい工房があれば」
「品切れになるだろうけど増産しない」
「食べてもいないのにどうして品切れになるってわかるんだ」
「エミルが素晴らしい」
「私じゃないのか」
「ミスタージャムも素晴らしい」
ジンはさっさとベッドルームに向かった。

わさびのたたきとカツオの刺身

「ミスタージャム起きて」
「どうしたんだ」

「急に用事ができた」
「なんだ」
「あなたが気にすることじゃない」
まだ６時だった。
湯花邪無は、ジンの私的なことを何も知らない。
両親のことも知らない。湯花邪無に紹介しようともしない。湯花邪無は東京に家族がいると思ってるかもしれない。
常に湯花邪無のそばにいるのだが、両親や家族が病気にだってなると思う。ジンは何も言わない。
「バナナとりんごを食べて行って」
「わかった」
「リニには後で連絡するから」
「わかった」
湯花邪無は、しばらくベッドにいたが眠れるわけはなく、起き上がってシャワーに向かった。
アースカーをゆっくり走らせたのだが、スパイスｙｕｈａｎａに８時に着いた。
「ミスタージャムおはようございます」
「リニはいつも早く来るのか」
「ジンが急用だったから早く来た」
「今日はジンはお休みです」
「わかった」
スパイスｙｕｈａｎａには、就業規則のようなものがない。もちろんタイムカードもない。週休３日なので勤務する日がシフトで決まっている。
78名全員のシフトがネット経由で公開されている。すべてのＰＣは個人の顔認証がキーになっている。いままで破られたことはない。休みの時は、ＰＣを自宅に持ち帰ることが多い。
湯花邪無もＰＣを持ち歩いている。湯花邪無は、スパイス湯花もスパイス工房もスパイスの森も見なければならない。連絡事項もすべてネット経由のＰＣからになっている。
スパイスｙｕｈａｎａには総務部長や人事部長がいない。就業規則がないか

ら用事も少ない。すべてジンがやっている。会計には責任者がいる。
みんな他者に迷惑がかかるからキチンとジンのように連絡をする。
朝も遅刻などしない。みんなに迷惑がかかるからだ。
湯花邪無がジンに言っていることは、みんなのお母さんになってくれである。
このような湯花邪無のやり方は、まだ特殊だとジンは言う。
「ミスタージャムにはみんなを管理する考えがない」
「会社は働かせてお給料を払っているのがフツウだ」
「このことは世界でも変わらない」
「ミスタージャムは特殊だ」
湯花邪無は、仕事は人がしているから、人を読むことがすべてだと思っている。リニを採用する時も慎重だった。
採用したら、ジンがお母さんだから、リニの絶対的な味方になる。もちろん、湯花邪無もリニの絶対的な味方になる。
山井生江も慎重だった。みんなに会わせて意見を聞いた。
「世の中にワルイ人間などいない」
「人間がワルクなるのはよろいを着てしまうからだ」
「よろいが少ない人を選べ」
湯花邪無がいつも言っていることだが、先里風香の言葉である。
ジンにはよろいがない。
リニにもよろいがない。
ジャカルタの人は、一般的によろいが少ない。湯花邪無がだまされたことがない。
「出かけます」
「いってらっしゃい」
お客さんもいるから、料理学校に行くとは言えないが、みんなよくわかっている。湯花邪無のスケジュールも公開されている。誰でもが知っている。料理学校と書いてある。
「ミスターユハナだけ卵焼きをやります」
「卵焼きをやったことがない生徒ははじめてです」
「宿題をやってきましたか？」

「おいしい卵焼きをつくるからみんなで食べてくれ」
「５分でやってください」
湯花邪無はスーパーマーケットで卵とニラを買っておいた。
リニに教わったように、３種類のスパイスとダシの素と醤油と塩と砂糖を加えて、一気に大きなフライパンで焼いた。
火が強すぎると真っ黒になる。
「ミナどうだろうか」
「グッドだ」
「奥さんがいるのか」
「いない」
「誰に教わったのだ」
「ネットだ」
料理学校の仲間も、おいしいと言った。
「今日はミーアヤムをやります」
「鶏肉と野菜と乾燥ラーメンを買ってきてください」
湯花邪無は、みんなと慣れてきている。同じ仲間になっている。鶏肉もみんなで買って分けるようになっている。それぞれの事情で料理を習っている。湯花邪無のようにお金に余裕があるわけではない。湯花邪無は承知している。
「みんなで買い物してる？」
「グッドアイデアね」
レストランの厨房にいる若者が買い物も自分でして、８人で分けて、みんなからお金を集める。湯花邪無は失業者になっているので、静かにしている。
レシピはソトアヤムのようだったが、中華ダシを使った。
「ミスターユハナのミーアヤムを入れてください」
また宿題を出される気がした。
「まあまあね」
「ミスターユハナは今日も東京へ行くのか」
「急いでいる」
「恋人がいるのか」
「いない」

「失業中なのに旅費はどうしているのだ」
「レストランでごはんを食べるより安い」
「わたしとの約束を果たすように」
夜１日空けることだ。みんなの前でこのように言われると、約束しないわけにはいかなくなる。約束したわけではないのだが、約束になったかの雰囲気になってしまう。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
スパイスｙｕｈａｎａはお客さんで混みあっていた。
「今日の料理はなんだ」
「ミーアヤム」
「うまくいったのか」
「食べさせたかった」
「残念」
ジンは何かの書類を読んでいた。
ミーアヤムがつくれるといって喜んでいる人と付き合ってはいられない。
「なにかありますか？」
「順調だ」
「新宿に行くんだ」
「12時の飛行機だ」
「お昼はどうするんだ」
「さっきミーアヤムを食べた」
最近は、アース戦車の話題は消えてしまった。ライブテレビでの話題は、火星の研究室である。まだ人は住んではいない。研究室に１ヶ月居住する程度である。火星の探査が主たる任務である。火星からのライブ映像が流れている。８０００メートルの谷の地層を調べている。注目されている生物はまだ発見されていない。
誰もが興味津々である。
先里風香によると、人間の優秀な頭脳のコンセプトは、わからないことを明らかにすることであり、善悪ではなくて、わからないことを追ってしまう習性は、人類終焉まで続く。

だから、火星のライブ映像は、みんなが見入ってしまう。
地球の人間が１００億を越えて、ますます火星への移住計画が企画されているのだが、次の１００年で、人口は70億人に逆戻りする予測がされいて、火星への移住計画への説得力が薄れてきている。
しかし、旅行社は何社もできていて、火星研究室の研究結果待ちになっている。
まだ、放射線を防ぐことができたのかどうか、定かではない。火星研究室の研究者は、率先して人体実験に取り組んでいるとも言える。
一方で、火星の生き物がまだ発見されていないのだが、人間が、またしても、惑星の生き物を滅ぼすことに手を貸してしまうのではないかという議論も盛んで、決着などつけられない。
地球の生き物は、この１００年で、種を大きく減らした。
このままでは、動物園か植物園以外では、昆虫以外の生き物を見ることは難しくなるのではないかと言われている。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
湯花邪無は、水野まさみの部屋に向かった。今日は、スパイス教室をやっているはずである。
「スパイス教室をはじめています」
水野まさみのメモが置いてあった。
白身魚と夏野菜のスパイス炒めと書いてあった。
日本の女性は、アジアンテイストが好きである。そもそもが、野菜料理が多いこともある。しかし、スパイスは、肉や魚を多用することから発展している。野菜料理が多いとはいえ、鶏肉野菜炒めのようになっている。
「どうぞ」
ジニが湯花邪無を後の席に案内した。
白身の魚の素焼きをやっていた。
これから、野菜とスパイスで炒めるのだろう。
湯花邪無は、料理現場に慣れてきたと感じるようになった。違和感がなくなった。
「今日はカツオです」

沢風ゆりはキッチンテーブルに座って待っていた。
わさびのたたきとカツオの刺身である。
「もうわさびない」
「お店で買ってくれ」
「売ってない」
わさびをそのまま売っても、どうしたらいいのか誰もわからない。
「いただきます」
「いただきます」
「香りがいいけど」
「真空パックしておいた」
わさびのたたきは、スパイシーである。もしかしたらステーキにも合うかもしれないと思ってしまう。
「明日わたし休みだから長野に行ってくる」
「一緒に行けなくてゴメン」
「平気〜慣れてるから」
「冷蔵庫のお金使ってくれ」
「いただいていく」
「高原でのんびりしたい」
「ああ」
「高原のホテルのベッドだと思って」

アースバッテリーで動く機械

７月31日だった。木曜日である。
沢風ゆりは、すでに新宿に向かっていた。
「カギ忘れないで」
「わかった」
「昨日もグッドだった」
「私もだ」
湯花邪無は、ジャカルタに向かった。８時の便だ。

「わたしは、明日ジャカルタに行く」
「アースライティングのことで大統領と相談する予定である」
ジャカルタでのアースカーの中でジャカルタのライブテレビを見ていて驚いた。
華美美鈴がやってくるというか、もうジャカルタに来ているのかもしれない。
上海でも２人組に捕まったのだ。ジャカルタだからといって安心はできない。
インドネシア政府は、ボディーガードを用意するに決まっている。かえってオープンにした方が安心なのかもしれない。
インドネシアは、原発の廃棄法案を国会に提出する直前である。アース冷蔵庫も普及している。家庭用は問題はないのだが、工場の電気がアースバッテリーでは不足するという理由で、産業界は、原発の廃止法案に賛成していない。
確かに、工場は大きな機械を使っている。戦車のような機械だ。アースバッテリーでは動かない。
華美美鈴は、何らかのアイデアを持って現れるかどうかである。
急に注目されている。
もしかしてアースバッテリーのパワーアップを提案するかもしれない。そしたら、またアース戦車問題が浮上する。アースジェットの研究もなされている。
「おはよう」
「おはようございます」
湯花邪無は、ジンの部屋に向かった。
「ジンはいますか？」
リニがジンに電話をした。
「おはようございます」
「急用ですか？」
「スパイス工房の電気だけど」
「アースバッテリーに替えようと思うんだけど」
「急にどうしたんですか？」

「みんなが少しであっても協力しないといけない」
「原発のことですか？」
「大きな電気を使うことは良くない」
「エミルに聞かないとわかりません」
「ジンの意見を聞きたい」
「今でも高い電気代を払っている」
「投資のお金はかかるが、電気代がゼロになるのは賛成だ」
「エミルと相談してきていいか」
「スパイスｙｕｈａｎａはミスタージャムの会社だ」
「ありがとう」
湯花邪無は、仕事がうまくいっていることもあって、安穏としていると思った。華美美鈴は、危険を承知でジャカルタにやってくるのだ。
湯花邪無も、小さいが産業界の１員である。
「ミスタージャム待っていた」
エミルは、スパイス工房の機械の図面を並べていた。そして工房の電灯である。
「わたしのお父さんの時代から動いている工房だからみんなフツウの電源で動いている」
「もうすぐ機械の会社の人が来るから、私も聞いてみたい」
「エミルの考えを聞きたい」
「電気代がずっと上がっている」
「このままでは電気代がスパイスのコストを押し上げてしまう」
「これを実行できるのはミスタージャムしかいない」
湯花邪無は、工房内の機械を見て歩いた。粉砕機もあれば乾燥機もある。大きな掃除機も使っている。電灯もある。
５０００万円は下らないだろうと思った。すべて入れ替えになる気がした。
機械の会社が持ってきた案は意外なものだった。
「華美美鈴さんから提案された装置だ」
「アースバッテリーのバッテリー部分だ」
「これを現在の機械に取り付けるとそのまま動く」
「アースカーのようになる」

「パワーが必要な圧延機のような機械は、機械を小型化して、分散して動かすように改造するしかない」
「どうして急にこういう案が出たのか」
「この機械のアースバッテリーは、今朝華美美鈴から提案された」
「特許はオープンされているのでインドネシアの機械の会社は、全員これを製造販売する」
「ここの工房の機械は、すべてアースバッテリーで足りるので、10台発注いただいたら、すべて引き受ける」
「これが見積書だ」
「５０００米ドルでいいのか」
「いずれかは、新しいアースカーを装備した機械を買ってくれ」
「全部で５万ドルでいいのか」
「電灯もアースライティングにしてくれ」
「見積に入っている」
「ここの工房は、これですべてがアースバッテリーになるのか」
「そうだ」
「電気代がタダになるのか」
「そうだ」
「すごいラッキーだ」
「今日の朝急にこうなった」
「華美美鈴なのか」
「機械用アースバッテリーを生産するのに１ヶ月かかる」
「９月１日に３台実施して３日で終えたい」
「湯花邪無さんが１番早いオファーだった」
「今日の朝私たちも聞いて午後に契約をしている」
「インドネシアの政府は問題ないのか」
「華美美鈴さんはインドネシア政府に招かれている」
「湯花邪無さんは、この情報を知っていたのか」
「世界ではじめてインドネシアがやるのに」
「もちろん情報などない」
「エミルは何かありますか」

「驚いて話を聞くだけだ」
「賛成ですか？」
「大賛成だ」
「電気代が毎月高くなるから頭が痛くなる」
「解放されそうだ」

華美美鈴がスパイスを買いに来た

「サインしたのか」
「した」
「スパイスｙｕｈａｎａのライティングもやりたい」
「それはジンが電話すればできる」
「アースライティングをやっている会社だ」
「マンションはできているのに会社ができていない」
「勝手にやっていいか」
「お願いします」
リニがやってきた。
「華美美鈴さんがスパイスを買いに来てる」
ジンは、すぐに立ち上がってお店に向かった。
湯花邪無は、そっと立ち上がって、ジンの後からお店に向かった。
英語で話していた。
「わたしはスパイスｙｕｈａｎａのファンだ」
「日本に行った時に買おうと思っていたが行けなくなったのでジャカルタで買う」
「わざわざありがとうございます」
「奥へどうですか？社長もいます」
「忙しいので今度にします」
一瞬、後にいた湯花邪無を見た。
「ありがとう」と日本語でつぶやいたように見えた。
華美美鈴が、湯花邪無にお礼を言いたいのに近寄ってはいけない微妙さを、

ギリギリ表現していると思った。
「華美美鈴さんがファンだっていうのはじめて知った」
「そうですね」
「でも宣伝には使わない」
「そうしてください」
「わたしそろそろ」
「今日もらったアースバッテリーを読んで帰ります」
「19時には帰って」
「わかった」
華美美鈴は自分の考えを１度も言ったことがない。先里風香も自分の考えを言った事がない。記者会見で質問があっても何も言わない。
「華美美鈴さんは原発には反対なのですか？」
「ノーコメントです」
それでいながら、インドネシアの３つの原発の廃棄法案提出の前には、その支援策のようなものを持って、危険を覚悟して、ジャカルタにやってくる。
「イカンバカールだから」
イカンバカールがなんであるのかよくわからない。
「焼き魚ですか？」
「そうだ」
「着替えしてくる」
「シャワーは？」
「後で」
湯花邪無は、着替えをする少しの時間でも、華美美鈴のことを考えてしまう。なにか援助できることはないか考えてしまう。

ソトアヤムわさび仕立て

「どうぞ」
「いただきます」
「鶏かゆ」

ジンは、料理の名前など言ったことがなかった。言ったところで、覚えるはずもないと承知していた。
湯花邪無は、混ぜながら、どうやってつくったのだろうと考えてしまうようになった自分を不思議に思う。
「わたし今日プノンペンに行く」
「はじめるのですか？」
「お客さんには送料負担してもらってるけど街を見てくる」
「ああ」
「いずれやることになる」
「ああ」
「ミスタージャムは料理学校か」
「そうだ」
「わたしまだ料理つくってもらってないけど」
「まだまだ遠い」
ジンは、湯花邪無よりも早くタベットのマンションを出た。ジンと湯花邪無のことは、スパイスｙｕｈａｎａの社員も誰も知らない。一緒にスパイスｙｕｈａｎａに出勤することなどない。
多分、ジンは、リニに状況を聞いて、そのままジャカルタ空港に向かっただろう。
「おはよう」
「おはようございます」
お店はオープン前でバタバタしている。
ラナンが冷たいハーブ茶を持ってきた。
「ジンはプノンペンに行きました」
「リニはスパイス工房です」
「なにかあるのですか？」
「リーマイから呼び出されています」
「中国スパイスのことかな」
「わかりません」
「誰にお茶を煎れるように言われたのですか？」
「ジンです」

「ミスタージャムとカラオケに行く約束してた」
「８月19日でいいか」
「何曜日ですか？」
「火曜日だ」
「わかった」
「ゼッタイですけど」
「忘れない」
「メールもします」
「わかった」
「料理学校ですか？」
「そうだ」
ラナンは、アースカーまで湯花邪無を送ってきた。
「ミスターユハナはよく続いています」
「主夫はできるようになったのですか？」
「まだだ」
「今日はビーフジャワカレーです」
「レシピを配ります」
「買い物に行ってください」
８人でスーパーマーケットに出かけた。
レストランの厨房にいる若者がリーダーである。
「オレだけ買い物してても料理学校にならないから今日は誰かやってくれ」
主婦の１人が手を挙げて肉売場に向かった。
「わたしは主婦でも料理したことがない」
「料理は誰がしているのだ」
「メイド」
「あなたはなにをしているのだ」
「夜の夫のお相手」
「料理学校に来る必要もないけど」
「ほうり出されると困る」
「結婚してないのか」
「結婚してるがわたしに技がないと飽きられる」

35歳くらいの美人主婦である。
「この牛肉にしてくれ」
「レストランに勤めているオトコが言った」
「安い肉でいい」
美人主婦はみんなの顔を見て店員に告げた。
美人主婦は、買い物を８人で分けることにも時間がかかる。そしてみんなからお金を集めるのにも時間がかかる。
「はじめていいですか？」
「買い物に時間がかかり過ぎです」
「わたしの社会勉強もしているから」
美人主婦はおもしろいことを言った。
「調理手順を配ります」
湯花邪無は遅くなった。遅くはなったが用事があるわけではない。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
ラナンが冷たいハーブティーを煎れてきた。
「ジンもリニもいなかったらラナンが私のお茶を煎れるのか」
「ジンに言われてる」
「今日の料理はなんですか？」
「ビーフジャワカレー」
「おいしかったですか？」
「まあまあかな」
「スパイスの使い方わかってきました？」
「少しは」
「ミスタージャムは日本人なのにボスっぽくないけどなぜだ」
「難しい質問をするんだな」
「ジンもリニもいない時じゃないと聞けない」
「ジンがボスのようだ」
「ジンがボスというよりお母さんだ」
「お母さんは子どもの絶対的な味方だから」
「ミスタージャムはわたしの絶対的な味方じゃないのか」

「ジンがラナンの絶対的な味方だったら私もラナンの絶対的な味方だ」
「ボスはオンナが向いてるのか」
「私の考えだ」
「ミスタージャムはなんなんだ」
「責任者で支援者だ」
「よくわからない」
「私は命令しない」
「日本人はすぐ命令する」
「ミスタージャムは変わってる」
「キライなのか」
「大好き」
先里風香の本を読むと、人間の歴史始まって以来、ずっとオトコ社会だった。人間は集団で生活する。その集団のボスは、常にオトコだった。オトコが支配者だったと言っている。
しかし、２１１４年では、そうとも言えない状態である。
昔は、セクハラやパワハラという言葉が蔓延したらしい。
今では、死語に近い。男性が女性に対して、一方的な性的な嫌がらせを行うことが多かったらしい。もちろん、女性が男性に対して性的嫌がらせをすることもあったのだろう。
セクハラと言ったらしい。
今では、インドネシアの大統領もアメリカの大統領も女性であり、性的な嫌がらせを行う人はいない。そのような風潮はない。ジャカルタではない。
湯花邪無は、日本では、まだセクハラが死語になっているとは思えない。いまだに、日本の総理大臣に女性がいないのだ。
パワハラは、ヒエラルキーから生まれているものらしいので、集団生活をする人間からは、パワハラをなくすことは難しいと思われていた。
おかしなもので、大統領に女性がなってしまうと、自然に解消するかのように、パワハラも消えてきた。
パワハラは男女間のことではなく、権力の上位と思われる人から下位と思われる人への一方的な嫌がらせ無理難題なのだが、上位の人に、多くの女性がついてしまうと、自然に、パワハラハが解消されてきた。

１００年というながい時間がかかったらしい。湯花邪無には、そもそも、セクハラやパワハラなる概念がない。
ラナンが言っていた、日本人なのにボスっぽくないという言い方は、日本では、パワハラがまだ消えないことを意味する。
いまだに、小学生や中学生や高校生の娘を誘拐して、最悪のケースになる場合もある。どこでも、まだあることなのだが、日本では、なかなか消えない。事件として扱われるのだが、これは、権力の上位の人から下位の人への一方的嫌がらせである。
最近の先里風香の『パワハラ』という電子書籍に書いてあった。
「新宿に行きます」
「いってらっしゃい」
今日は、いろいろあって遅くなってしまった。12時の羽田行きに乗れなかった。
13時になった。
なにか、空港がざわついていた。
チケットを買っていると、華美美鈴が現れた。有名人である。どういうわけだか、この時間にジャカルタを出国することを知っているのだろう。
そのまま、出国検査に向かった。深々と一礼した。湯花邪無とかぶってしまった。湯花邪無が２人前だった。
顔パスの審査だ。10秒で終わる。
「落としました」
「どうもありがとう」
湯花邪無は何も落としていないのだが、華美美鈴が何かを手渡した。
メモだと思った。
そのまま胸のポケットにしまった。
華美美鈴はニューヨークのゲートに向かい、湯花邪無は羽田のゲートに向かった。
「工房をアースバッテリーにしてくれてありがとう」
どうして華美美鈴が知っているのかわからない。スパイス工房など、小さな工房である。
「こんにちわ〜」

「おかえりなさい〜」
湯花邪無は、水野まさみの部屋に向かった。
「今日は水野まさみはお休みです」
「そうですね」
「何かありますか？」
牧野由香が冷たいコーヒーを持ってきた。
「多分ジニが用事があると思います」
「変わったことはありませんか？」
「順調です」
「ジニをお願いします」
「厨房に行かれた方がいいかと思います」
湯花邪無は、厨房に向かった。
「おかえりなさい〜」
「電話しようと思ったんです」
ジニが何かをつくっていた。わさびの香りがする。
「お昼食べてきましたか？」
「料理学校で自分のつくったカレーだ」
「ソトアヤムわさび仕立てをつくりました」
「食べますか？」
「食べる」
「座ってください」
ジンのつくるソトアヤムを何度も食べている。
それをわさびでどうするのだろう。
湯花邪無は、驚いた。
「すごくおいしい」
「わたしも驚いたんです」
「ジャカルタのみんなもこれだったらおいしいと思う」
「なるほど」
湯花邪無は、アースバッテリーについて調べた。湯花邪無の仕事は、スパイスの生産販売である。アースバッテリーには関係がない。たまたまだった。華美美鈴が北千住の湯花邪無のマンションに転がり込んだからだ。

それもあるが、華美美鈴が代理人をしているアースバッテリーの開発者の先里風香が香風里先という名前で電子書籍を書いているのだが、たまたま見つけた『ヒット商品』を読んではまった。香風里先は『よろいってなんだ』を含めて、多くのよろいの本を出している。
出版は電子書籍が60％を越えて、誰でもが小説家の時代になった。
小説などの書籍を含めて情報の発信者が多くなったのだ。
昔は、情報の発信者は、権力者だった。権力を得ることは情報の発信者としての権利を得ることでもあった。テレビでも新聞でも雑誌でも、勝手に情報の発信者になってはいけなかった。為政者の許可が必要だった。
今は、そういうものはない。ライブテレビ局を運営するチカラがあれば誰でもがやれる。しかし、ノウハウがないとやれない。しかし、小さな地域だけでライブテレビをやっている会社がすごく多い。インターネット経由のライブテレビである。
日本では、時々、過激な桃色ライブテレビが摘発されたりする。ジャカルタではない。そもそも摘発の前に、視聴者が少なくなって運営ができなくなる。
この１００年で変わったことの１つは、生活者の自覚のようなものが向上したことだと、香風里先が最近のエッセイで言っている。
そもそも１９４５年くらいから、生活者主権になっていた。しかし、数千年の為政者がいる社会から、急にあんたが主役だと言われてもとまどう。１９４５年から１５０年くらいが経過して、やっと、生活者主権というものがあたりまえになってきた。
大統領を自分が選ぶ時に、それは現れる。
大統領制は、終わったら隣のおじさんやおばさんになることで、権力者をながく続けさせない絶好の制度である。
湯花邪無は、ジャカルタと東京に住んでいるのだが、東京は、なかなか変わりにくいと思ってしまう。江戸時代の藩の風習が抜けない。江戸幕府の影の為政者集団の存在もそのまま受け継いでいる。江戸の殿様だけが選挙で選ばれているものの、江戸幕府の権力構造がなかなか壊れない。
最近の香風里先のエッセイの中で、こんなことを言っているのだが共感できる。

しかし、湯花邪無は、あまり深く考えたことがない。ジャカルタでも東京でも、スパイスの仕事をすることに、支障になることは何もない。
アースバッテリーを調べていると、ついつい先里風香を想ってしまう。
だいたい、顔写真が公開されていない。湯花邪無は仙川空港で先里風香に会った。一瞬だった。華美美鈴と湯花邪無を、動く歩道で、追い越して行った。ヨボヨボではないがかくしゃくとしているのだが、老人である。
湯花邪無が、その後姿でも撮影して公開すれば、湯花邪無そのものが、一躍有名人になれるかもしれない。しかし、湯花邪無は、そんなことはしない。
「ただいま」
「おかえりなさい」
「華美美鈴さんがジャカルタに来ました」
「テレビで見ました」
「スパイスｙｕｈａｎａにスパイスを買いに来ました」
「あなたを訪ねて？」
「スパイスｙｕｈａｎａのファンだと言っていた」
「距離をおかないと危険」
「私に迷惑がかからないように気遣っている」
「会ったの？」
「一瞬目が合いましたが誰も気づかなかった」
「ジャカルタ空港を出る時も、たまたま一緒でした」
「顔パスのところでこれを渡された」
湯花邪無は、沢風ゆりにメモを見せた。
「工房をアースバッテリーにしてくれてありがとう」
「これはなに」
「ジャカルタのスパイス工房の機械全部をアースバッテリーに変える約束をしたんです」
「原発３基の廃棄法案の提出前でしょ？」
「工場の機械のアースバッテリー案を持ってきた」
「パワーアップ？」
「そうじゃなくて今の機械に取り付ける」
「デカイ機械は？」

「分散するしかない」
「戦艦から魚雷艇にするの？」
湯花邪無は、沢風ゆりの表現がおもしろいと思った。

わさびスライス機

８月２日だった。土曜日である。
「明日八ヶ岳でしょ？」
「そうだ」
「わたし伊豆のスポーツセンターで仕事だから」
「泊まりだから」
「今晩はどうするの？」
「ジャカルタです」
「明日の八ヶ岳は？」
「６時30分の便で羽田に来ます」
「あなたって羽田に来るって言うのね」
「日本人なのに」
「明日の夜はわたしいないけど」
「食べてきます」
「誰か連れて来ないで」
「料理の上手なオンナ」
湯花邪無は、いつものように９時20分にはスパイスｙｕｈａｎａに着いた。
「おはよう」
「おはようございます」
リニがやってきた。
「ジンはスパイス工房のアースバッテリー工事のことでエミルのとこへ行っています」
「なにかあったのか」
「相談だって言っていました」
「なにかありませんか？」

「順調です」
「今日はここにいます」
「わかりました」
湯花邪無は、ここにいるといっても、スパイスｙｕｈａｎａの仕事を何もやってはいない。売場に立ってもジャマになるだけだ。
９月１日からの大学のスパイス学の講義のスライドをつくることにした。
レッドペッパーが、どのように自生していて、いつごろに、どこの民族が使い始めたのか。それは何のためだったのか、そしてその科学的根拠は何なのか、薬効はどうなのか、それが、どのようにして世界に広まったのか。インドネシアはどのような重要な役割を果たしたのか。現在はどうなのか。
レッドペッパーだけでも、１回の講義になってしまう。
これだって料理が入っていない。スパイス学には、料理が入るべきだと、最近は思っている。しかし、とても９月１日には間に合わない。
最近凝っているわさびを取り上げたいのだが、わさびだけで１回分が必要だろう。
「ただいま」
「おかえり」
ジンが夕方に帰ってきた。
湯花邪無は、直接にジャカルタ空港からお客さんを訪問したりスパイス工房に行ったり料理学校に行ったりはしない。必ずスパイスｙｕｈａｎａに一旦やってくる。ジンも同じようにしている。
「ずっとここなの？」
「大学の講義の構想を練っていました」
「できたんだ」
「いいえ」
「９月１日からでしょ？」
「ええ」
「みんなをガッカリさせないで」
「プレッシャーをかけないで」
「工事はどうですか？」
「講義を聞いてきた」

「講義ってなんですか？」
「なぜアースバッテリーなのか」
「どういう内容でした？」
「なぜかわかんないらしい」
「マジックじゃないんだから」
「ミスタージャムはわかるのか」
「わからない」
「故障したらどうするとか」
「電気代がタダだから自分がよくわかってないといけない」
「いままでのように電力会社に電話するわけではないから」
「理解できたのか」
「わりと簡単」
「肝心なところはわからないけど」
「予定どおり９月１日から３日の間に工事をする」
「９月度から計算上はスパイスの原価が大幅に下がる」
「電気代がゼロだからだ」
「投資の減価償却がかかるけど」
「任せておいて」
「ジャカルタの経済も潤う」
「なんですか？」
「一斉に工場のアースバッテリーを使いはじめるから」
「機械の会社の株が急上昇した」
「華美美鈴がジャカルタに来た時はよくわからなかったのに」
「電力の会社は困るんじゃないですか？」
「ギリギリだったからホッとしてると思う」
湯花邪無は研究者だが、ジンは経営者だと思う。
湯花邪無は遅くなった。
「なにしてたの？」
「レッドペッパーをやっていた」
「今日はイカンゴレンだから」
「何度も食べてるけど名前知らないでしょ？」

「川魚」

「揚げ物なのか」

「そう」

「おかずがいっぱい」

「着替えてきます」

「今日は調子ワルクないよね」

「絶好調です」

８月３日だった。

湯花邪無は、６時30分ジャカルタ発に乗った。

睡眠が不足していた。50分のフライトなのに完全に眠っていた。

「もしもし」

「ジニどうした？」

「わたしも一緒に行かせてください」

「水野まさみさんに言ってあります」

「わかりました」

「どこですか？」

「新宿に着きます」

「電車ですか？」

「ええ」

「10分しかないけど」

「乗っていてください」

「平気ですか？」

「着いたけどこの電車ですか？」

「そうだ」

山井生江と次郎は、新幹線の諏訪駅で待っていた。

「このまま機械の会社に行ってもいいですか？」

「平気です」

まだ９時になったばかりである。

「機械の会社は興味をもってくれました？」

「わさびをたたき状態にしながら輪切りにすることに苦労しました」

「こんな要望出す人はいないだろうからな〜」

「できたのですか？」

「見てください」

信州スライスという会社だった。

「はじめまして湯花邪無と申します」

「社員のジニです」

研究開発課長の天海豊から名刺を渡された。

「この研究はみんな忙しいので私が直接やっています」

「私の一存で試作に取りかかりましたが、試作の１部を負担していただけると助かります」

「いくらですか？」

「30万円」

「承知しました」

「８月末振込みでいいですか？」

「請求書をいただけますか？」

「スパイス湯花の水野ますみ宛てに送っていただけますか？」

「見積書も一緒に」

「もしうまくいったら買っていただけますか？」

「もちろんです」

「これは機械の見積書です」

「どうして見積書ができているのですか？」

「自信があります」

４２２万円の見積書だった。

湯花邪無は、水野まさみにメールをした。

「スライスわさび試作機の費用の半分の30万円を負担することにしました」

「見積書と請求書が水野さん宛てに行きますのでよろしくお願いします」

「試作機に案内します」

天海研究室と書かれた小さな部屋があった。

「生産する方法はまだ考えていません」

「１つのわさびをたたきのようにしながらスライスできるかどうかやっています」

「見ててください」

ほんの小さな機械だった。
「スライスしましたけど表面上はスライスしたかどうかわかりにくいと思います」
「手で触ると切れていることがわかります」
「スライスの断面がジグザグになっています」
「一瞬の動きでやっていますので人には見えないかもしれません」
湯花邪無は、表面上スライスしたことさえわかりにくいわさびに触ってみた。固めてあった砂がバラバラになるように崩れた。
少し口に入れてみた。
「ジニどうぞ」
「香りもいいし辛さもあります」
「魚を用意してあります」
天海豊は、冷蔵庫から刺身を取り出した。
「どうぞ」
スライス前のわさびにもないすごい香りがする。
「いただきます」
わさびのたたきを刺身で食べているかのようになった。
「次郎さんもどうぞ」
「私たちは昨日見学しました」
「おいしいと思いました」
「生井さんはどうですか？」
「わさびの特長を引き出せていると思います」
「どうしてこうなってるのですか？」
「１００回くらい次郎さんと試作をしました」
「高速でカットする６枚の刃がポイントです」
「６枚の刃のカタチもポイントです」
「私はおもしろいけど部下にはやらせられない」
「なぜですか？」
「行き着きそうもないから」
「信じられません」
「スライスハムの技術を使っています」

「これです」
天海豊は、真空パックされたスライスハムを持ってきた。
「ハムでは高速カットできませんが」
「わさびの場合は切り口をグチャグチャにしないといけないので更に難しくなります」
「今後はどうなるのですか？」
「６つに分けて真空パックする方法です」
「このカットの工程の後に入れないといけませんが」
「そんなに難しいことではないと思っています」
「包装などは手作業でいいかと思っています」
「昨日１００本ほどスライスして手作業の真空パックをしてつくってありますのでお持ち帰りください」
「真空パックの機械ができたら連絡を差し上げます」
「すみませんおいしいお昼を食べさせてくれるお店を紹介してください」
「私が用意してあります」
「すみません〜私に譲ってください」
湯花邪無はうれしかった。
こんな難問に挑戦してくれる人に出会ったことがうれしかった。

拉致

ムンバイで拉致される

湯花邪無は、北千住のマンションの近くのすし屋に寄った。仲良くしているわけではないが、沢風ゆりと時々来ている。
「私のわさびはこれを使ってくれませんか」
「なにからいきますか？」
「上でおまかせ」
握りながら２人で相談をしていた。
「おろさないんだ」
「このまま使うんですか？」
「お願いします」
「かげんがわかりませんがハマチからどうぞ」
「同じものを食べてみてください」
湯花邪無は、いままで食べたことのない香りがしていると思った。辛さは、おろしたわさびほど強くはない。
「いい香りがします」
「わさびが違うんですか？」
「おいしいですか？」
「おいしいです」
８月４日月曜だった。
沢風ゆりはいない。
シャワーをしてそのままアースカーに乗った。羽田でサンドイッチを摘もうと思った。
「おはよう」
「おはようございます」
湯花邪無は、ジャカルタのアースカーには、衣装と小さなトランクを積んでいる。アースカーに乗る時に、ワイシャツとネクタイを外して、ジャカルタシャツに着替える。

風通しのよいシャツだ。ネクタイはしない。
「いつも同じシャツを着ないでくれ」
ジンにはよく言われる。
「料理教室ね」
「変わったことはありませんか？」
「順調」
「これを冷蔵庫に入れておいてくれませんか」
「わさび？」
「明日エミルのところへ持っていって意見を聞きたい」
「うまくいったの？」
「私はうまくいったと思ってる」
「わたしも使ってみていいか」
「どうぞ」
湯花邪無は、いつものように料理学校へ向かった。
「今日はカレー春巻きです」
ミナはレシピを配った。
「買い物に行ってください」
今日も８人全員がいる。
「今日はわたしが買い物する」
レストランに勤めている１番若い女性が手を挙げた。
料理でも常に早い。機敏な女性である。
鶏肉を買った。
「これくらいでいいのか？」
「ミンチを買わないといけないのではないか」
「料理学校にあるから自分でやる」
５種類もの野菜を買った。
「手際がいいけど料理が好きなのか」
帰りに、湯花邪無は話しかけてみた。
ラエル19歳と言った。
レストランに勤めていて６ヶ月になると言っていた。下働きしかしていないらしい。

「ミスターユハナはまだ仕事が見つからないのか」
「そうだ」
「お皿を洗うアルバイトだったらあるけど」
「ありがたいけど今のところ平気だ」
ウソをついているつもりはないのだが、余計な気遣いをさせることは良くないと思った。
「今日はみなさん良くできました」
「時間も早くできました」
「ところでミスターユハナはレストランに行く日を連絡してきませんが、忙しいのですか？」
「８月15日はどうだろうか」
「それでは19時に待っています」
「わかりました」
帰り際に、「わたしもいつか空けてくれ」とラエルがそっと言った。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
早く帰ってきたことにジンは驚いた。
「料理失敗したのか」
「うまくいった」
「なんか変わったことはありますか？」
「順調だ」
「私は新宿に行きます」
「12時に乗るのか」
「そうだ」
ジンと話している時に、来るはずのないメールがきた。
「ムンバイ空港日本に連れて行かれそう」
なぜ華美美鈴がインドに行ったのかわからない。どうして誰も守れなかったのかわからない。
湯花邪無は、アースカーでムンバイー東京の時刻表を調べた。
11時37分の羽田行きに違いない。上海から拉致されたのと同じ方法だろう。脅されている。羽田着は13時12分である。

多分スマホは棄てているから連絡はとれない。
湯花邪無は、12時発に乗れた。羽田着は13時だ。どうすればいいのかわからない。
とにかく、湯花邪無のアースカーのキーを華美美鈴に渡すことだ。
あの男達は、まさか華美美鈴が自分でアースカーを運転して逃げているとは思いも及ばないのだ。
出国検査前の売場で時間をつくった。12分後に到着する。
２人のオトコに脇を抱えられてインド風の頭巾をかぶっている女性は、華美美鈴である。湯花邪無は、３人を追い越して、先に顔写真パスに向かった。華美美鈴が気がついていてくれることを願った。４人の後が華美美鈴だった。
ハンドバックしか持っていない。
華美美鈴が出てきた時に、湯花邪無は、アースカーのキーを床に滑らせた。２人の男は華美美鈴に気をとられていて気づかなかった。10メートル前だ。
華美美鈴がヒールを脱いで２人の男を振りほどいて走り始めた。そしてキーを拾った。
そこから先は、１００メートル世界記録が出るのではないかと思わせる走りである。
アッという間に華美美鈴はいなくなった。
下から４人の男が慌ててやってきたが、すでに華美美鈴はいなくなっていた。
湯花邪無は、壁際から一部始終を見ていた。
「ただいま〜」
「おかえりなさい」
「ミスタージャムはアースカーはどうしたのだ」
「たまには電車に乗ってみたい」
お店にいた牧野由香が聞いた。
「水野まさみさんは銀行に行っている」
「お金が足りなくなったのかな〜」
「わさび工房とわさびの森の預金をつくりに行っています」
「なるほど」

「コーヒーですか？」
「冷たいのにしてください」
「承知しました」
湯花邪無は、沢風ゆりにメールしたのだが返事がない。気になっているのだ。
「８月11日は誕生会だけど参加できますか？」
「参加します」
「みんな喜ぶと思います」
「わたしお店にいますから何かあったら呼んでください」
「わかりました」
ジニがやってきた。
「ミスタージャムこれを食べてみてくれ」
「わさびのたたきうどん」
「お腹いっぱいなのか」
「大丈夫だ」
少しの醤油と昆布ダシだと思った。
「スライスわさびを入れます」
わさびの香りが一気に広がってなんともいえないうどんになる。
「これはすごいな」
「ジニはインドネシア人なのによく日本の味がわかるな〜」
「わたしは和食を研究している」
湯花邪無は、沢風ゆりからメールがないことを気にしていた。華美美鈴は無事なんだろうか。
「ジニさっきのわさびうどんのレシピをメールしてくれませんか」
「スマホに」
「帰ってつくってみます」
「少し早いけど帰ります」
「わかりました」
「牧野由香さんいますか？」
「行きます」
「少し早いけど帰ります」

「なにかあったら電話をください」
「水野まさみさんには帰ってわさびうどんつくると言ってください」
湯花邪無は、北千住のスーパーマーケットで生うどんを買って昆布を買った。
まだ16時だった。
「ただいま」
奥からそっと華美美鈴が出てきた。
「沢風ゆりはまだ仕事をしている」
「わたしがスポーツジムに行ってカギをもらってきた」
「いつも助けてくれてありがとう」
「湯花邪無のアイデアにはいつも驚く」
「やっぱり誰かに撮影された」
「この走り方は華美美鈴ではないのか」
「どうして羽田でまた走っているのだ」
動画の再生回数が凄かった。
「また先里風香に心配をかけてしまった」
「どうしてムンバイに行ったのですか？」
「工場のアースバッテリーの図面を持っていった」
「どこから情報が漏れたのかわからない」
「渡せたのですか？」
「日帰りだった」
「帰りに空港で拉致されたのですか？」
現在の経済大国世界１はインドである。人口も伸び方は止まっているが、16億人もいる。経済は人口でもある。経済は再生産と消費だから、人口が少なくなっている日本などは、インドに企業進出することしか、成長のシーズが見えない。これから１００年はアフリカの時代である。
中国は世界２位の経済大国だが人口は10億人を切った。人口増加による自己崩壊の危機は回避できたのだが、今後は、高齢化社会をどう運営していくかに焦点が集まる。
中国は、早くからアフリカに進出していて、あらゆる産業分野で、中国企業がトップを占めている。

それでも、人口の多いインドの経済力には敵わない。インドの人口は、今後１００年で10億人にまで減るのではないかと言われている。豊かになると、人間としての存在が大事になる。欧米や日本などの先進諸国と同じ道をたどる。
現在のインドの最大の悩みは電力不足である。インドネシアで先日発表した、工場機械のアースバッテリーは、インドとしても、すぐに実現させたい事項である。
それなのに、華美美鈴がまた拉致された理由は、アース戦車のことである。日本の戦車の会社である。どこにも証拠はないのだが、間違いはない。誰も訴えないし事件でもないので、警察が動かないから、曖昧のまま、華美美鈴の羽田での疾走が、何度もネット上の動画を賑わしている。
「沢風ゆりは何時に帰ってくるのですか？」
「19時と言っていました」
「何も食べていないんでしょ？」
「ええ」
「じゃ〜うどんを買ってきたからつくります」
湯花邪無は、ジニからわさびを１本もらってきた。
多分、醤油を少しと塩味だ。それと昆布。とろろ昆布も買ってた。
「見てるんですか？」
「ええ」
「湯花邪無は料理は何もしないと聞いています」
「少し前まで何もしませんでした」
「とろろ昆布とどっちがいいですか？」
「とろろ昆布」
「うどんは温めた方がいいです」
「やります」
華美美鈴は鍋に水を入れて沸かしはじめた。
おつゆをスプーンですくってみた。
けっこういい味がする。
「うどんを入れます」
とろろ昆布を乗せて、そして冷蔵庫からスライスわさびを取り出して上に乗

せた。
「どうぞ」
「いただきます」
「ああ〜すごいおいしいです」
湯花邪無もおいしいと思った。
わさびの香りがなんとも言えない。
「お茶です」
「ありがとうございます」
「今度日本を出るのはタイヘンだけど」
「出ないとスケジュールが詰まっています」
「今日と明日は何もありませんけど」
「８月６日があるんだ」
「リオに行くことになっています」
「この映像が流れているから先里風香が心配している」
「日本の人の考えは何かおかしい」
「わたしが日本人だからという考えがある」
「湯花邪無は国籍はどっちなんだ」
「日本だ」
「でもジャカルタが拠点だ」
「上海にもカサブランカにもお店を計画している」
「日本人だから特別にという考えはあるのか」
「ない」
「先里風香にもわたしにもない」
「人間の１人として考えている」
「日本人だから勝手に拉致する考えがおかしい」
「もう日本の警察に被害届を出した方がいいのではないか」
「わたしが逃げ通せなかったら先里風香がやることになっている」
「わたし自身が事情聴取などで警察に追われるようになったら、スケジュールがこなせない」
「アースライティングなどで日本政府から要請はないのですか？」
「人口減少して日本は電力が余っている」

「この上アースライティングが増えたら、それはそれで困ったことになる」
「制限はしていないけど」
「暗黙のプレッシャーがかかっている」
「だからわたしを日本に呼ぶことは考えられない」
「戦車の会社やアースジェットの会社が先里風香の協力がほしい」
「先里風香はアメリカにいるが、アメリカの戦車がジェットの会社は先里風香に協力を求めないのか」
「断っているというかできないと言っている」
「パワーアップができないことですか？」
「アメリカの会社は表で交渉しようとするが日本の会社はわたしを人質にしてムリに協力させようとする」
「なぜだ」
「日本人だから日本のために協力すべきだ」
「これは犯罪だけど」
「わたしが帰って来なかったら犯罪にすることになっている」
「その前に脅される」
「ただいま〜」
「おかえりなさい」
「ビックリした〜でも助けてくれたのね」
「遅くなったからおすし買ってきた」
「何か食べた？」
「私がわさびのたたきうどんをつくりました」
「なにそれ」
「あなたにそんなことができるとは思えない」
「ああ〜１つ残しておいたからやります」
「わたしの？」
「ええ」
「おすましにできる？」
「やってみないとわからない」
わさびのたたきととろろ昆布のおすましができた。
「ああ〜すごくおいしい」

「わさびが最高に香りがいい」
「あなたじゃないみたい」
沢風ゆりと華美美鈴と湯花邪無は、これからどうするか話し合ったのだが、グッドアイデアが出なかった。

新潟空港からロシア経由

「いい考えが出るまでここから出ない方がいい」
「わたし代休だから今日は一緒にいる」
「あなたはジャカルタなのね」
「フツウどおりで」
「わかった」
「リオにどうしたら行けるか考えよう」
「使い捨てスマホを買っておいてください」
「わかった」
華美美鈴は、使い捨てスマホしか使っていない。何度もスマホを棄てなければならない状態に陥ったからだ。
華美美鈴は、ＰＣも持ち歩かない。何度も拉致されているのだ。スマホやＰＣは最初に取り上げられる。
「おはよう」
「おはようございます」
湯花邪無の声はいつも明るい。
「今日はエミルのとこに行くのね」
「そうです」
「なにかありますか？」
「順調」
「13日は８月の誕生会だから」
「知っています」
「お昼はどっち？」
「もう出ます」

「エミルのとこね」
「ガダラのとこかもしれない」
「ガダラだったら社員少ないから」
「電話します」
「スパイス工房に行ってきます」
「いってらっしゃい」
みんな練習しているのではないかと思ってしまう。
「エミルこんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「ちょっとこれを見てください」
「わさびね」
「商品としてはこうなるんだけど」
「意見を聞きたいの？」
「そうだ」
「見せて」
「これはすごい技術ね」
「そうだ」
「わさびの森にも行くでしょ？」
「ええ」
「10分待ってて」
「ラニはごはんの用意してるか」
「お相手できない」
「工房に行ってみる」
「お昼は？」
「ガダラに電話しておく」
「お願いします」
リーマイがやってきた。
「ｙｕｈａｎａの森に一緒に行く」
「豆板醤を試作しています」
「何がポイントですか？」
「レッドペッパー」

「豆板醤にピッタリの赤唐辛子？」
「そうです」
「ｙｕｈａｎａの森で栽培しているのですか？」
「そうだ」
「わさびの森をつくるそうだけど上海にレッドペッパーの森をつくってほしい」
「リーマイの成長を待ってる」
「お金は？」
「お金はなんとかなるが人が問題だ」
「わたしがおいしい豆板醤をつくれるか？」
「そうだ」
「そしたら上海にレッドペッパーの森をつくってくれるのか」
「そうだ」
エミルがやってきた。
「わさびと塩味なすのてんぷら」
「こんなのは日本的かもしれない」
「摘んでみて」
湯花邪無は、ホントに日本的だと思った。
今の時期、ジンもなすの料理をやってくれるが、てんぷらは食べたことがない。わさびの香りがグッときておいしい。
「ガダラこんにちわ〜」
「ちょうどお昼だけど」
「リーマイもどうぞ」
「タフチャンプル」
「先に食べて」
「わかりました」
「ミスタージャムはわさびを持ってきたのか」
「これだ」
「タフチャンプルにはふさわしくない」
「どうなってるのか」
「新鮮のまま採りたてわさびを実現させたい」

「ただ細胞が壊れないと辛さが出ない」
「それでスライスしたのか」
「スライスの方法も特別です」
「特別って？」
「グチャグチャになる」
「なるほど」
ステファノは黙って聞いていた。
「さあ食べて」
「いただきます」
食事中に沢風ゆりから空メールがきた。
何かあったのだ。わからない。
ステファノはわさびを植えた水辺にリーマイと湯花邪無を連れて行った。
ジャカルタで育てることは難しいかもしれない。
残念だが。湯花邪無にはわさびを育てるノウハウがない。
「ミスタージャム、レッドペッパーを見てくれ」
「レッドペッパーにも種類がたくさんあるのですか？」
「わたしのイメージする豆板醤にピッタリのレッドペッパーを育てたい」
「それはもう決まっているのか」
「まだ決まっていない」
「たくさんの種類のレッドペッパーを育てている」
８月５日である。もしかすると、華美美鈴は、リオに行かなければならないことで焦っているのではないかと心配になった。
今朝は、今日はじっとしていようと話し合ったばかりだ。
「ジン、ちょっと急用で東京に行ってくる」
「もしかしたら今日はジャカルタに帰れないかもしれない」
「また連絡する」
ジンには知らせておいて、湯花邪無は、ｙｕｈａｎａの森の帰りにジャカルタ空港に向かった。14時30分だった。
羽田のアースカーから沢風ゆりに電話をした。
「なにかあったんだろうか」
「新潟空港からロシアに出ようとして捕まった」

「今はどこにいるのか」
「わからない」
「スマホは棄てたのか」
「スイッチが入ってないし棄てたと思う」
湯花邪無は困った。
新潟空港では、いくら華美美鈴が足が速くても、逃げ場がない。アースカーもない。もしロシアに脱出できなかったら、確実に捕まってしまう。
「最後に連絡が来たのは何時ですか？」
「空メールを送った時だ」
３時間近くが経過している。
湯花邪無は、考えることができなかった。想像することすらできない。情報がないと、人は、考えることすらできない。
湯花邪無は、ライブテレビを探ってみた。
どこを探っても、華美美鈴のことは出てこない。そもそもが、ムンバイからニューヨークに帰ったことになっているのだ。まさか日本にいるとは、誰も思いつかない。
湯花邪無は、北千住のマンションに情報を求めて帰ってみた。
「おかえり」
沢風ゆりは今日は休みで一緒にいるはずだった。
「冷し中華を買いに行った」
「何か残してないですか？」
「ゴメンというメモだけ」
「そもそもハンドバックしかなかった」
「荷物はムンバイ空港なんだろうか」
「多分」
「東京に連れてくるんだろうか」
「多分」
「新幹線ね」
「自動車かもしれない」
「どっちにしてももう東京に着いてる」
「もうムリかもしれない」

湯花邪無も、もうムリかもしれないと思ってしまう。手掛かりがないのだ。
戦車の会社を検索してみた。
本社工場がつくばにあった。
他には何もいない。確かに営業所などいらない。
「つくばに行くの？」
「何もできないかもしれないけど」
「もしかして連絡があるかもしれないからここにいてください」
「わかった」
湯花邪無は、ナビに戦車の会社の住所を入れてアースカーを走らせた。
湯花邪無が運転しなくても戦車の会社に着いてしまう。
つくばとはいえ外れた場所だった。
飛行機の格納庫のような建物がいくつもある。そしていかにも事務棟のような４階建てのビルがあった。
多分、この４階建てのビルの中にいると思った。
１キロ手前の車避けにアースカーを止めた。
何も考えることができない。入れるはずがない。
湯花邪無のアースカーの前に、掃除の会社の車が止まった。同じ車避けである。エンジンを止めてしまった。時間を待っているかのようだった。
５分待っても動かなかった。
湯花邪無は、清掃会社の小型トラックの後のドアを開けてみた。思いもかけないことだったが開いてしまった。身体が入るだけの少しの隙間を開けて中に入った。
真っ暗だったが、洗剤の臭いで窒息しそうだった。奥に入った。洗剤の棚に隠れることができた。もう10分ここで待ったら諦めようと思った時、車が動きはじめた。
息ができないほどの臭いなのだが、ここまできたら息を止めてもガマンするしかない。
すぐに車は止まった。多分調べられる。
洗剤の棚の奥に隠れた。後のドアが開いて、中を覗いている。すごい臭いなのでガマンできないだろう。
そのままバタンとドアを閉めた。

車はまた走りはじめた。しばらくして止まった。後のドアが開いて２人の男がモップと電動たわしのようなものを車から降ろして、ドアを開けたまま運びはじめた。
湯花邪無は、素早く降りて、２人が見えなくなると、走って、２人の後を追った。
エレベーターホールに掃除具を置いて、引き返してきた。湯花邪無は、トイレに入った。見られてないはずである。トイレに干してあった清掃員の上着と帽子だけを着て、エレベーターホールに行った。２人はすぐに返ってくる。
湯花邪無は、一瞬に各階の名前を見た。戦略室が４階にあった。そのままそばの階段を昇った。
４階まで誰にも会わなかった。非常階段にしか使っていないのだろう。そんなつくりの階段だった。
化粧品の会社ではない。戦車の会社である。人が多いわけではない。人は、飛行機の格納庫のような建物にいるに違いない。
４階のトイレに入った。
誰にも会わない。
雑巾を持って、床を拭きながら部屋を確認した。窓ガラスではなくて壁にドアがあるだけである。
電灯がついているのかもわからない。
12部屋ある。様子がわからないままトイレに返ってきた。エレベーターが４階で止まった。
湯花邪無は、清掃中の立て札を入り口に移動させた。
「フロリダに電話させろ」
「手荒なことをするとメンドーになる」
「時間が経てば諦める」
湯花邪無は、どの部屋に入るかそっと覗いて見た。奥から３番目の部屋だった。カギを開けていた。きっとここに華美美鈴が軟禁されていると思った。あの２人の会話から想像できる。
20分待った。どうしたらいいのかイメージすらわかない。ガチっとドアが開いた。湯花邪無は、清掃中の立て札をしまった。そして、清掃具のドアを開

けて中に入った。
２人がトイレに来てくれるのを願った。
「あんな脅しをしないでくれ」
「新潟空港の華美美鈴を公開すると先里風香が気がつくかもしれない」
湯花邪無は、小走りに奥から３番目の部屋に飛び込んだ。
華美美鈴が大きな目を見開いた。
湯花邪無は、部屋の中の隠れる場所を探した。戸棚を開けて中に入った。地図が丸めて立てかけてあった。やっと湯花邪無が入れる。
「晩ごはんですが何がいいですか？」
「ご希望があれば何でも」
「何かしゃべってください」
「じゃ〜おすしにしますから」
「トイレに行きたくなったらこの階の端にあります」
「後でベッドを持ってまいります」
湯花邪無は、帽子をかぶった事は良かったと思った。手袋もグッドだった。どうせ監視カメラが動いている。湯花邪無を知られたらメンドーだ。帽子を深くかぶって、地図の棚から出た。ドアを開けてみた。
「トイレに行きたくなったらこの階の端にあります」と言っていた。
華美美鈴は出入りできることになる。
何か仕掛けがある。
「廊下の端にセンサーがあって階段もエレベーターもロックされます」
「さっき試してみました」
「私はどうして入ってこれたのかわかりません」
「２人が来るからセンサーを外したのかもしれません」
こうして２人が話していることもどこかで見られているかもしれない。
思い切ってやるしかない。
「ロックがかかった時音がしたのですか？」
「エレベータの電源が落ちましたから」
「時間がないから行きます」
「失敗したら逃げてまた来ます」
湯花邪無は、床に腹ばいになって、進んでエレベーターホールに出た。

それを見て華美美鈴も腹ばいになってエレベーターホールに出た。
「階段を１階まで走ります」
湯花邪無は、必死に階段を駆け下りた。華美美鈴が湯花邪無を追い越して走った。もう止まることはできない。
「清掃車の中に」
湯花邪無と華美美鈴は、まだ終わっていないらしい清掃車の後のドアから車に入った。
「臭いがすごいから息を少しにして」
「ガマンしてください」
洗剤の棚の陰で湯花邪無は華美美鈴をシッカリ抱いていた。
「１時間でもガマンしてください」
華美美鈴の呼吸が苦しくなったのがわかった。30分かそれ以上じっとしていた。呼吸が苦しい。
「４階は掃除しなくていいらしい」
「明日３階をやろう」
バケツや清掃道具を車に無造作に積み込んだ。
そして多分門まで来た。
後のドアが開いて警備の人が中を覗いてきた。すごい臭いなのだ。
すぐにバタンとドアを閉めた。
しばらく走って車は止まった。不安だった。
外に出てタバコを吸いながらコーヒーを飲んでいるのだとわかった。
真っ暗の中、気を失いそうな華美美鈴をうながしてドアに近づいた。バケツがある。幸いにポリバケツだった。
車の前の方から声がする。
湯花邪無は、そっとドアを開けて、少しの隙間から車を降りた。
華美美鈴はハダシだった。バックを背負っていた。
ラッキーなことに、湯花邪無が車を置いた車避けの場所だった。
２人は、なにやらテレビドラマの話しをしていた。
右の縁石に腰をかけて話していた。
華美美鈴が、いきなり湯花邪無に唇を求めてきた。
「お礼だから」

「まだこれからだけど」
湯花邪無は、そっと車のドアを閉めた。
清掃車とアースカーは対向している。自分のアースカーに乗れない。
湯花邪無は、そのまま後ずさりをして木の陰に隠れた。
清掃車の２人は、何事もなかったかのように、グイっと左にハンドを切って走り去った。
湯花邪無は、自分のアースカーに急いだ。
湯花邪無はヘトヘトだった。ナビに北千住のマンションを入れて、運転をお願いした。
「あなたってなんなの？」
「え？」
「あんなとこに入り込む人なんかいない」
「今日は動かないと約束したら動かないでください」
「わかった」
華美美鈴は、安心した顔で目を閉じていた。眠れるわけはないのだが、眠ったかもしれない。
「今日は東京にいます」
「ジンにメールした」
「ただいま～」
現れた華美美鈴を見て沢風ゆりは驚いた。
「どうしたの？」
「湯花邪無が戦車の会社の４階に来て助けてくれた」
「逃げたの？」
「戦車の会社なのに厳重だったんじゃないの？」
「厳重だった」
「どうして～」
「わたしもわかんない」
「ムチャだと思う」
「この帽子と上着は見つからないようにしないといけない」
「ゴミの袋に入れる」
「ゆりゴメン」

「わたしシャワーしないと臭い」
「帰るかどうかわかんないけど着替え買っておいた」
「シャワーしてきて」
「ごはんやってるから」
「マーボナス」
「あなたバレたの？」
「わからない」
「監視カメラにもバッチリだよね」
「多分」
「帽子かぶってたからわかりにくいか」
「手袋してた？」
「ええ」
「あなたがバレちゃうとメンドーになる」
「そうですね」
「でもよく逃げられた」
「感心する」

華美美鈴を逃亡させた男

８月６日だった。
まだ華美美鈴が起きてこない時間に、湯花邪無はごはんを食べていた。
「大丈夫？」
「平気です」
「わたしも仕事だから」
「何事もないかのようにしないといけない」
「わかってる」
「スマホを買っておいてください」
「わかった」
「冷蔵庫のお金使ってください」
「使ってる」

湯花邪無は、羽田までのアースカーの中で、ライブテレビを見た。どこのライブテレビも、アースバッテリーのニュースをやっていなかった。
つくばの戦車の会社では、華美美鈴を探しているだろう。そして、無謀にも、戦車の会社に侵入して華美美鈴を逃亡させせた男を捜索しているだろう。
「おはよう」
「おはようございます」
ジンが心配しているかもしれない。
「ジンおはよう」
「大丈夫？なにかあった？」
「平気だ」
リニが冷たいハーブ茶を持ってきた。
リニおはよう。
「行方不明になったけど」
「今日は予定通りだ」
「ミスタージャムは夏休みはないのか」
「私はあまり仕事をしてないから」
「リニは夏休みはどうしたんだ？」
「シンガポールで遊んできた」
「それはよかった」
「料理教室ね」
「そうだ」
湯花邪無は、アースカーでライブテレビを調べた。アースバッテリーに関するものはなにもなかった。戦車の会社の動きはゼンゼンわからない。華美美鈴が新潟からロシアに出ることを見張った集団である。あなどることはできない。
「今日はガドガドです」
ミナはレシピを８人に配った。
「野菜は茹でるだけだけどソースがポイントです」
「買い物をしてきてください」
「ピーナツも忘れないで」
「今日はわたしが買い物をする」

なんでもメイドにやってもらっている主婦ではなく、もう１人の主婦が手を挙げた。
「今日は簡単だからラッキー」
ごくフツウの主婦だろうと思える。
ジャカルタでは、女性の90％が働いている。週に４日働くだけであり、自由もきく。３歳までの子どもの子育てをしていると、出勤時間が10時である。
ジャカルタだけでもない。シンガポールもクアラルンプールもホーチミンも同じである。みんなが働いてみんなで豊かになっている。
湯花邪無の行っている料理学校で、５人の女性のうち２人が専業主婦などは、珍しいことである。
日本の働いている女性の割合は68％である。たくさんの女性が働いているが、先里風香によると、日本の風習のセクハラやパワハラが、女性の社会進出を妨げたと言っている。日本の場合は、女性の専業主婦の割合が多かった時代に、すでに世界２位の経済大国になってしまったことが、まずかった。
オトコが外で働いて、オンナは家庭を守ることで、経済繁栄ができると勘違いしてしまった。
経済は、再生産と消費である。すべての人が、再生産と消費に参加しないと、経済は膨らまない。案の定、経済は膨らまなくなった。
日本が豊かになる前のヨーロッパでは、インドやインドネシアなどのアジアからの収入で豊かに暮らした時代があった。それでいいと思ってしまったことがまずかった。
経済は再生産と消費である。働いていない人が多いと、再生産ができない。
再生産がないと消費する人がいないという悪循環になる。
みんなが働く前に豊かになると、軟弱な豊かさに陥ってしまう。働かなくて財産で生きる人が多くなるからだ。欧米や日本では、働かない豊かさを改善することができなかった。
現在のジャカルタなどは、全員働くことで豊かさを築いてきている。グッドではないかと思う。
働かない豊かな人と働く貧しい人に分かれることが、今のジャカルタにはない。
先里風香の言っていることに、湯花邪無は賛同する。

「ポイントはソースだからよく聞いてください」
「ミキサーでピーナツを粉々にしてください」
「ピーナツソースのレシピを配ります」
「酢や塩などは教室で用意しました」
「レッドペッパーは好みに合わせてください」
「すべてミキサーでソースをつくってください」
「ミキサーは８台用意してあります」
湯花邪無は、ミキサーを使うのははじめてである。ジンは何度も使っているのだろうが、気にしたこともない。どこにあるのかも知らない。
思ったよりおいしくできた。
「ミスターユハナ、８月15日は空けてありますか？」
みんなの前でいつも確認されるのはよくない。
急用を思いつけなくなる。
「ただいま〜」
「おかえりなさい」
「ここまで続くとは思わなかった」
「おもしろくなったの？」
「そこまではいっていない」
「今日はなんだったの？」
「ガドガド」
「ピーナツソースね」
「ピーナツソースをつくったの？」
「ええ」
「おいしかった？」
「まあまあです」
「いつもまあまあね」
「新宿に行きます」
「わかった」
「なにかありませんか？」
「順調です」
「わかりました」

湯花邪無は気になっているのだ。
つくばの戦車の会社が湯花邪無をつきとめたら、ただでは済まないと思うからだ。メンツだってすごいものだ。天守閣に侵入されて人質と一緒に逃げられたようなものだ。
しかし、湯花邪無の近くでは、何も起きない。
「こんにちわ〜」
「おかえりなさい」
水野まさみの部屋に急いだ。
牧野由香がやってきた。
「スパイス教室をやっています」
「何かありませんか？」
「順調です」
特別に何もないらしい。
湯花邪無は、水野まさみのスパイス教室に向かった。
牛肉ポテトほうれん草のアジア風炒め物と書いてあった。スパイス湯花のスパイスをガッチリ使うのだろう。
「レシピです」
「ありがとう」
ジニが席に案内してくれた。
「熱心に聞いてたけど」
「おいしそうだった」
「アジア風は野菜が多いから人気がある」
「横に大きい人はいないけど」
「ダイエット教室じゃないから」
ジャカルタには、おすし屋さんが４８０軒もある。みんなファーストフード的なおすし屋である。魚が豊富であることもある。世界中でファーストフード的おすし屋が流行っている。もちろん、健康志向を反映している。同じように、世界中で、アジア料理が流行っている。野菜と少しの魚や肉の料理のことだ。
女性でも１８０センチの人がザラにいる。ほっておくと、セイウチのようになってしまう。みんなガンバっているのだ。湯花邪無だって２００センチあ

る。湯花邪無は、ほとんどがジャカルタ料理を食べている。野菜が中心なのだ。体重が重いと思ったことがない。
ファーストフードを席巻していたハンバーガーショップは、野菜バーガーを販売の主力においている。
世界の人口は１００億人になったのだが、野菜中心の食生活に移行して、言われていた水戦争や肉戦争などを心配することはなくなった。
もともと人間は、歯のカタチを考えてみても、肉を食いちぎるようなサメのような歯をしていない。奥歯などは、穀物をすり潰すことに有利なカタチをしている。
一時期の、あたかも肉食が強さの象徴であるかのような風潮は、陰を潜めた。
「ただいま〜」
「おかえり」
沢風ゆりは晩ごはんをつくっていた。
奥から華美美鈴がそっと顔を出した。
「疲れていませんか？」
「平気です」
「リオには行けそうもありませんね」
「延期になりました」
「そうですか？」
「スマホ買ってきて渡した」
「華美美鈴さんがいないからだ」
「それはわかりません」
「アースライティングのことですか？」
「アマゾンに電線を張ってたんですけど」
「アースバッテリーがいいな〜」
「ブラジルは国土が広いから」
「アースバッテリーが適しています」
「そうですね」
「わたしが自由にならないと困るんですけど」
「先里風香は元気です」

「リオを中止したと言っています」
「メールですか？」
「話せませんけど２人だけの連絡の方法があります」
湯花邪無は、なるほどと思った。
先里風香と華美美鈴は、常に危険な状態である。従来の電力に依存している人たちは、存在を消されるかもしれない恐怖に襲われる。先里風香と華美美鈴さえいなければと考えがちである。
人類のためにグッドな方法であっても、歓迎されるばかりではない。
一方で、アースバッテリーのパワーアップについては、多くの分野で研究がなされている。特に兵器の分野では、開発競争になっている。アース戦車は、その典型である。アースジェットも研究中である。
先里風香も華美美鈴も。そのどれにも組していない。
先里風香と華美無鈴が日本人であることから、日本の中の一部からは、非難を受けている。
それでもアースバッテリーの普及を止めることはできないと、湯花邪無は思っている。
特に、次の１００年で世界をリードするまでになると先幸風香が言っているアフリカ諸国は、一気に、アースバッテリーに移行している。しがらみがないのだ。
インドネシアなどの、現在世界を引っ張っているアジアの諸国も、しがらみはあるものの、各国で戦っている状況である。ブラジルも国内が揺れている。
欧米や日本や中国やインドなどは、しがらみが大きくて、揺れている状態ではなくて、混乱が続いている。
先里風香は、フロリダのワールドバッテリーの世話になっている。
もしアメリカが、アースバッテリーのパワーアップを要請してきたら、多分、アメリカにも住まなくなるだろうと予想される。
先里風香と華美美鈴にとって１番危険な国は、国籍を持つ日本である。
先里風香のエッセイによると、人には、優秀な頭脳があるから、その優秀な頭脳は、わからないことを明らかにしたがるから、大量破壊兵器が、わからないことの１つになってしまえば、人は、そのわからないことを明らかにし

たがると言っている。
湯花邪無は、アースバッテリーが、世界中の技術者によって、アースジェットやアース発電所やアース爆弾などに開発の道を拓くかどうかわからない。
先里風香が、そのカギをもっているかどうかもわからない。
このようにして大量破壊兵器が２００年前に開発されてしまって、日本で使われた歴史を、よく承知している。
もし先里風香が、アースバッテリーのパワーアップのカギを握っていたとしても、一切明らかにすることはないのだろうと思っている。
その大事な人が華美美鈴である。キーを握っている。

プライベートジェット

８月７日だった。木曜日である。
このままではまずいのだがアイデアがない。湯花邪無と沢風ゆりが疑われはじめたら困ったことになる。フツウどおりの生活をしないといけない。
アースカーでライブテレビを見た。
日本のライブテレビは、台風の被害でタイヘンである。アースバッテリーのニュースはない。
ここ10年、８月になると、風速60メートルの台風がやってくる。南の海の温度が高いのだ。地震が何度もやってきて津波に襲われている。日本列島は、太平洋の悪魔を受け止めるようなカタチをしている。地球には人間が１００億も住んでいるのだ。人間はエネルギーをたくさん使う。地球が温かくなるのはあたりまえのことだ。
台風がまた来ている。ジャカルタから帰れないかもしれない。
羽田も暴風壁を作っている。着陸すると暴風壁の中に入ってゲートに入る。風速60メートルでは、飛行機も傷む可能性がある。
「おはよう」
「おはようございます」
リニがやってきた。
「ミスタージャムは休日はないのか」

「ジンは休みですか？」
「フツウの休み」
「わかりました」
「台風が来てるけど」
「ジャカルタは平気だけど」
「羽田がタイヘン」
「そうだね」
「わたしお店にいますから何かありましたら呼んでください」
「わかった」
湯花邪無は、ライブテレビで、アースバッテリーの情報を探った、
なにもいない。
このままでもまずいのだ。
華美美鈴が、リオに行かないと、ブラジルのアースカーの普及が遅れるかもしれない。
華美美鈴が新潟からロシアに渡ろうとした理由もわかる。危険を覚悟してのことだ。
「つくばに出張で講師に行く」
「茨城空港に生徒を迎えに行く」
沢風ゆりからおかしなスマホメールが来た。
こんなことはあり得ない。
「生徒は何時に着くのですか？」
「７日の６時」
湯花邪無は台風を調べた。
台風は今日東京直撃だった。23時ごろだ。
湯花邪無は、すべてを計算して頭に叩き込んだ。
「お薦めの豆板醤の試作ができていたらマーボ豆腐のお昼を食べに行きたいのですが」
湯花邪無は、リーマイにメールをした。
「今のところのベストの豆板醤がある」
「お昼をつくって待っている」
「マーボ豆腐ドンブリがいいけど」

「おいしくなくても文句言わないと約束して」

「承知した」

「リニいますか？」

ラナンがやってきた。

「リニはお昼の買い物です」

「スパイス工房のリーマイのところに行きます」

「わかった」

「カラオケは19日だけどいいのか」

「空けてある」

「歌は歌えるのか」

「オンチだ」

「みんなガッカリするから練習してくれ」

「中学生の少女ばかりの歌で私は歌えない」

「昔の歌でもいいから途中で止まらないように練習してくれ」

「昔の歌ってなんだ」

「レットイットビーとか」

「１５０年前の音楽だ」

「いいものはいい」

「歌えない」

「ちょっと待ってくれ」

ラナンはスマホを持ってきた。

「レットイットビーを送ってもいいか」

「わかった」

「練習して最後まで止まらずに歌って」

「私を助けてくれるのか」

「誰にも言わない」

「飛行機で練習してくれ」

「わかった」

「じゃ〜リーマイのところに行ってくる」

「気をつけて」

お昼になっていた。

マーボ豆腐ドンブリをつくっているのだろうか。
「こんにちわ～」
「こんにちわ～」
「ラニこんにちわ～」
「エミルは今日は休みです」
「リーマイに話があって来たんだけど」
「厨房にいます」
「みんな食事をしています」
「厨房は空いています」
「わかった」
エミルもジンも休みなのだが、会社は順調に動く。みんな指示を仰いだりしないからだ。
「リーマイゴメン」
「みんなこんにちわ」
「リビングルームではみんな食事をしていた」
「そこの瓶の左から３番目を使った」
「今１番気に入っているレッドペッパーだ」
「レッドペッパー次第で豆板醤は変わるのか」
「そうだ」
「そこに座ってくれ」
「できたからそのごはんを好きなだけよそってくれ」
「わかった」
ジュウジュウのマーボ豆腐をごはんに乗せた。
「わたしも食べてみる」
「ごはんを少しにしてくれ」
湯花邪無は、どんぶりに少しのごはんをよそってリーマイに渡した。
「この香りがなんとも言えない」
リーマイが言っているようには、湯花邪無は言えない。そもそも、豆板醤でマーボ豆腐の味が変わるなどとは思ってもいなかった。
「ただいま～」
「今日は何もないの？」

「ある」
「泊まらないの？」
「２時の関空を予約した」
「羽田は台風だけど」
「関空からリニヤー新幹線に乗る」
「そうまでして東京に用事があるのか」
「ごはんを食べて抱きたい」
「眠りたいんでしょ？」
「１時に出るの？」
「ええ」
「ごはんできてるからどうぞ」
「スムルだから」
湯花邪無は、スムルと言われてもよくわからない。
「牛肉のトマト煮だから覚えて」
「ああ」
「そのままでいいから座って」
ジンは、湯花邪無に何かがあったことはわかるのだが、詳しいことを聞こうとしない。結婚していないからなのだろうと湯花邪無は感じている。
「１時だけど」
「今眠ったばかりだけど」
「４時間眠った」
「シャワーしないでそのまま出た方がいい」
「わかった」
「連絡する」
湯花邪無は、関空に降りることはほぼない。
関空から乗り継ぎのように、新宿行きのリニヤー新幹線が出ている。30分で新宿に行ける。４時に北千住のマンションに着きたいのだ。
台風は関西には関係がなかった。そして３時には、宮城沖に抜けていた。
「ただいま」
玄関で華美美鈴と沢風ゆりと鉢合せした。
「私が運転していく」

「わたしが行くつもりだった」
「どうやって帰ってきたのか」
「帰って話すから」
「そのために帰った」
「ありがとう」
「もしダメだったらまたここに帰すから」
「わかった」
湯花邪無は、どう調べても、茨城空港から上海と北京にしか便がなかった。
それでも日本から出ればなんとかなる。
新潟空港でも捕まったのだ、つくばに近い茨城空港で見張っていないはずはない。
華美美鈴は、ずっと眠っているようだった。
これが、先里風香と華美美鈴の秘密の連絡の結果であることは、想像できる。
５時30分だった。
「ここで待って」
「そこの建物の陰で15分待って」
華美美鈴は、また眠っているかのように目をつむっていた、このままではセキュリティーを通れない。出国検査の顔パスを通れない。上海行きである。
６時発である。
「もう10分待って」
眠っているかのような華美美鈴が時計を見て言った。
「もう乗れないけど」
華美美鈴は返事をしなかった。
５時55分だった。
もう上海行きは、テイクオフの準備に入っているだろう。引き返すのだろうか。今日の最終便である。
「空港に入って左のゲートに行って」
門の前で華美美鈴は降りた。
「少し待ってください」
華美美鈴は、門の横の建物に入った。

空港の建物の外れである。
３分して華美美鈴が出てきて車に乗った。
「門が開くから左に走って」
湯花邪無は、言われたとおり左に走った。
小さなジェット機が見えてきた。
「わたしはこれに乗るから湯花邪無はさっきの門に引き返して北千住に帰って」
「プライベートジェットを手配したのか」
「先里風香が手配した」
湯花邪無は、ジェット機の近くに止めた。
「わたしがテイクオフするのを見ないで行って」
「わかった」
湯花邪無は、そのままジェット機の階段を昇っていった。
湯花邪無は、急ぐでもなく、またさっき入ってきた門に向かった。そのまま止まる事もなく、北千住までアースカーを走らせた。

モスクワは大丈夫か

８月８日である。金曜日になっていた。
「ただいま」
沢風ゆりは、ホッとしたように、玄関で崩れ落ちた。
「今度こそ捕まるんじゃないかと思った」
「プライベートジェットが着ていた」
「上海行きがテイクオフしたすぐ後に出たからうまくいったのかもしれない」
「まさかなんだ」
「多分」
「今日はどうするの？」
「フツウどおりにしないとまずい」
「ジャカルタの料理教室ね」

「ええ」

「わたしは仕事に行くから」

「シャワーしたら出ます」

「８時の便に乗れないね」

「急ぎます」

「ごはんは？」

「途中で食べます」

湯花邪無は、それでもギリギリで８時のジャカルタ行きに乗った。

フツウどおりにしないといけないと思った。

ジャカルタの空港からスパイスｙｕｈａｎａまでのアースカーの中で、

ニューヨークのライブテレビで、華美美鈴が囲み取材を受けていた。

「今からリオに行きます」

「ブラジルのアースライティングが更に普及することを願っています」

予定が１日ズレたことなども質問になったのだが、華美美鈴は、何も語らず出国検査に消えた。

プライベートジェットが着いて、着替えて、そのまま、ライブテレビにリリースしたのだろう。

「おはよう」

「おはようございます」

湯花邪無は、ジンの部屋に急いだ。

「おはよう」

「コーヒー煎れておいた」

「ありがとう」

「今日はなにもないの？」

「まったく何もない」

「料理教室に行って新宿？」

「そうだ」

「わかった」

リニが入ってきた。

「マニラに行く時間だけど」

「リニと一緒にマニラに行ってくる」

「はじめるんですか？」
「街の様子を見てくる」
「わかった」
「プノンペンにも行こうと思ってる」
「ああ」
「いってきます」
「いってらっしゃい」
「ミスタージャムもガンバって」
「ありがとう」
ジンは、いつもの時間に湯花邪無が現れることを願ったのだと思った。
「出かけます」
「いってらっしゃいませ」
どうしてみんな声が揃うのかわからない。
「ミスターユハナ、８月15日を楽しみにしている」
みんなの前で、何度も何度も言われると、キャンセルすると悪人になってしまいそうである。
「今日はグドウツです」
「レシピを配りますから買い物をしてきてください」
「黒砂糖がポイントです」
「今は教室にもありませんので買ってきてください」
「今日はわたしが買い物します」
夜レストランの厨房に勤めている若い女性が手を挙げた。
８人が１度も休むこともなく料理教室に通っている。
「ミスターユハナが最初に来なくなると思ってたんだけど」
夜レストランに勤めている若いオトコが言った。
「まだ失業中なのか」
「そうだ」
「オレと同じ仕事だったら紹介できるから」
「ありがとう」
「でも今は料理を少しはできるようになりたいから」
「暮らしていけるのか」

「前の貯金が少しばかりある」
「そうか」
「黒砂糖の使い方がわかりましたか？」
湯花邪無は、自分のつくった料理が、今日はおいしいと思った。
「ミスターユハナ、８月15日ですよ？」
こう頻繁に宣言されたのでは、逃げることはできなくなる。
「ただいま〜」
「おかえり〜」
ラナンがやってきた。
「新宿に行くのか」
「そうだ」
「この前のイエスタデイを歌ってみてくれ」
「イエスタデイは聞いていない」
「じゃ〜イエスタデイを送る」
「レットイットビーだけでいいけど」
「もし上手だったらまだ聞かせてくれになるから」
「下手だから心配ない」
「準備をしておいてくれ」
「レットイットビーを聞かせてくれ」
「まだ覚えていない」
「ジンやリニがいたら歌なんか教えられない」
「ありがたいが次にしてもらっていいか」
「飛行機で練習してくれ」
「わかった」
湯花邪無は、ジャカルタ空港まで、アースカーでブラジルのライブテレビを聞いていた。
ブラジルも、インドや中国のように、アースライティングを躊躇している国だった。しかし、既存の電力会社の反対を押し切って、アースライティング70％計画を実行に移すようである。
これによって、電線での電力の自然消費が大幅に少なくなる。
国土の広い国はタイヘンである。ロシアもカナダも中国もインドもアメリカ

も、電力に苦しんでいる。
「こんにちわ～」
「こんにちわ～」
湯花邪無は、もしかして湯花邪無が華美美鈴の逃亡を助けているオトコだと、特定されるかもしれないと心配している。
湯花邪無のアースカーを使っていたので、どこかでナンバーを撮られているかもしれない。
「なにもありませんか」
「順調です」
いつものように、にこやかに話す水野まさみを見ていると、安心する。
「今日は何の料理でした？」
「グドウツ」
「ちょっと難しい料理ね」
「おいしくできましたか？」
「まあまあでした」
「明日ソウルに行って来ようと思います」
「やるのですか？」
「ソウルはジンがやった方がいいと思う」
韓国と北朝鮮は、１３０年前に戦争したきり同じ民族なのに２つの国家になっている。統一できるチャンスはいくつもあったのに、ほんの些細なことで踏み切れないでいる。
韓国と日本の関係も、２００年前に、日本が自国の領土として宣言して以来、良い関係を築けないでいる。
ソウルからスパイス湯花の通信販売の電話があるし商品を新宿から出しているのだが、送料をお客さんに負担していただいている。
いつかはソウルに出ないといけないのだが、東京よりも、ジャカルタから行く方が好ましいとみんな思っている。
韓国の人口は４０００万人に達しそうである。日本とよく似た人口減少傾向をたどっている。
先里風香のエッセイには、豊かになるための競争社会が形成されると、必然的に出生率は下がってしまうと書いてあった。体制が問題なのだろう。

エリートであることと豊かに暮らすことが一致しているのだ。エリートを育てるためにはお金がかかる。子どもが多くては、エリートを育てられない。単純な構図なのだろう。この風習は簡単には覆すことが難しい。
「８月11日の誕生会は何をするのですか？」
「ハワイ料理をみんなで食べます」
「フラダンスを鑑賞します」
「みんなでワイキキに行きたいんだけどそこまでお金がないから」
「わかりました」
「空けてあるんだよね」
「ええ」
「ミスタージャムは売上げがどうなっているのか聞かないけどいいのか」
「パブリックホルダを見ている」
「興味がないのか」
「料理をおいしく食べていただいているかどうかに興味がある」
「それにしては料理がゼンゼンだった」
「私が未発達だからだ」
「パブリックホルダのお客さまからの声を読んでいるのか」
「飛行機の中で楽しく読んでいる」
湯花邪無は、ジャカルタの大学での講義を考えようと思った。
初回の講義は、もしスパイスが発見されなかったらというテーマにしようと思った。
思ったというより、漠然と毎日考えていた。
スパイスは、冷蔵庫のない時代に、魚や肉を塩漬けで保存しなければならなかった時代に、調理によって、匂いを拡散させたり、防腐的役割をさせたり、おいしそうな香りを添付したりするために、熱帯地方のアジアの人々が開発したものだ。
ヨーロッパ先進国では、そのような熱帯的な食物はなく、アジアからヨーロッパに伝わった時には、黄金に等しい価値があった。肉料理にスパイスを使えるかどうかは、生活のグレードを表すことになった。
ヨーロッパの国々は、このスパイス貿易によって大きな財を築いたが、生産国が潤うことはなかった。コロンブスなどの大航海時代を拓いた一つの理由

でもあった。
こんな誰でもが知っている一般的なスパイスの歴史から入っていこうと思った。
現代では、貿易も簡単になったし、なによりも冷蔵庫の普及で、魚や肉類の長期保存が可能になって、スパイスの役割は、香辛料としての役割が主になった。
18時になった。
「おさきに」
「おつかれさまでした」
スパイス湯花の社員はシフトで働いている。お店である。22時までやっている。
「ただいま」
「おかえりなさい」
「何もないから安心して」
沢風ゆりには読まれている。
「あなたがやってることは華美美鈴と同じ匂いがする」
「危険な匂い」
沢風ゆりは、パエリアをつくっているのだと思った。
スパイスを入れながら、普段口にしないことを言った。
「シャワーしてきます」
その夜は、沢風ゆりは、湯花邪無のベッドに潜り込んでこなかった。
「おはよう」
「おはよう」
「今日はジャカルタね」
「ええ」
「お味噌汁貝にした」
「ネギ納豆」
「日曜はどうするの？」
「空いてる」
「那覇空港で待ってていい？」
「那覇の海」

「８時でいい？朝の８時」
「わかりました」
「冷蔵庫のお金でスイムスーツ買ってもいい？」
「どうぞ」
「月曜日那覇からジャカルタに行ける？」
「ええ」
「那覇に泊まってもいい？」
「ええ」
湯花邪無は、沢風ゆりが少し変わったと思った。
北千住から羽田までのアースカーで、ニューヨークのライブテレビを聞いていた。
「モスクワのアースライティング展示会に出席します」
空港である。モスクワの今日ということになる。
華美美鈴がムンバイから拉致されたことは誰も知らない。
モスクワだって、そんなに遠いわけではない。それにしても、リオから帰ったばかりなのに忙しい。政治的に利用されているのではないかと思えなくもない。
プライベートジェットを飛ばしているのだろうか。１番安全である。
「おはよう」
「おはようございます」
「ジンは朝からシンガポールです」
「何かあったのですか？」
「ターメリックが３日品切れするのでおわびに行った」
「どうしたのですか？」
「売れ過ぎです」
「エミルがすぐに対応して３日で済んだ」
「シンガポールのどこかのお店ですか？」
「お店は大量に仕入れることがあるから怖い」
「安くしてないんでしょ？」
「生活者価格しかない」
「それでもｙｕｈａｎａを使ってくれるのですか？」

「だからジンが謝りに行った」
「なるほど」
「ジンから何も言われていません」
「私のことですか？」
「コーヒーがいいかお茶がいいか」
「ホットコーヒー」
湯花邪無は、昔の自分の文を読み直している。レッドペッパーだ。赤唐辛子の原産は、中南米で、コロンブスが持ち帰った。
当時のヨーロッパでは、コショウが黄金に匹敵する価値を持っていて、コロンブスの航海の目的も、黄金とコショウにあった。たまたまアメリカ大陸であったためにコショウには行き着けなかったが、レッドペッパーに行き着いた。
レッドペッパーは、ビタミン豊富な野菜としても使えることから、ヨーロッパで大流行した。
その後、レッドペッパーは、アジアに伝わった。それにしても、朝鮮料理の唐辛子の利用は半端ではない。今日でも、すごい量が使われている。
「もしもし」
湯花邪無はリーマイに電話をした。
「ミスタージャムなんですか？」
「今はヒマなのか」
「ヒマではないが電話はできる」
「唐辛子の森は候補地はあるのですか？」
「四川だ」
「成都ですか？」
「昆明がよい」
「なぜだ」
「そら豆も大事だ」
「なぜだ」
「そら豆を発酵させて豆板醤をつくるからだ」
「唐辛子が中国に入ってくるまではサンショウでやっていた」
「マーボ豆腐ですか？」

「唐辛子は新しい」
「しかし、マーボ豆腐は唐辛子が似合っている」
「準備してもいいのか」
「わさびの森がうまくいったら唐辛子の森をつくる」
「契約はするな？」
「探しておけ？」
「そうだ」
「豆板醤で勝負するのか」
「レッドペッパーでも勝負する」
湯花邪無は、つくづくオンナの時代だと思ってしまう。
組織を運営するのは女性が向いている。お母さんができるからだ。会社であれば、社員の絶対的味方になってやれる。
オトコはそうはいかない。
絶対的味方になる立場がない。父親と母親の違いである。
「ただいま」
夕方になってジンが帰ってきた。
「聞いた？」
「聞きました」
「謝ってお昼をご馳走した」
「夜もって言われたけど断った」
「習慣になったらいけない」
「今日は何もないの？」
「フツウです」
「明日は早く那覇に行きます」
「わかった」
ジンは理由を聞かない。もしかして、湯花邪無が、東京で家庭を持っているかもしれないと思っている。
それでもいいと思っていることは間違いない。
「牛肉のサテだから」
「知っています」
「そうじゃなくて料理を覚えて」

「いただきます」
「ごはん白だから」
湯花邪無は、６種類くらいテーブルに並んでいる小さな料理がわからない。
佃煮のようだがジンは教えようとしない。
「明日何時に出るの？
「７時の那覇行き」
「じゃ〜６時ね」
「ええ」
「ゆっくりしよう」
ジャカルタは、東京よりも時間の流れが遅いのだが、経済規模はジャカルタの方が大きくなった。
のんびりでも人の数が多いのだ。

カサブランカ

あなたのためにならない

「５時30分だけど」
「ありがとう」
沢風ゆりが那覇で待っている。
その待ち合わせに間に合うようにジンが起こしてくれるのだ。しかも日曜である。
カミサマがお仕置きをしなければよいがと思ってしまう。
湯花邪無は、ジャカルタ空港に向かうアースカーで、モスクワのライブテレビを見た。
シベリアで華美美鈴がアースライティングを新たに設置した村で、にこやかに笑っている動画が流れている。
いまのところ無事のようだった。
湯花邪無には、華美美鈴のような、身の危険を承知していても、あることに向かって行動できるような、勇気もなければ、あることもない。
たしかに、スパイスについては、一生を費やしてもよいとは思っている。
しかし、スパイスをやってて身の危険を感じることなどあり得ない。
湯花邪無は、運転をアースカーに任せて、香風里先の『人と集団を滅ぼすもの』をダウンロードした。
ジャカルタから那覇の35分、湯花邪無は、『人と集団を滅ぼすもの』を読んだ。
おかしな本だ。
人には、遺伝子的自分と優秀な頭脳的自分の２人がいて、遺伝子的自分は、子孫を残すことしか目的がない。優秀な頭脳的自分は、唯一人間にあって、わからないことを解き明かすことがコンセプトらしい。
優秀な頭脳は、優秀過ぎて、いずれ自分自身を滅ぼしてしまうから、見えざる悪魔と愛を、抑止力として与えた。それはカミサマではないかと言っている。

見えざる悪魔は、優秀な頭脳を滅ぼすためだけに存在して、愛は、優秀な頭脳を生き残らせるためだけに存在する。
人間とは、遺伝子的自分と優秀な頭脳的自分と、見えざる悪魔と愛でできていると言っている。
まだよく理解していないが、先里風香と華美美鈴は、愛に溢れた人のように思えるし、アース戦車やアースジェットの会社は優秀な頭脳そのもののように思える。
アースバッテリーをパワーアップさせたい。
それはまずいので、見えざる悪魔でアース戦車の会社を滅ぼすか、愛のチカラで、アース戦車の会社を抑止するか。
この『人と集団を滅ぼすもの』を書いたのは、香風里先である。先里風香は、人間を滅ぼすものを承知している。エネルギーで滅ぼすところを、アースバッテリーで抑止しようとしている。
しかし、そのアースバッテリーをパワーアップさせて、また人間を滅ぼす方向に向かおうとする。
現実的に、アースバッテリーをパワーアップさせることができるのかどうか、湯花邪無にはわからない。
２００年前にもあった。優秀な頭脳を抑止しないまま、愛のチカラが負けてしまって、原子力のチカラをパワーアップしてとんでもないことになった。それは、２００年後の今でも引きずっている。
優秀な頭脳は優秀だ。後先のことなど考えない。わからないことがあったら明らかにしたいのだ。どこまでパワーアップできるか知りたくなったら、ホントにできてしまうのだ。
現に、爆弾が地下に眠っている。地下に封じ込めたとしても、優秀な頭脳は、とんでもないことを考えてしまう。
アースバッテリーだって、同じことになるかもしれない。
「うれしい〜先に着てたんだ」
「そうだ」
「台風は大丈夫？」
「今日は大丈夫そうだ」
「宜野湾のホテル予約してある」

「ああ」
「車も予約してある」
「お金払ってないからお願い」
「わかった」
「ホテルから浜に出られるから」
「アースカー借りに行く」
「わかった」
日曜で浜は混んでいた。
「浜も予約制なんですか？」
「ホテル代に一緒になってる」
「なるほど」
「パラソルの下」
「ここがいい」
「すごいね〜沖縄の海」
「あなたの水着気に入った？」
「ええ」
「身体がカッコいいからな〜何でも似合うかも」
「わたしもカッコいいでしょ？」
「とりあえず海ね」
沢風ゆりは走って海に飛び込んだ。
スポーツジムのインストラクターである。そのままガンガン沖に向かって泳ぎはじめる。
「あなたの泳ぐのはじめて見た」
「私だってはじめてだ」
「バックで泳ぐのね」
「バックしか泳げない」
「おかしい」
「そこから出たらいけないんだよ」
「サメがいるのか」
「そう」
「なんか〜最高ね」

「ええ」
その夜のごはんもおいしかった。沖縄料理を食べた。
ベッドも楽しかった。
８月11日だった。
「わたしも８時に乗るから」
「仕事だから」
「わかった」
「今晩は北千住ね」
「ええ」
「ごはんつくって待ってるから」
「ええ」
「楽しかった〜ありがとう」
「私も楽しかった」
湯花邪無は、ジャカルタ空港からスパイスｙｕｈａｎａまで、ライブテレビを見た。ニューヨークだ。
「次の日曜のカサブランカのイベントに参加します」
ニューヨークの空港で、華美美鈴が囲まれて記者に話していた。
まだ１週間も先のことである。
華美美鈴は、常に神出鬼没の感がある。それなのに、１週間後の予定を話すことはフツウではない。
「おはよう」
「おはようございます」
スパイスｙｕｈａｎａは３６５日営業をしている。通信販売が主力である。休まない。みんなでシェアーしてシフトで働いている。販売目標などないので、ガリガリしてはいない。どちらかというと、スパイス工房が追われている。生産を増やすようにジンに言われる。湯花邪無は何も言わない。
「ジンはホーチミンに行きました」
「やるんですか？」
「街を見て来るそうです」
「わかりました」
「コーヒー？」

「お願いします」
最近ジンは、あっちこっち出歩いている。ホーチミンから注文が多いのだ。
みんな働き者だ。おもしろいから働いている。
湯花邪無は、ジャマをしないように応援している。
誰もいなくなったジンの部屋で、湯花邪無は、ニューヨークのライブテレビを見ていた。
アメリカの旅行会社と住宅建設の会社がコラボで、火星に別荘を建設している映像を流していた。
別荘といっても、ドームがあって、その中に14の部屋があるだけだ。マンションのようである。
外は見れるのだが外に出ることはできない。
研究用の施設はあったのだが、商品としての家屋がはじめて火星に現れたのだ。
これが普及するかどうかわからない。多分、ホテルは出来るのではないかと言われている。
湯花邪無には手が出ない。あまりにも高価なのだ。この火星の住宅の電源はなんなのか興味がある。火星でもアースバッテリーが使えるのだろうか。
「ミスタージャムお客さんだけど」
「どなたですか？」
「日本のしょうしゃの人です」
「ジンに会ってもらってください」
「わかりました」
日本の会社は、湯花邪無が日本人であることを調べて、協力するように要求してくる。
そこが湯花邪無にはわからない。
湯花邪無は、凄い技を持っていれば、日本人であろうがインドネシア人であろうが、どっちでもいいのだ。インドネシア人も日本でインドネシア人に協力を要求するのだろうか。
よくわからない。
「ミスタージャム、しょうしゃの人が上がりました」
慌てたリニの大きな声が聞こえた。

２人の大男が入ってきた。
「あなたのためにならない」
「静かにさせてくれ」
この２人は、華美美鈴を羽田で追いかけた２人だと思った。
とうとうここまでやってきたのだ。
「湯花邪無だが何か用事ですか？」
「リニ平気だ」
「お茶はいらない」
「わかった」
大きな男２人は、スーツを着ていた。
「私のためにならないっていうのはなんだ」
「この写真でわかる」
「つくばの監視カメラだ」
やっぱりだった。
華美美鈴を助けた時に撮影されたものだ。
「湯花邪無のアースカーだ」
「これは私のアースカーだ」
「華美美鈴を日本に呼んでもらいたい」
「私はつくばにはいなかった」
「あなたたちは何者なんだ」
「知らなくてもいい」
「脅迫罪で訴える」
「ここに入る時の監視カメラがある」
「あなた達が誰かわかる」
「オレたちは雑魚だがあなたには会社の社長という地位がある」
「傷つくのは湯花邪無だ」
「華美美鈴など知らない」
「この写真はどうだ」
つくばの戦車の会社の廊下である。
「作業服がよく似合う」
「ここから華美美鈴に電話してくれ」

「華美美鈴など知らない」
「北千住のマンションにかくまってたのか」
「華美美鈴など知らない」
「こっちにもメンツがある」
湯花邪無は警察に電話した。
「スパイスｙｕｈａｎａだけど」
「２人の男にわけのわからないことで脅されている」
「来て欲しい」
「本社だ」
２人の男は唖然としていた。
こういうシナリオではなかったのだろう。
やっと華美美鈴の逃走を助けた男を特定したのだ。

逮捕するのか

湯花邪無は２人の後を追った。
「リニ警察が来るからよろしくたのむ」
「どうすればいいのだ」
「間違いだった」
「ゴメンなさいすればいいのか」
「そうだ」
不思議なことに、２人はそのまま空港に向かった。
湯花邪無にしてみれば、常に華美美鈴を拉致している男をやっと見つけたのだ。脅迫されてはいるが、チャンスでもある。
「もしもし」
「ミスターユハナはじめるけど」
「今日は申し訳ない休みだ」
「それはダメだ」
「それでもいけないから電話した」
「急いでるから切る」

「８月15日を忘れるな」
「わかっている」
９時40分の羽田行きに乗りそうだった。
湯花邪無は、ギリギリに搭乗した。しかもファーストクラスに乗った。
２人が搭乗するのを見ていた。
２人が誰か知りたいのだ。
羽田で真っ先に降りて２人を見ていた。２人の男は、湯花邪無が追っていることなど思いも及ばないと思った。
２人が入っていったのは、警察庁だった。予想外だった。
華美美鈴を拉致したのは日本の警察だったのか。それとも、あの２人の拉致する男は別人なのだろうか。
湯花邪無の頭は混乱した。
「お願いがあります」
「今入った２人の方に話があります」
「私は湯花邪無と申します」
「私のパスポートです」
「９時に２人の方がジャカルタの私のオフィスに来たのです」
「おかしなことを言ったので後をつけてきました」
「もう１度２人の人と話したいのですが」
湯花邪無は30分待った。
「どうぞ」
「私はすごく混乱している」
「私が知っているところによると、華美美鈴は何度も羽田で拉致されている」
「これは犯罪だ」
「私たち２人はその拉致犯を追っている」
「それがなぜ私なのだ」
「情報があった」
「意味がわからない」
「つくばの戦車の会社から拉致した」
「つくばの戦車の会社が拉致したのではないのか」

「どうして華美美鈴を日本に呼べと言ったのだ」
「誰が拉致の犯人か知っているからだ」
「華美美鈴を日本に呼んだらまた戦車の会社に拉致される」
「なぜ私が呼んだら華美美鈴は日本に来るのか」
「湯花邪無に弱みを握られている」
「私は華美美鈴に会ったことがない」
「あなたたちに拉致犯を探すように頼んだのは誰ですか」
「それは話せない」
「私は、あなたたち２人が、羽田で華美美鈴を拉致しようとした犯人だと思った」
「オレたちは鍛えている」
「華美美鈴に走り負けない」
「あなたたちはすごい勘違いをしている」
「戦車の会社に行ったのか」
「行った時にこの写真をもらった」
「ここから華美美鈴を拉致した犯人だと言われた」
「車の写真どうしたのだ」
「警察は湯花邪無を特定しようと思ったら簡単だ」
「あなたたちは、日本で華美美鈴が拉致された犯人を逮捕すればそれでいいのか」
「逮捕できない」
「事件になっていない」
「私は巻き込まれて心外だ」
「オレたちもわからなかったことがあった」
「湯花邪無が犯人だと確信したことか」
「華美美鈴が１番よく知っているのだろうが」
「湯花邪無が華美美鈴に連絡しないのだったらこっちから連絡する」
「どうするのか」
「拉致の犯人は湯花邪無か」
「その結果を知らせてくれないか」
「名刺が欲しい」

「有村聡だ」
「真野裕也だ」

スパイス湯花誕生会

「リニ、今東京にいます」
「料理学校はどうしたのだ」
「休んだ」
「じゃ〜新宿にいるのか」
「そうだ」
「ジンが帰ったら伝えておく」
「お願いします」
湯花邪無は疲れた。
２人を追ってきて良かったと思った。あの２人が羽田で華美美鈴を拉致しようとしたオトコだと思い込んでいた。何者か知りたくて追ってきた。
ところが警察の人間だった。
「あなたのためにならない」と言われた時には身が縮んだ。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
水野まさみもお店にいた。
すごく混雑していた。
「上にいます」
「何かありますか？」
「順調です」
「わかりました」
牧野由香がやってきた。
「コーヒ？」
「それもあるけど」
「ペコペコですか？」
「うん」

「みんなごはん終わったところですけど聞いてきます」
湯花邪無は、ニューヨークのライブテレビを見た。アースバッテリーのニュースは何もなかった。
「お昼の残りがあるけど食べますか？」
「お願いします」
牧野由香が、豚肉とほうれん草の炒めものを持ってきた。
「ごはんないからコンビニおにぎり」
「どうもありがとう」
「冷たいお茶にしたから」
「ありがとう」
「下にいるから何かあったら呼んでください」
「お客さんが多いのですか？」
「そうです」
「今日は誕生会ですがわかってますか？」
「水野まさみと一緒に行きます」
「誰が手配しているのですか？」
「わたし」
「ああ〜楽しそうだ」
「どこも行かないで」
「わかった」
湯花邪無は、有村聡と真野裕也をはじめて知った。華美美鈴を何度も拉致しようとした２人は誰なのだろう。明らかに戦車の会社の人間か戦車の会社に雇われている。
いまのままでは、いつか、有村聡と真野裕也のように、「あなたのためにならない」と言いそうだ。そういう意味では、湯花邪無には弱みがある。スパイス湯花の社員たちもスパイスｙｕｈａｎａの社員も、湯花邪無がいなくなったら路頭に迷う。毎日のことに湯花邪無は必要ないのだが、存在に意味がある。
有村聡と真野裕也には知られたが、有村聡と真野裕也はスパイス湯花を攻めることなどない。しかし、華美美鈴を拉致している２人に知られたら、何をするかわからない。

あまり時間がない気がしてくる。
「そろそろ出かけるけど」
「わかった」
「私は今日は何かやるのか」
「楽しめばいい」
「あなたはそこにいてくれればいい」
「わかった」
ハワイアンのダンスがあって、ハワイの料理がたくさんである。
みんなでハワイの歌を歌ってハワイのダンスを踊った。
そして８月の誕生の社員にプレゼントが用意されていた。
プレゼントが何であるのか、湯花邪無は知らない。水野まさみと牧野由香が決めている。
「ただいま」
「おかえり〜」
「今日はおいしいもの食べたんでしょ？」
「話しましたっけ？」
「カレンダーに書いてある」
「ああ」
「お酒は？」
「運転してもらって帰りました」
「誰に？」
「代行さん」
「賢い」
「なにかあった？」
湯花邪無は、有村聡と真野裕也のことを沢風ゆりに話さなかった。話さないつもりだったわけでもない。「なにかあった？」と聞かれた時に、瞬間的に、話さないと決めた気がする。
有村聡と真野裕也は、北千住のマンションも知っている。当然のことながら、ここのマンションのエレベーターの監視カメラも見ているはずである。
華美美鈴が、このエレベーターに乗っているのも知っている。
湯花邪無は、「華美美鈴など知らない」と言っているのだが、何から何まで

承知しているに違いない。
ただ助かっているのは、華美美鈴の拉致犯を特定したいだけなのだ。
有村聡と真野裕也は。拉致犯が湯花邪無と思っていた。裏をとりにジャカルタまで来た。
「明日新宿なの？」
「ええ」
「13日ジャカルタの誕生会だから？」
「ええ
「明日の晩もここなのね」
「ええ」
「明日わたし出張だからいないから」
「何か買って帰ります」
「お願い」
沢風ゆりは、その夜も、湯花邪無のベッドに潜り込んだ。
「おはよう」
「早いのか」
「出張だから」
「気をつけて」
湯花邪無は、どこへ行くのかも聞かない。
「今晩いないんだからね？」
「わかってます」
「お先に」
「気をつけて」
何かしら会話が少ない気がしている。湯花邪無が、有村聡と真野裕也のことを話さないせいかもしれない。
「おはよう」
「おはようございます」
「昨日はありがとうございました」
こんなあいさつをされたのははじめてだった。
「水野まさみは長野に行きました」
「なにかあったのですか？」

「会社できるから」
「わかりました」
「牧野由香は昨日のホテルに行きました」
「昨日はありがとうございました」
ジニがコーヒーを煎れてくれた。
「何かありますか？」
「順調だと聞いている」
有村聡と真野裕也は、新宿には来なかったようだ。
10時だった。
「もしもし」
「有村聡です」
「おはようございます」
「湯花邪無が拉致の犯人ではないかと思って接触したら華美美鈴のことは何も知らないと言っているが本当かと聞いた」
「華美美鈴と話したのか」
「ホームページにメールした」
「湯花邪無の名前を出したからだと思うが返事がきた」
「わたしを拉致した男は湯花邪無ではない」
「それだけだった」
「北千住のマンションは拉致してかくまった場所ではなくて助け出してかくまった場所だと認識した」
「これは事件ではないので情報として伝える」
「承知した」
「本当の拉致犯人を特定したら知らせて欲しい」
「知らせるかどうかわからないが拉致犯は探す」
「事件ではないので逮捕はしない」
「わかった」
湯花邪無の、「華美美鈴など知らない」というウソは、見抜かれている。
湯花邪無が、何を怖がっているのか知っている。華美美鈴が何を大事にしているかもわかったのだと思った。湯花邪無と沢風ゆりに迷惑をかけたくないのだ。

香風里先の『人と集団を滅ぼすもの』の続きを読んだ。
何かが書いてあるはずである。
はっきりわからないが、アースバッテリーは、社会の見えざる悪魔に挑戦しているかのようだと思った。
見えざる悪魔は、人や集団を滅ぼすためだけに存在しているらしい。理由は、優秀な頭脳が優秀過ぎるからだ。ほっておいたら、優秀な頭脳は、自らを滅ぼしてしまう。現に、地球を爆破できるほどの爆弾が地下に集められているとはいえ、存在しているのだ。
パンドラの箱にみんなで収めたに過ぎない。いつ何時、またもや誰かがパンドラの箱を開けないとは限らない。
遺伝子技術でも何度も危うい局面があった。
20年前に、殺人犯が、自分のコピーを20人もつくってしまったことなどは、防ぎようがなかった。脅されてしまえば、人は弱い。ただ、技術だけは進んでしまう。
遺伝子技術の方は、パンドラの箱にも入っていない。今後１００年でも、思いもよらない出来事が起こってしまう可能性がある。
先里風香のアースバッテリーも、同じような問題を含んでいる。
アースバッテリーは、化石燃料を燃やしてエネルギーを得る時代に、地球に良くないが仕方がない時代に別れを告げようとしている。
人類のためには、地球のためには、これ以上のものはない。
見えざる悪魔が、従来の、何かを犠牲にしてエネルギーを得続けて、そのうち、人と集団が滅んでしまうシナリオを選んでいたとすれば、アースバッテリーは、見えざる悪魔への挑戦者である。
しかし、重要なことがある。
もしアースバッテリーのパワーアップ技術が完成したら、アースバッテリーは、またしても、人と集団を滅ぼすもの、地球を滅ぼすかもしれないモノになってしまう可能性があるのだ。
先里風香は、挑戦者をやっているのだろう。自分でよく認識している。挑戦者は滅んでしまうのだ。生き残れない。見えざる悪魔に殺される。
アースバッテリーが、人や地球にグッドなものであっても、既得権者が、世界には、たくさんいるのだ。

先里風香が姿を現さないことが理解できる。
華美美鈴も、もう覚悟はできているのだろう。
見えざる悪魔は、挑戦者が怖いから、挑戦者を襲うのだが、挑戦者の協力者も襲うのだ。
先里風香と華美美鈴はよく承知している。
湯花邪無を協力者として見えざる悪魔に知られたくないのだ。
しかし、次第に、見えざる悪魔が迫っていると、湯花邪無は思ってしまう。
湯花邪無は、スパイス湯花とスパイスｙｕｈａｎａを巻き込みたくない。これだけは、なんとしても防がないといけない。
「ミスタージャム、お昼を用意しているがいいのか」
「ありがとう」
「ナスと鶏のカレー煮です」
「わかりました」
「もう12時です」
「わかりました」
夕方だった。
湯花邪無は、北千住のスーパーマーケットにいた。せっかく１人だから自分でごはんをつくろうと思った。
若鶏のサテをやってみようと思った。スパイスは44種揃っている。
ナシゴレもつくってみようと思った。
湯花邪無の夜は、ジンか沢風ゆりが常にいる。１人でいることはない。最近ずっとそうだ。
たまに１人でいると、落ち着けるというか寂しいというか、不思議な感覚である。
料理も、まあまあ食べられる。

ジャカルタの誕生会

８月13日だった。
湯花邪無は、いつものように８時発のジャカルタ行きに乗った。

「おはよう」
「おはようございます」
何事もない水曜日だ。
「今日はジャカルタの誕生会だから新宿へはいけない」
「承知している」
水野まさみにはメールをした。
「しばらく」
ジンがしばらくと言うほど会ってないのだろうか。
「冷たいお茶を用意した」
「ありがとう」
「今日はジャカルタの誕生会だから」
「わかっています」
「出かけないのか」
「料理学校だけど」
「出かける」
湯花邪無は、先里風香のアースバッテリーをめぐるもろもろの出来事を書き出しておこうと思った。
まず１番目は、湯花邪無が巻き込まれていることだ。アースバッテリーのパワーアップである。感覚的に、アースバッテリーをパワーアップできれば、優位な武器を開発できる。
多分、世界中で開発がなされているのだろうが、開発が成功しても、公表はされないだろう。
自分で開発できないならば、そもそものアースバッテリーの開発者である先里風香に開発してもらおうと画策する人も現れる。
つくばの戦車の会社は、先里風香が日本人であることから、協力をすることが当然であるという態度で迫ったと思われる。
うまく協力を得ることができないために、先里風香の代理人である華美美鈴を拉致して、先里風香に協力を迫ろうとした。
このような、アースバッテリーのパワーアップについては、多くの人が画策していると考えられる。
先里風香と華美美鈴には、アース戦車だけではなくて、アースジェットなど

の軍事的な用途や、工場をまるごと動かせるほどのアースバッテリーの開発などへの要請がなされていると考えるのが妥当だろう。
断っているのだろうが、断ると、華美美鈴の拉致のような不正な手段に出てしまう。
アースバッテリーをめぐるもろもろの出来事の２番目は、アースバッテリーは、化石燃料や原子力などのエネルギーのように、人や地球に何も害をもたらさないことに関することだ。
アースバッテリーは、アースカーでも80キロしか速度が出ないほどのパワーである。とても羽田ージャカルタを50分で飛んでしまうようなパワーはない。
しかし、日に日に、世界は、アースバッテリーへの道を進んでいる。
それだけでも、先里風香と華美美鈴は、危険である。
現に。湯花邪無のスパイス工房は、９月１日に、完全アースバッテリー化になってしまう。
電力の会社から電気を買わないのだ。
あまりにも敵が多い。敵とは、先里風香による見えざる悪魔のことだ。
華美美鈴は、アース戦車だけでも、とんでもない出来事になっているのだ。
もっと多くの危険な出来事が起こっているのだろうと想像できる。
「ミスターユハナ明後日だけど」
「空けてある」
会う度にミナは確認をする。
みんなの前であろうと２人の時であろうとおかまいなしである。
みんな苦笑するしかない。
「今日はサンバルをつくります」
「ここにレシピがあります」
「買い物をしてきてください」
サンバルは調味ソースである。
唐辛子や塩やショウガなど10種類くらいの材料を粉々にして混ぜてソースにする。
野菜炒めでも何でも、インドネシア料理に使える。
「臼はあるのか」

「今は便利なものがある」
「ミキサーを使うのか」
「ミキサーを使ったらジュースになる」
「なんだ」
「じゃー今日はミスターユハナに買い物をお願いします」
「臼だけど」
「便利なものを用意しておきます」
「オレは仕事でつくらされてるからやってもいい」
夜のレストランに勤めている若いオトコが言った。
「買い物は私がやるからどうやって混ぜるのか教えて欲しい」
「わかった」
湯花邪無は、スマホで計算して、みんなからお金を集めた。
「便利な機械が出払っているから、みなさん包丁で叩いてください」
「わたしがやるから見ていてください」
「ミスターユハナわたしの材料をください」
常に、ミナの分を買っている。９人分買っているのだ。
ミナは、唐辛子を包丁で叩いて小さくしてボウルに入れた。適当に叩いているように見えた。トマトやショウガも、カットして叩いて小さくした。
「見てないでやってください」
「塩を忘れないように」
レストランで夜働いている５人は、手馴れたものだったが、３人はけっこうタイヘンだった。
「味を確かめるから目玉焼きをつくってください」
湯花邪無は、日本で目玉焼きにソースか醬油をかけて食べるのと似ていると思った。
「みんさん味が違います」
「ミスターユハナはどうでしたか？」
「ターメリックを入れてカレー風味にしてもいいかもしれない」
「ミスターユハナはどうしてターメリックなど知っているのか」
「最近勉強している」
「家に帰って自分で試してください」

湯花邪無はまずいと思った。

ミナと一緒にしゃべらない方がいいと思った。

「ただいま〜」

「おかえりなさい」

湯花邪無は、ジンの部屋に急いだ。

「おかえりなさい」

「これをつくったんだけど」

「サンバルね」

「味をみてくれないか」

多分、ジンは、厨房に器を取りに行った。

料理学校からは、ビニールバックに入れて帰っている。

「なかなかの味をしている」

「ジンはこれをつくっているのか」

「冷蔵庫に入っている」

「これがないと料理がメンドーだ」

「お昼だからこれを使って食べてみればいい」

「今日のごはんはなんだ」

「白ごはんに野菜炒め」

「白ごはんをサンバルで炒めると味がわかる」

「やってあげる」

「自分でやってみたい」

「どうぞ」

リビングに行くと、みんな食事をしていた。厨房は空いていた。

「ミスタージャムどうしたのだ」

「料理学校でサンバルを教わった」

「白いごはんを炒めたい」

「自分でやりたい」

「フライパンはそこにある」

「小さいのはないのか」

「下の棚にある」

「油はどうするのだ」

「油はいらない」
「フライパンを温めてサンバルを入れてごはんを入れて炒める」
「わかった」
ジンは、向こうでお昼を食べていた。
みんなミスタージャムのこんな姿を見たことがない。何がはじまったのか興味津々である。
湯花邪無は、こんな味がするのかと思った。いつもジンの料理で食べているはずなのだが、自分でここまでやると、新たな驚きがある。
「ジン、ちょっと食べてみてくれ」
「ガスを消してきたのか」
「フライパンも洗ってきた」
「スパイスｙｕｈａｎａもアースバッテリーにしないといけない」
「おいしい」
湯花邪無もサンバル炒めごはんを食べてみた。意外とおいしかった。
「ミスタージャム、そろそろ行くけど」
ジャカルタのホテルである。
ジンが手配している。
「リニも手伝いに行っている」
みんなでバスで行くから乗ってくれ。
湯花邪無は、ラナンに促されてバスに向かった。アルコールは出ないのだが、また仕事の場所に返すのがベターだと湯花邪無は考えているからだ。
おすしと日本料理刺身とマグロの解体ショーである。
今回からｙｕｈａｎａの森のみんなも誕生会に加わった。
「ガダラこんばんわ〜」
「ステファノこんばんわ〜」
「招いていただいてありがとう」
「今日はゆっくりしておいしいものを食べましょう」
まだ16時30分である。
まぐろの解体ショーにはみんな驚いた。
マグロは、一時は個体数が少なくなって、絶滅危惧種に指定されたが、繁殖方法が確立されて、フツウに食べられるようになった。

鯨はずっと個体数が守られている。食べることはもう難しい。
うなぎは、人工の孵化場でしか発見することができなくなっている。
ちなみに、ライオンや豹なども１００年前の個体数を維持している。やはり、肉食系の欧米の人の草食化が大きい。アフリカの草食化も大きい。
１００年前の肉食中心の社会であると、人口が１００億に達した現在では、人間は、他の生き物の個体数を、極端に減らしたのではないかと言われている。
「ただいま〜」
ジンはなかなか帰ってこなかった。
「後始末がタイヘン」
「おつかれさま」
「ごはん食べられる？」
「今日のマグロの残りをいただいてきたから」
「マグロのサテにする」
「おいしそうだ」
「明日もジャカルタ？」
「ええ」
「明日もマグロのサテだけど」
「わかりました」
「みんな喜んでた」
ジンはうれしそうに洗濯をはじめた。
明日も湯花邪無がいるからだ。
８月14日だった。
湯花邪無は、アースカーで、カサブランカのライブテレビを見ていた。
誰にも話してないが、17日の日曜日に、カサブランカに行く予定なのだ。カサブランカには、ジャカルタ、東京に続く３番目のスパイス湯花をつくる予定なのだ。
ジンは、湯花邪無がカサブランカに日曜に行っているのを知っている。
しかし、17日にカサブランカに行くことをジンに話していない。仕事ではない。プライベートなのだ。
どうしてプライベートにしているか、自分にもよくわからない。

明らかに華美美鈴が17日にカサブランカにいるからだ。１週間も前に華美美鈴が湯花邪無に伝えたと思っている。表で伝えた。隠密行動をする華美美鈴が１週間も前にカサブランカに行くとテレビの前で言ったからだ。理由がわからない。
湯花邪無がカサブランカに３番目のお店を計画していることなど話したことがない。華美美鈴とは、ほとんど何も話をしたことがない。つくばの戦車の会社から助け出した時も、アースカーの中で、華美美鈴はずっと眠っていた。
助け出した瞬間に華美美鈴は、湯花邪無に唇を求めてきた。
それっきりである。
華美美鈴は、カサブランカには、まだいないようだった。
カサブランカのイベントを調べてみた。
モロッコの人口は１億人に達している。日本の８４００万人よりも多い。
ＦＡＲ通りのホテルでアースライティングの推進イベントが行われる。人口が１億人もいるとエネルギーが不足する。原油価格の高騰が経済の足を引っ張っている。幸いなことに、モロッコ料理は豊富な海産物と野菜が中心であり、急速な人口増加を自国の食材で補っている。エネルギーだけが自国ではどうにも出来ない状態なのだ。モロッコの先行きを不安視する専門家も多い。
５基ある原発を停止できないでいる。
モロッコにとってのアースバッテリーは救世主のようでもある。
モロッコ国内でもアースバッテリーに抵抗する人々も多くいる。特に安全性を突いている。しかし、インドや中国のような大きなしがらみはない。
カサブランカでは、華美美鈴は歓迎される。
「おはよう」
「おはようございます」
「昨日はありがとうございました」
湯花邪無は、なんと返事をしたらいいのかわからない。
軽く右手を少し挙げることしかできない。
「ミスタージャムコーヒーがいいか」
「そうだ」

リニがコーヒーを煎れてくれた。
「ジンはクアラルンプールに行った」
「何かあったのですか？」
「倉庫が足りなくなって大きな倉庫に変わるから見に行った」
「わかった」
ジンは仕事のことはほとんど湯花邪無に話さない。今朝も何も話さなかった。
「リニ何かありますか？」
「順調だ」
「ステファノのところに行ってくる」
「お昼はどこで食べるのか」
「ｙｕｈａｎａの森になると思う」
湯花邪無はステファノと話があった。モロッコのｙｕｈａｎａの森のことだ。モロッコで３番目のお店を開くことは、モロッコでスパイスの生産もしたいのだ。
「ラバトの北のオリーブ畑の近くだと思う」
「ステファノ、誰か連れて行ってくれないか」
「それだったらモロッコ人のアイチャがいる」
「どうしてモロッコ人がいるのだ」
「モロッコ料理もスパイスをたくさん使う」
「インドネシアで修行するのがよい」
「アイチャに会わせてくれないか」
「森にいるから一緒に行こう」
「いつからここにいるのか」
「１年になる」
「修行はどうなのか」
「センスはいい」
「実家がオリーブ畑をやっている」
「どうしてスパイスなんだ」
「本人が興味がある」
湯花邪無は、アイチャにはじめて会った気がした。ジャカルタの女性もカサ

ブランカの女性も、共通して、シャイなのだ。ジャカルタの女性は経済成長が著しいインドネシアを引っ張っているのだが、表向きは控え目なのだ。
アイチャと会ってはいるのだが、自分であいさつに来るわけでもないので、湯花邪無にはわからない。
ジンに言われる。
「もっとみんなの中に入らないといけない」
湯花邪無は、ジンが実質社長だから、ジャマをしないようにしている。
「アイチャ言葉は大丈夫ですか？」
「英語が通じるからわからなかったら英語にする」
「カサブランカのスパイスはどうなんですか？」
「スパイス専門店がたくさんある」
「今度ステファノと一緒にスパイスを育てることができるか見に行ってくれますか？」
「うれしい」

ミナとの食事

８月15日だった。
「料理学校のパーティーがあるから新宿には行けない」
水野まさみにメールをしておいた。
夜料理学校の先生のミナと食事をすることになっている。
「先に出て」
「わたし遅れて行く」
「今晩はどこなの？」
「ここです」
「うれしい」
「日曜は？」
「東京です」
湯花邪無は、ジンにウソをついたことがない。どうしてウソをついているのか、自分にもわからない。

日曜は、湯花邪無はカサブランカに行くのだ。
「おはよう」
「おはようございます」
リニがやってきた。
「おはようございます」
「ジンはまだ来ていません」
「料理学校ですか？」
「すぐに行きますが何かありますか？」
「順調です」
「お茶は？」
「すぐ出かけます」
リニは、アースカーまで湯花邪無を送ってきた。
「ミスターユハナ楽しみにしていました」
「忘れていないでしょ？」
「19時にここに来ます」
「ミスターユハナのアースカーで来て」
「わかりました」
ミナは、８人の前で、まずその話をする。
「今日はピサゴレンです」
「レシピを配りますから買い物をしてきてください」
「今日はわたしが買い物します」
レストランの厨房にいる若い女性が手を挙げた。
「ピサゴレンってなんですか？」
「デザート」
「バナナのデザート」
「揚げるのか」
「そうだ」
「バナナはそのまま食べた方がおいしいのではないか」
「そういう意見もある」
湯花邪無は、少しづつ慣れてきている。
「ただいま〜」

「おかえりなさい」
湯花邪無は、ジンの部屋に走った。
「おかえりなさい」
「ジンこれを食べてみてくれ」
「なにをやったの？」
「ピサゴレン」
「ああ」
ジンは、ビニール袋のピサゴレンを食べてみた。
「ああ〜まだ温かい」
「グッドね」
湯花邪無は満足だった。
ピサゴレンをおいしくつくったとしても料理上手だとは誰も言わない。誰でもつくれる。しかし、湯花邪無には、すごいことなのだ。
「今日はミナとレストランで食事をする」
「ミナって？」
「料理学校の先生だ」
「なんで？」
「インドネシア料理を教えてくれている」
「わたしじゃダメなの？」
「先生だ」
「アプローチされているの？」
「そうだ」
「早く帰ってきて」
「わかってる」
「なんでもない」
湯花邪無は、何でもジンには話してきた。しかし、日曜のカサブランカだけは話さないでいる。湯花邪無にもよくわからない。
19時になって湯花邪無は、アースカーで料理学校に向かった。
「ホテル街のモニュメントに行って」
昔からジャカルタのセンターになっている。
「ミスタージャムは就職できたのか」

「まだだ」
「ジャカルタで何をしているんだ」
「主夫業の修行をしている」
「パートナーもいないのに」
「そうだ」
「生活費はどうしてるんだ」
「貯金が少しある」
「このアースカーはいい車だけど」
「友達の車だ」
「オンナがたくさんいそうだけど」
「いない」
「右のホテルのレストランに予約してある」
「わかった」
テーブルにたくさんの料理が並んで、コースで次から次に出てくる。
ミナは、そのすべての料理について解説をした。
「ドレスが素敵だ」
「聞いてないのか」
「聞いている」
「ミスターユハナは何者なんだ」
「こんな１流のレストランに来てもサマになっている」
「テーブルマナーもいい」
「料理は何もできない」
「ミナちょっと外してもいいか」
「トイレなのか」
「そうだ」
「どうぞ」
インドネシア料理は食べきれるものではない。
「ミナで予約してあるテーブルだけど」
「会計をお願いしたい」
湯花邪無は、華美美鈴の事件以来、常に現金を持っている。
現金は足がつかなくていい。

それからもミナの解説は続いた。

「ミナもう９時だけど」

「まだ早い」

「明日もあるから」

「また来る事を約束するんだったら帰る」

「約束する」

ミナは高校生のように立ち上がった。

そして会計に向かった。

「ミスターユハナこれななんだ」

「怒らないでくれ」

「私は教わっている身だ」

「私がお礼するのがあたりまえだ」

「仕事もしてない人なのに」

「貯金が少々ある」

ミナは怒って帰りそうだった。

「いろいろ教えてくれてありがとう」

「送っていく」

「ミスタユハナは何者なんだ」

「主夫の修行をしている」

湯花邪無は、タナアバンのチグリ川沿いのマンションに、ミナを送った。

「お茶でもどうだ」

「遅いから帰る」

「またおいしい料理を教えてくれ」

「わかった」

湯花邪無は、タベットのマンションに向かった。

「ただいま」

「早い」

湯花邪無は、朝が早い。北千住からカレット駅まで９時に出勤する。羽田ージャカルタが50分としても、朝が早くないと難しい。夜は、10時までにはマンションに帰るようにしている。

ジンが「早い」と言ったのは、おかしい。

「送って行ったの？」
「そうだ」
「ミナさんね」
「覚えないでいい」
「気になるからスマホで調べた」
「良くない」
「ごはんは？」
「食べられないよね」
「シャワーしてくる」
「わたし１人で食べる」
「シャワーしてきて」
「わかった」
ジンは、その夜も湯花邪無のベッドに潜り込んできた。
「どこでごはん食べたのか」
「ホテルのレストラン」
「ホテルは予約してなかったのか」
「ない」
「そのままジンは襲ってきた」

カサブランカ

８月16日である。土曜日である。
湯花邪無は、スパイスｙｕｈａｎａまでの車の中で、カサブランカのライブテレビを見た。
華美美鈴がやってくるはずなのだが、ニュースにはなっていなかった。
もしかしたらキャンセルになったかもしれない。湯花邪無にはわからない。
とにかく、日曜の朝早くジャカルタを出てカサブランカに行く予定である。
「おはよう」
「おはようございます」
ラナンがやってきた。

「ミスタージャム、19日だけど」
「飛行機で練習している」
「レットイットビーとイエスタデイだ」
「１５０年も前の音楽だ」
「ジャカルタの若者に流行っている」
「そうか」
「ちょっと歌ってみてくれ」
「恥ずかしい」
「ホントに歌えるのか」
「歌ってみないとわからない」
「だから聴いてあげるから」
「飛行機で練習する」
「途中でストップしたら恥ずかしい」
「誰が恥ずかしいのだ」
「わたし」
「なぜだ」
「わたしがミスタージャムの歌を聴きたいからって集めた」
「ラナンに恥をかかせないように練習する」
「コーヒーでいいのか」
「お願いします」
「リニはどうしたのだ」
「ジンはまだです」
「リニはお休みです」
湯花邪無は、アイチャに会いに行こうと思った。明日内緒でカサブランカに行くからだ。
ジンが来てからにしようと思った。
カサブランカのライブテレビを見た。
アースバッテリーのニュースはなかった。明日のアースライティングのイベントの準備は出来ているのだろうか。
カサブランカアースライティングでスマホを検索してみた。
イベントの内容が出ている。華美美鈴も参加している。参加しているという

か華美美鈴がいるからイベントになる。
10時からである。ＦＡＲ通りの街灯がすべてアースライティングになる。その点灯式でもある。
「おはよう」
「おはよう」
「わたしプノンペンに行ってくる」
「プノンペンもはじめるのですか？」
「街を見てくる」
「わかりました」
「なにかありますか？」
「順調」
「わかりました」
「ミスタージャムはどこでお昼を食べるのか」
「ここだ」
「今日は外出しないのか」
「お昼からｙｕｈａｎａの森に行く」
「わかった」
湯花邪無は、９月１日の１回目の講義の原稿を仕上げないといけないと思っていた。
湯花邪無は、レッドペッパーが興味があって話しやすいのだが、インドネシアでは、スパイスの王様であるコショウの生産が多い。昔は、ジャカルタではコショウしかなかった。レッドペッパーが伝わってきて、インドネシアでも生産量が多くなっているのだが、圧倒的に、コショウの方が多い。
最初の講義として、原産国が中南米のレッドペッパーを取り上げることはどんなものかと思った。
スパイスの歴史を大雑把に取り上げても、学生にプラスにはならない。自分で本を読めばよい。ネット情報でもたくさんある
１回目の講義をレッドペッパーにしようと思っていたのだが、コショウにすることにした。
コショウの原産国はインドネシアと言ってもよい。現在でも生産量が１番である。

インドネシア料理もレッドペッパーを使う料理は多くはない。
コショウが樹木からコショウになるまでを克明に写真にすることにした。ｙｕｈａｎａの森ですべて写真ができる。
湯花邪無は、おおまかなシナリオを書いて、リビングに向かった。
「ミーゴレン風焼きそばだけど」
「おいしそうだ」
お昼をスパイスｙｕｈａｎａで食べて、すぐにｙｕｈａｎａの森に向かった。
「ステファノにお願いがあるんだけど」
「なんでしょうか」
「今日半日アイチャを助手に貸してくれないか」
「何をするんです？」
「９月１日から大学の講義がはじまるんだけど」
「１回目にコショウを取り上げようと思う」
「写真でコショウの木から実から商品まで解説したいと思っているんだけど」
「もちろんコショウの歴史もだしコショウの成分分析もやる」
「コショウの科学についてはもうできてるから」
「学生たちに具体的にコショウの木からスパイスのコショウになるかを今日写真に撮りたい」
「カメラを持ってきた」
「アイチャはどうぞ」
「その写真だったら私もたくさん持ってるから使ってくれ」
アイチャがやってきた。
「ステファノから聞いたのか」
「何でも言ってくれ」
「ミスタージャムのスライドをわたしも欲しい」
「９月１日に会社のパブリックホルダに公開するからダウンロードしてくれ」
「ありがとう」
「まずコショウの木と実の写真を探そう」

「撮ってきた方が早いけど」

湯花邪無は、アイチャに言われて畑に向かった。

「アイチャはカサブランカの人ではないのか」

「ラバトの人だ」

「カサブランカには行ったことがあるのか」

「何度も遊びに行ったことがある」

「ミスタージャムは写真は得意なのか」

「カメラはいいの持っているがセンスはない」

「わたしに撮らせてくれないか」

「得意なのか」

「中学校で入選したことがある」

「そしたら頼む」

17時になった。

「もしもし」

「ジンですか？」

「仕事が終わったからこのまま帰ります」

「何かありますか？」

「順調」

湯花邪無は、９月１日の講義のスライドを、ほぼすべてつくったと思った。１００枚はあるので、これを50枚にしなくてはならない。スライドが多過ぎると、学生が湯花邪無の方を向いてくれない。

「アイチャありがとう」

「アイチャの写真を使った」

「会社の宣伝になりそうなスライドだが、これでいく」

「助けになってうれしい」

「ステファノもありがとう」

ジンよりも湯花邪無の方が早かった。

「ただいま」

「おかえり」

「ルンビアつくるから」

「ちょっと待ってて」

「着替えてくる」
湯花邪無は、スライド１００枚を少なくする作業をしていた。
「なにやってんの？」
「９月１日の大学の講義のスライドをつくっている」
「なにやるの？」
「コショウ」
「見せてもらえる？」
「９月１日に社内のパブリックホルダに公開するから」
「みんな勉強になる」
翌日だった。８月17日だ。
湯花邪無は、７時ジャカルタ発カサブランカ行きに乗った。
「今日は日本なの？」
「そうだ」
「新宿？」
「ちょっと私用がある」
ジンにはウソをついたことがない。疑いもしないジンを見ているとワルイと思う。
どうしてカサブランカと言えないのか不思議である。
９時30分には、カサブランカのホテルの前のイベント会場にいた。点灯式だ。ＦＡＲ通りのすべての街灯がアースライティングになるのだ。
湯花邪無も２メートルあるのだが、カサブランカの街中では目立たない。２メートル20センチくらいの人がザラにいる。
できるだけ前にいたかった。
アメリカ人らしい女性がカメラを抱えて近づいてきた。
「失礼します」
湯花邪無の場所が撮影の絶好の場所のようだ。
カメラマンの腕章をつけたアメリカ人らしい女性は、２台目のカメラを後に出した。
メモのようなものがあった。
「どうぞ」
湯花邪無は、そのメモを受け取った。

１８７９と書かれてあった。
部屋の番号に違いない。
これは罠なのか華美美鈴なのかわからない。
10時になって市長が出てきて、これからのカサブランカのアースバッテリーの普及を約束していた。大画面で大統領のメッセージが流された。これはイベントなのだ。もうアースバッテリーを普及させるしかエネルギーを確保することが難しいのだ。
そして、華美美鈴が現れて、街灯のアースライティングのスイッチを押すのだ。
大観衆は、華美美鈴が目当てである。時代のヒーローなのだ。救世主である。しかし、ここ１００年の既得権者がたくさんいる。常に救世主は危険である。それも大観衆はよくわかっている。
それにもかかわらず、こうして人前に出る華美美鈴を素晴らしいと思っているのだ。
アメリカ人らしいカメラマンらしい女性は、湯花邪無の前にいる。そして、華美美鈴がスイッチを押して、街灯にいっせいに灯がともった。
歓声が上がった。
湯花邪無の後から手が伸びてきた。
前のアメリカ人らしい女性のカメラマンの肩越しだった。
ピストルの銃口が華美美鈴を向いていた。
華美美鈴が気がついた。
湯花邪無は、瞬間に伸びていた手を両手で跳ね上げた。同時に乾いた発射音になった。
ＳＰだろう、華美美鈴の前に並んだ。
湯花邪無は振り向いた。
男が脱兎のように人をかき分けていた。
４人の男が追って抑えてしまった。
華美美鈴の前にいたアメリカ人らしい女性カメラマンが、「ここに急いで」と言った。
湯花邪無が報道に捕まる。警察に捕まるかもしれない。
湯花邪無は、みんながピストルの男に向かっている時に、そっと抜け出た。

多分、どこからか撮影されているだろうから、湯花邪無がピストルの男の腕を押し上げたことは知られてしまうだろう。
撮影された映像が報道に流れるかどうかである。
流れれば、華美美鈴を救った男になってしまうだろう。
今のところ、華美美鈴と湯花邪無の接点を知っているのは、沢風ゆりと真野裕也と有村聡である。
もしこの映像が報道に流れたら、世界中の人が知ってしまうことになる。
湯花邪無が、完全に巻き込まれることになる。表で巻き込まれるのだ。現在のまま、誰にも知られずに巻き込まれていたい。それが湯花邪無の希望である。
15分くらい、観衆にまぎれていた。
そして駐車場からホテルに入った。
まだ外は騒然としていた。スマホでも、ネットでニュースが流れていた。エレベーターで確認した。ただ、拳銃は発射されたのだが、男がミスして外したことになっていた。
18階の79部屋だ。
18階には、警備の男が２人とフロアーの責任者のような男がいた。
「この階には入れません」
湯花邪無は、１８７９のメモを見せた。
フロアーマネージャーのような男は、どこかに電話をした。
「バックを見せてくれ」
「手を挙げて」
身体検査をされた。
「ついてきてくれ」
右に曲がってかなり歩いて、１８７９の部屋になった。
「この男でいいのか」
部屋の前で、フロアーマネージャーのような男が電話で聞いていた。誰と話しているのかわからない。
中からドアが開いた。
華美美鈴が顔を出した。
「どうぞ」

「どうもありがとう」
華美美鈴は、フロアマネージャーのような男にお礼を言った。
「こういうつもりではなかった」
「もう１度逢いたかった」
「とんでもないことになった」
「もし湯花邪無があそこにいなかったらわたしは撃たれていた」
「何度助けられているかわからない」
華美美鈴は、一方的にしゃべっていた。
「どうぞ座ってください」
立派な部屋だった。
少し前に拳銃で撃たれたのだ。その直後に、男を部屋に招き入れる華美美鈴をフロアーマネージャーのような男はわからないだろう。
「来ていただいてありがとう」
「来ると思っていたのか」
「信じていた」
「沢風ゆりが怒る」
「ここにいることは誰も知らない」
「湯花邪無の安全のためには今日カサブランカにいないことにしないとまずい」
「あの表の３人とカメラマンの女性は？」
「みんなわたしが頼んだ」
「今日のようなことが以前にもあってあの４人が助けてくれた」
「羽田やムンバイやプサンや新潟やつくばのことをみんな知っている」
「なぜ日本に４人で来なかったのだ」
「日本だからと思ったわたしが甘かった」
「もう湯花邪無に逢うチャンスがなくなった」
「もうこんなことはしない」
「１週間も前に行く先を明かす事はない」
「湯花邪無を危険にさらすことはしない」
「多分愛している」
「先里風香によると、愛は人が動く押しボタンだ」

「湯花邪無も動いてくれた」

「すごくうれしい」

「もう行って」

「あんまりあなたがながくいるとあの４人がわたしを守れなくなる」

「もう逢えないかもしれないからキスしてほしい」

「お願い」

『fasterbigger1』

げんじあきら

『fasterbigger2』も読んでいただきたい

Faster Bigger 1

げんじあきら